見ると。この說に據れば本篇の意は喬の不遇を悲しむに非ずして、却つてその知時の明、安分の節あるを賞揚したるものゝ如し、亦一說として參に存するを妨げず、然れども細かに下二句を味はふに、我が前解の更に確切なるを覺ゆ、故に從はず。

子夜春歌

郭振

陌頭楊柳枝。已被春風吹。妾心正斷絕。君懷那得知。

子夜歌の源由は、已に首卷李白が子夜吳歌の條下に悉す、今復た贅せず、その四時の歌と稱するは大抵東晉の末に起り、春夏秋冬の景物に託興して以て風懷を詠ず、春歌に於ては「春林花多媚。春鳥意多哀。春風復多情。吹我羅裳開。」夏歌に於ては「反復華鐔上。屏帳了不施。郎君未可前。待我整容儀。」秋歌に於ては「冷秋開窗寢。斜月垂光照。中宵無人語。羅幌有雙笑。」冬歌に於ては「淵冰厚三尺。素雪覆十里。我心如松柏。君情復何似。」と云ふが如きの類屈指するに暇あらず、此にその一を錄す、餘は類推すべし、而して梁の武帝が春歌、則ち云ふ「嚲葉始滿地。梅花已落枝。持此可憐意。摘以寄心知。」と郭元振がこの作、適〻その韻字を同うし、命意も亦約略相近し、豈に窃に規撫する所ありて然る耶、陌頭楊柳の枝、已に春風に吹かる、情緒堪へざるもの自ら箇中に在り、この春色の人を撩すに當りて、婦をして獨り空床を守らしむ、蕩子の懷眞に測り知るべからず、故に「妾心正斷絕。君懷那得知。」と云ふ、怨の至なり、夫の王昌齡が「忽看陌頭楊柳色。悔教夫婿覓封侯。」(閨怨)と云へるもの、拈し來つて本篇の注脚と爲すに足るなり。

郭元振少うして大志あり、通泉の尉と爲るに及んで、放縱不羈、頗る物議を滋す、武后召して之を詰らんと欲し、之と語りて大いにその人と爲りを奇とし、此より遂に重用せらる。太平公主の廢立を謀るに及んで、毅然として睿宗を奉護し、唐室をして簒奪の禍を蒙らしめざりしもの、元振の力多きに居る、故に功を以て代公に封ぜられたり。杜少陵が代公故宅の一篇を讀むに、その凜然たる大節猶ほ想見するに足る。

豪俊初未遇。其跡或脫略。放意何自若。代公尉通泉。
及夫登衮冕。直氣森噴薄。豈伊常情度。磊落見異人。
定策神龍後。宮中翕清廓。指揮存顧託。俄頃辨尊親。
翠公有憁色。王室無削弱。丹青照臺閣。迥出名臣上。
我行得遺跡。池館皆疏鑿。顧步洋橫落。壯公臨事斷。
精魄凜如在。所歷終蕭索。神交付冥漠。高詠寶劍篇。

寶劍篇は則ち元振始めて武后に謁見せしとき上りし所のもの、故に結句に之を用ひたり。元振の人と爲りや此の如くにして而かもその小詩宛轉、旖旎、情を抒ぶること極めて深婉、殊にその人に類せざるもの〻如し、少陵は謂ふ「磊落見異人。豈伊常情度。」と、嗚呼此れ亦眞に常情を以て度り難きものに非ずや。

南樓望

盧僎

去國三巴遠。登樓萬里春。傷心江上客。不是故鄕人。

身は京國を去つて、遠く三巴に客たり、樓に倚つて望めば、萬里みな春、山青く、水綠にして、目を怡ばし心を慰むるの景物なきに非ず、然れども三巴江上往來の客を見るに、盡く是れ他鄕の人のみ、則ち眺望彌〻遠くして鄕愁彌〻切、傷心せざらんと欲するも得べからざるなり、盧僎は中宗の時の人、その鄕里は失傳して考ふべき無し、唐仲言は此作第一句を取りてその巴人たるを證す、これ則ち、首句五字を解して遠く三巴の鄕國を去るの意と爲したるなり。我國僧大典の解頗以爲らく、京國を去つて遠く三巴に在るを謂ふなりと。この解頗る詩の語勢に協へり、且つ第三句「江上客」は首句を承けてその巴江たるを暗示したるもの〻如し、故に唐說に從はず。

汾上驚秋

蘇頲

北風吹白雲。萬里渡河汾。心緒逢搖落。秋聲不可聞。

汾上は漢武の樓船を泛べて秋風を歌ひしの地、萬里の北風、白雲を吹いて以て河汾を渡る、年代は遼遠なりと雖も、風景は依然として昔の如きなり、抑〻漢武は天子の尊を以てして猶ほ爾かく感喟を「歡樂極、哀情多」に致す、況や失意の客子、穉被凄涼、心緒亂絲の如くにして又この搖落に逢ふ、悲哉の秋聲、寧ろ耳に入るに堪へんや、「不可聞」とは聞くに堪ふ可からずの義、聞くに堪ふべからずして而して斗然として之を聞く、その心緒を觸動する、一に猶ほ白雲の爲に吹飛し、木葉の爲に亂下するが如きなり、故に題して「驚秋」と曰ふ。

秋空沆寥、風荒み雲飛ぶ、扁舟の孤客、首を擧げて望む、起二句、眞に是れ一幅秋江獨渡の圖なり、楚辭九歌「嫋嫋秋風。洞庭波兮木葉下。」(湘夫人)この種の雋語、象を取るの雄潤なる、尤も詩家の三復すべき所なり。

蜀道後期

張說

客心爭日月。來往預期程。秋風不相待。先到洛陽城。

日月運行して曾て停輟せず、客心乃ち之と相爭ふ、夙夜に程期を趁うて、肯へて懈ることあることなし、何ぞ秋風の我を待たずして、却つて先づ洛陽城に至れるや、此の如くに立言するときは我れ自ら期に後れたるを認めずして、却つて咎を秋風の待たざるに歸す、期に後れたるの奈何ともすべからざるを辨ずるを須たず、轉た讀む者をしてその洵に奈何ともすべからざるに出でたるを頷頤せしむ、委婉曲折、尤も人の回味に耐へたり。

蜀道後期とは洛より出でゝ蜀に使し、偶〻その歸期に後れたるなり、蜀は禹域の西偏に在り、秋風西より來り、人も亦西蜀より洛に歸る、以て「不相待」三字措語の妙を見るべし「客心爭日月」或は解して云ふ、作者勤王の心、毎に日月と先を爭ふと、然れども句意は只〻歸嚮の念晝夜息まずと謂ふのみ、必ず勤王の一邊に黏定せず。

照鏡見白髮　張九齡

夙昔青雲志。蹉跎白髮年。
誰知明鏡裏。形影自相憐。

姚・宋政を秉り、纔ぐに張九齡を以てす、是を開元の治と爲す、九齡罷められて李林甫出で、林甫出でゝ安祿山至る、是に於て乎天寶の亂あり、玄宗の一朝治亂の岐るゝ所、乃ち繫けて九齡が用罷何如に在り、こ

の篇は蓋しその罷斥後の作、是に至つて復た君王の一顧に値する能はず、獨り影を照らして自ら憐まざるを得ず、その遇たる亦悲しむ可からずや、青雲の夙志、蹉跎して遂げず、歲月流るゝが如く、已に白髮を見る、鏡中の形影自ら照らし自ら憐む、これ豈に宿昔意料中の事ならんや、明、玄宗の如く、賢、曲江の如き、宜しく永く魚水の契合あるべくして、而して却つて參商(參と商は星名)の睽離を致す、人生意外の事往往にして此の如し、見るべし玆篇無限の悲感、亦實に諸を「誰知」の二字に寓したることを。

同洛陽李少府觀永樂公主入蕃　孫逖

邊地鶯花少。年來未覺新。
龍塞始應春。美人天上落。

禹域歷朝、北方諸蕃及び中央亞細亞部落の侵犯に耐ふること能はず、或は宗室の公主を嫁し、或は披廷の美人を贈り、以てその反側の心を杜ぎ、覬覦の念を消せんことを圖る、漢代以來の外交、實に此れを以て唯一の政略と爲したるもの〻如し、是を以て烏孫馬上の琵琶、哀韻空しく斷え、昭君月下の環佩、幽魂歸ることなし、霜來る信あるも、朔雁に向つて寄せ難く、骨化して塵と爲るは、胡砂と與に無量、永樂公主の如き蓋しその一なり。玄宗の開元三年、契丹の首領李失活なるもの、その種落を率ゐて內附す、乃ち失活を封じて松漠郡王と爲す、明年失活入朝す、玄宗因つて宗室外甥女楊氏を以て永樂公主に封じ之に妻す、逖が玆篇、便ち

開元四年の作たるを知るべし。邊地既に鶯花なければ、年來り年去るも、何を以てかその新舊を別せん、而して今や花の如きの美人は天上より落ちたり、龍塞の蓄民庶幾くは此より、始めて春の春たる所以を省識すべきなり、美人を以て鶯花に關照す、故に「落」と云ふ、第二句は則ち末句「春」の字のために逆勢を蓄ふ、これ二十字線索貫串の巧。

「美人天下落」暗に惋惜の意を寓す、然れども詩は則ち契丹の蕃王この恩惠に感じて永く和好を失はざらんことを希圖するの意を以て正面とす、故に公主のために悲傷するの語を着けざるなり、解する者或は曰ふ、天上の美人を以て、花草なきの地に入るは、良に亦苦なり、彼の公主果し能く龍塞をして春を生ぜしめん乎と、或は曰ふ胡地の榮耀は乃ち我の傷悲なりと、並に詩の正意に於て、未だ太だ膏騰たるを免れず。

靜夜思

李白

牀前看月光。疑是地上霜。
舉頭望山月。低頭思故鄉。

詩の「神」を以て行ふは、人をしてその「意」を「言」の外に得しむ、遠きが若く、近きが若く、無きが如く、有るが如く、雲の天に於ける月の水に於けるが如く、心に得て之を會するも、口に得て之を言ふ能はず、絶句概ね此の如くならざるべからずして五絶尤もこれを貴ぶ。故に胡應麟は嘗て曹植の古詩、杜甫の律、

欠

滿す、「靜夜思」の篇と工力相敵して甲乙すべからざるものなり。朱晦庵、太白を以て詩に聖なるものとす、（校訂者云ふ。「李太白詩。非無法度。從容於法度之中。蓋聖於詩者也。」朱子全書卷六十五）蕭士贇その語を引いて以て之を贊す、實に阿好に非ず、玉階に露坐するは、待つの久しきなり、待つて來らず、簾を卸して入る、絶望の至なり、既に入つて猶ほ寐ること能はず、月を望んで徘徊し、以てその情を抒ぶ、豈に怨に深きものに非ずや、濟南の本選、此を捨てゝ彼を取る、安んぞ澶漫の譏を解くことを得ん耶。

秋浦歌

白髮三千丈。　緣愁似個長。
何處得秋霜。　不知明鏡裏。

秋浦は地名、古への宣城郡に屬す、太白久しく宣城に客たり、秋浦歌十七章を作る、その第四章に云はく、「兩鬢入秋浦。一朝颯已衰。猿聲催白髮。長短盡成絲。」と、此れ則ち宜しく、本篇の序文と做して見るべきなり。凡そ古人の詩歌、連章のものは斷として割裂を加ふべからざること、已に屢〻之を言へり。今忽然この一章を取りて、仍ほ題するに秋浦歌を以てす、誰か恠訝の念を生ぜざるものあらんや。顧ふに兩鬢の二十字、その第四に在り、本篇その第十五に在りて、自ら首尾を爲す、是に於てか古人の章法決して苟もしたるもの無きを見るに足る、此れ細事と雖も、必ず辨ぜざるべからざるものなり。

欠

起句突如として來り、第二句を以て之を解す、是れ倒裝の法、然れとも三千丈の語、幻出して甚だ奇なるを以て、往々粗心の輩の口實を滋す。故に蕭士贇は云はく、この詩、爾形泥跡の人、多く疑を三千丈の語に致す、蓋し詩人遣興の辭、その形容を極むるのみ、觀る者當に文を以て辭を害せず、辭を以て意を害せざるべきなりと。王琢崖は云はく、起句惟甚だし、下文の一解を得て、字字みな妙義を成す、洵に老手に非ざれば能はず、尋章摘句の士、安んぞ以て此を語る可けんやと。然れども詩人は必ずこの種放誕の懷を具せんことを要す、白髮の長を狀して三千丈と曰ふ、本と是れ詩家の常事のみ、若し疑を此等に挾むものあらば此れ則ち詩趣を知らざるの人なり、詩趣を知らざるの人に向つて百方解說を試む、將た何の益かあるや、無用の辨なりと言ふも、想ふに甚だ武斷ならざるべきなり。

髮は愁に因つて白し、愁既に長ければ髮も亦長し。然れどもその自ら照らすに及んでは、反つて鏡中何處よりこの愁霜を得たるかを疑ふ、宛も自らその白髮たるを認めざるもの〻如し、是れ衰老の早きを驚歎する の意を逆寫せるものにして、絕世の奇文なり。蕭士贇曰はく、活活脫脫、眞に作家の手段なりと、活活脫脫の四字善くこの趣を評し得て出でたり。唐仲言曰はく、託興深微にして辭實解し難し、讀者當に之を意象の外に求むべしと、亦能く水中の鹽味を知る。

「白髮緣愁百尺長」（和江秀才獻花）とは陳后山（師道）の句、「繰成白雪三千丈」（示僧秀老二首）とは王荊公（安石）の句、並に太白がこの語の奇なるを以て之を用ひたるものなり、乾隆帝謂へらく、陳は仍ほ自然なるも、王は斧鑿の痕ありと、同一事を用ひ、同一語を成してその間に徑庭を生ずる此の如し、是れ詩の天分と興會とに待つ所以なり。

獨坐敬亭山

衆鳥高飛盡。　孤雲獨去閑。
只有敬亭山。　相看兩不厭。

敬亭も亦宣城に在り、所謂謝家の青山則ち是れなり。鳥飛び雲去る、陶淵明の語に本づく（校訂者云ふ。歸去來辭に「雲無心而出岫。鳥倦飛而知還」とあり。）、その悠然自得の處、亦大いに靖節に似たり、「兩不厭」と云ふものは、我れと山となり、獨坐の神理を阿堵の中に傳ふ、亦妙は一字を著けざるに在り、衆鳥孤雲は並に獨坐の所見、無心にして景情相會す、是を天籟と曰ふ。

唐仲言の解、鳥飛び雲去る、厭ふ時あるに似たり、相厭はざるものを求むれば、唯この敬亭而已と、是れ無心を强ひて有心と爲し終に言筌に墮つ、その解甚だ謬。胡應麟の評、絕句は含蓄を貴む、この詩は太だ分曉なりと、是れ至味の澹汨中に存するを知らず、徒らに客吹索を事とす、その評甚だ臆。

見京兆韋參軍量移東陽

潮水還歸海。　流人卻到吳。
淚盡日南珠。　相逢問愁苦。

顧寧人(炎武)の日知錄に云ふ、唐朝の人、罪を得て遠方に貶竄せられ、のち、赦に遇うて近地に改む、之を量移と謂ふ(卷三十二)と、この解極めて明晰、東陽は唐の婺州東陽郡にして卽ち吳中の地なり、これを以て詩意を合參するに、蓋し韋參軍始め日南に遷謫せらる、日南は唐の驩州にして今の閩海の地なり、旣にして赦に遇ひ東吳に量移す、是に於て太白と相見て白乃ちこの贈あるなり。相傳ふ、日南郡の海中多く珠を產す、昔、鮫人あり、水中より出て、人家に寄居して絹を賣る、去るに臨んで主人より器を索め、泣いて珠を出し盤に滿ち、以て主人に贈ると。洞冥記に日南の人長さ七尺、象に乘りて海底に入り、寶物を鮫人の宅に求めて淚珠を得たり、則ち鮫人泣く所の珠なりと、無稽の談に屬すと雖も亦古來の傳說する所なるを見るべし、末句は此を點化して用ふ。

潮水は自ら海に歸るの時あり、以て流人も亦應に歸朝の日あるべきを興ずるなり。而して今は僅かに東陽に量移せらるゝことを得たるのみ。故に一「卻」字を用ひて其意を申明せり、相逢うてその謫宦以來の愁苦を問ふに「千萬無量、實に言詞の能く悉す所に非ず、已むことなくんばそれ惟、「淚盡日南珠」の五字あるのみ、嗚呼日南の珠を擧げて盡くその淚の生ずる所たる耶、抑〻日南の珠盡く化してその淚と爲る耶、則ちこの五字、兩意環生、眞に萬斛の淚點の在るあり。唐仲言の徒、量移の本義に於て明解を得る能はず、終に東陽と日南を混じて一と爲し、日南は珠を產す、韋將に往かんとす、故に泣淚の多き、將にこの珠と俱に盡きんとするなりと言ふ、爾後の諸解多く之に從ふ、みな深く考へざるの過なり。

臨高臺送黎拾遺昕　王維

相送臨高臺。川原杳無極。日暮飛鳥還。
行人去不息。

高臺見る所の景を寫して希音冷然、目に飛鴻を送る、川原の杳乎として極なきもの、卽ち是れ行人の去路、飛鳥の歸るは日暮のため、人の去つて息まざるは路遠きに因る、今、歸飛の鳥を見て、行人の益〻遙かなるを念ふ、留るもの將た何を以てか情を爲さんや、平空に寫し出して情態を露はさず、是れ最も詣り難きの境とす。

辭秀調雅、意新理惬、在レ泉爲レ珠著レ壁成レ繪、一字一句、皆出二常境一、是れ前人が靡詰の定評、筆を縱ち思を措く、每に造化に參す、洵に三昧を得たるものに非ずんば作る能はず、獨り作る能はざるのみならず、抑〻亦之を賞識する能はざるなり、臨高臺は古樂府の曲名、樂府題に依據して別に生面を開く、是れ李青蓮が不傳の祕、當時靡詰が小詩亦之を得たり。

班婕妤　王維

恠來妝閣閉。朝下不相迎。
總向春園裏。花間笑語聲。

班姫に團扇の篇ありしより、古來姫を詠ずるもの、此れを以て落想せざるはなし。王摩詰が班婕妤の詩凡そ三章、此れその第二に屬す、その一に云はく、

宮殿生秋草。　君恩幸疎。　那堪聞鳳吹。　門外度金輿。

その三に云はく、

玉窗螢影度。　金殿人聲絶。　秋夜守羅帷。　孤燈耿不滅。

並に一の團扇、秋風の事に渉るものなし、而して婕妤が幽怨、逐層に傳出し、却つて之を他人に移し得ず、是を善く寞臼を脈すとは謂ふなり。班姫は初め漢成帝の大幸を受けたりと雖も、正言を以て同輦を辭するに至りて、その迎恩沾寵のものに非ざるを見る。趙飛燕・合德姉妹が微賤より起りて盛んに寵幸を得るに及んで、凉風の君が懐袖に動くことを知り、自ら請うて長信宮に退居し、以てその嬌妬の禍を避く、誠に是れ聰明絶世の女子にして、亦能く禮を以て自ら持し、幽閑貞靜の德を具したるものと謂ふべし。摩詰の本篇則ち能く僅僅二十字を以て直ちにその性格を摘出し、宛然としてこの怜悧にして端莊なる婦人の心篇を剔抉して觀るが如し、詠古に神なるものに非ずして何ぞや。

妙は起二句の故らに疑陣を布き、三四全然他事を以て、不解の間に之を解し得たるに在り、人或は我が近來粧閣に閉居し、內廷の常例に依つて一たび君前に朝見するの外、曾て人に迎接せざるを惟しむものあらん、然れどもたとひ相迎へて春園に向ふとも大抵花間に徘徊して嬉笑を爲すに過ぎざるのみ、固より他好あるに非ざるなり。夫れ花間語笑の聲、子細に思量せば、將た復た何の趣味かあるや、是れ我れの出でざる所以なりと、その寵を爭ふに意なきや、言下に了了、一「總」字下し得て殊に冷味多し。

朝下とは朝見より下り來るの義、朝見は是れ常例を以て君前に伺候するを言ふ、恩幸を得るの謂に非ざるなり、僧大典この二句に於て、上句を疑問と爲し、下句を答詞なりとす、故に解して粧閣に閉居するを惟み問はゞ、是れ全く一朝して後、宮娥の我れを迎へて共に入御せしむること無きがためなりとせり、予は必ずこの二句を以て連續のものと爲す、然らずんば旨意太だ淺露なるの嫌あればなり。但、大典が杜牧の宮詞を引き、

監宮引出暫開門。　隨例須朝不是恩。
月明花落又黃昏。　銀鑰却收金鎖合。

を以て亦この意なりと注せるは大いに好し。

本事詩に云はく、天寶中、宗室寧王、貴盛を極め、寵妓數十人を蓄ふ、その邸宅の左側に賣餅師の妻あり、纖白明媚人を動かす、寧王一見して意を屬し、厚くその夫に賂ひて之を求め、寵愛等輩を踰ゆ、歲餘にして王問うて曰はく、汝復た餅師を憶ふや否やと、因つて之と相見しむ、その妻注視して、雙涙頻に垂れ、情に勝へざるものゝ如し、時に王の坐客數十人、みな當時の文士なり、之を見て悽異せざるもの無し、王因つて此れを題として詩を賦せしむ、王摩詰先づ成りたり。云はく、

莫以今時寵。　難忘昔日恩。　看花滿眼淚。　不共楚王言。

蓋し息國夫人の事を用ふ、坐客肯へて繼ぐものなし、王乃ち妻を餅師に歸し以てその志を終へしむと云ふ。摩詰がこの作亦能く自己が意想を以て、打して婦人が、心篇裏に入り、その言ふべからざるの幽怨苦楚を傳出す、寧王の婦を還せしもの、婦の情を感ずるに非ず、詩に感ずる深きが故のみ、その婉深凄斷の趣ほぼ班婕妤が篇に似たるものあり、因つて此に附記して談助と爲す。

雜詩

已見寒梅發。　復聞啼鳥聲。　愁心視春草。
畏向玉階生。

忽にして梅發き、忽にして鳥啼き、忽にして草長ず、節物風光、人と相待たずして、春已に漸く深し、草の玉階に生ずるは人踪到ること罕なればなり。思ふ所終に見えず、待つ所竟に來らずんば、悠悠忽忽として芳年を虛度し了せざるを得ず、故にこの愁心を持して春草を視る、惟〻その堦前に向つて生ぜんことを畏るるなり、以て閨人感春の辭と爲すも可、以て志士感遇の作と爲すも亦可、その岑寂無聊に勝へざる情は則ち一なり。

鹿柴

空山不見人。　但聞人語響。　返景入深林。
復照青苔上。

以下は則ち輞川唱和の詩、摩詰その友裴迪と俱に、茶鐺・藥臼・經案・繩床間に於て、日に嘯詠唱和を事とせし閒中の清課なり、鹿柴の柴は砦に同じく、群鹿を飼養せるの柵圈を謂ふなり、詩は題面に黏往せず、唯〻その傍近の景致を寫して幽韻獨絶す、人を見ずして但〻人語を聞く、その一段の深幽反つて聞かざるに勝る、返景林に入つて、復た青苔を照らす、その冷澹自在なる、眞に所謂悠々たる天鈞、之を攫ふれば幽然として水の谷に赴くが如く、之を釋けば蕭然として葉の木を脫するが如きものなり。或は謂ふ摩詰は多く淵明に出入す、獨り輞川の諸作最も近く、その趣を探索してその詞に擬せず、「結廬在人境。而無車馬喧」（飲酒）とは喧中の幽なり、「空山不見人。但聞人語響。」とは幽中の喧なり、此の如くに變化して方に三昧の法門に入ると、この言亦何ぞ嘗て是ならざる、而かも之を形跡の閒に求むるに至つては、未だ之を看るの淺きを免れず、凡そ詩の神思超詣の處は斷じて此等に在らざるを知るべきなり。

李西涯（東陽）は曰はく、詩は意を貴む、意は遠を貴んで近を貴まず、淡を貴んで濃を貴まず、濃にして近なるものは識り易く、淡にして遠なるものは知り難し。杜子美が「鉤簾宿鷺起。丸藥流鶯囀。」（水宮朝雲 簷蟬明暦）李太白が「桃花流水杳然去。別有天地非人間。」（山中問答）王摩詰が「返景入深林。復照青苔上。」みな淡にして愈〻濃、近にして愈〻遠なるもの、知者と道ふ可く、俗人と言ひ難し、王介甫（安石）は之を得て、「靜看蒼苔紋。莫上人衣來。」（春晴）と曰ひ、虛伯生（集）は之を得て「不及清江轉柁鼓。洗盞船頭沙鳥鳴。」と曰ひ、又「繡簾美人時共看。堦前青草落花多。」と曰ひ、楊廉夫（維禎）は之を得て、「南高峰雲北高雨。雲雨相隨惱殺儂。」と曰ふ、戶を閉ぢて車を造り門を出で〻轍に合するものと謂ふべしと（麗堂詩話）、その擧ぐる

所未だ不倫免れざるものありと雖も、持論は則ち觀るべきものあり。

東坡、廉詰の畫像に題して云ふ、「前身陶彭澤。後身韋蘇州。欲覓王右丞。還向五字求。」と、蓋し詞簡にして味長し、右丞の五絶、此れを絶頂と爲す。王阮亭は云ふ、嚴滄浪禪を以て詩に喩ふ、余深くその說に契す、而して五言尤も之に近しとす、王・裴が輞川の絶句の如きは字字禪に入れりと（帶經堂詩話卷三觀喩）、而してその卽目の一絶。

蒼蒼遠燃起。　械械疎林響。　落日隱西山。　人耕古原上。

本篇を規撫して妙造自然、殊にその神似を得たるを覺ゆ、若し所謂神古異より出で淡として收むべからざるものに至つては、固より是れ右丞の擅絶、學んで能く到るべきに匪ざるなり。

竹里館

獨坐幽篁裏。　彈琴復長嘯。　深林人不知。
明月來相照。

彈琴長嘯の聲、人の知る能はざる所以は竹林殊に深ければなり、唯、天上の明月、則ち來つて相照らす、この趣人の知り易からざる所にして、月は會意の如きあり、その偶然託興、肯へて着題、摸擬せざる所實に前詩と相髣髴し、人をして冷然として善からしむ。

輞川の唱和、後來の門逕を開くこと少からずとは宋漫堂（華）の說く所、今本選僅かにその二を收む、看る者未だ饜飫せず、因つてその一二を下に錄す。木蘭柴に云はく、「秋山斂餘照。飛鳥逐前侶。彩翠時分明。夕嵐無處所。」南坨に云はく、「輕舟南坨去。北坨淼難卽。隔浦望人家。遙遙不相識。」欒家瀨に云はく、「颯颯秋雨中。淺淺石溜瀉。跳波自相濺。白鷺驚復下。」辛夷塢に云はく、「木末芙蓉花。山中發紅萼。澗戶寂無人。紛紛開且落。」余は最もその裴迪に答ふる作、

淼淼寒流廣。　蒼蒼秋雨晦。　君問終南山。　心知白雲外。

の二十字を愛す。阮亭謂へらく、妙諦微言、世尊の拈花、迦葉の微笑と等しく差別なし、その解に通ずる者、上乘を悟るべしと（帶經堂詩話卷三觀喩）、この種是れなり。

長信草　崔國輔

長信宮中草。　年年愁處生。
不使玉階行。　時侵珠履跡。

長信は漢時の冷宮にして君王の來幸せざるの地、卽ち班婕妤が失寵の後退いて居らんことを願ひし所なり、婕妤賦を作つて云はく、「奉共養于東宮兮。托長信之末流。華殿塵兮

玉階苔。中庭萋兮綠草生。」と、本篇の用意此に根す、蓋し亦借つて班姬の幽怨を寫すなり。

長信已に冷宮に屬す、是れその草は則ち年年愁處に生ずるなり、既に愁處に生ず、この草便ち能く君王が履跡を侵し、逕路を封合して爲に君をして玉階に行くこと能はざらしむ、六朝宋の劉孝綽が長信宮中の草を詠ずるに云はく、「委翠似知節。含芳如有情。全由履跡少。併欲上階生。」と、是れ順筆を以て怨意を正寫す、本篇は之を翻用し、この草却つて意あつて君の恩幸を斷絶せしむるものの如く立言し、怨を草に歸したり、是れ順を化して逆と爲すものにして、點化の妙を味はふべきなり。

少年行

遺却珊瑚鞭。白馬驕不行。章臺折楊柳。春日路傍情。

正面より之を見れば只、是れ鞭を遺下す、故に馬行かず、馬行かず、故に柳を折つて之に代ふ、淡淡然として春日路傍の情景を寫すに過ぎざるのみ、若し反面より之を尋繹すれば、則ちその餘味盎然として窮りなく、一箇冶游の少年紙上に活跳す、蘊蓄の文字、百回讀を厭はざるもの便ち是れ。

五陵の少年、游俠習と爲り、金玉を視る土石も啻ならず、既に珊瑚を以て鞭と爲して、則ち復た之を遺却することを顧みず、見るべし白馬の驕れるは馬の驕れるに非ずして實は少年の驕れるを。章臺は長安倡家の

在る所、街上又多く柳を植う、柳を折るの他處に在らずして、偏へに章臺に在り、則ちその意言はずして知るべし、洵に白馬の行かざるに非ず、實は少年この路傍の花柳に調情する所あり、故に肯へて行かざるのみ、漢の張敞、馬を章臺街に走らす、張敞は畫眉京兆を以て有名なるもの、章臺の花柳の地たるは、獨り唐時に於けるのみならず、漢代よりして已に然りしなり。

崔國輔は儲光羲・綦毋潛と同時、天寶中竟陵の司馬に貶せらる、昔人稱すその詩、婉孌清楚にして、深く諷詠に宜し、樂府短章は古人も過ぐる能はざるありと、又宋漫堂（犖）は李謫仙と並列して五絶の擅場なりと稱す、以てその價値如何を品定すべきなり。

送朱大入秦

孟浩然

游人五陵去。寶劍直千金。分手脫相贈。平生一片心。

五陵は長安に在り、長安は古へ秦の地なり、朱大、將に長安に向つて去らんとす、故に我れ千金の寶劍を惜しまず、分手に臨んで脫して以て贈と爲す、劍の重しとするに足るには非ず、實に我が平生一片の心を表せんと欲するのみ。一二、游人と寶劍とを雙提し、三四、隔句に之を解釋す、音短く節急にして、優に男兒の意氣を見る。杜少陵が「少年別有贈。含笑看吳鉤。」（後出塞）と軒輊する所を知らず、李長

吉が「直是荊軻一片心。」（春坊正字劍子歌）亦此に本づけり。

東坡云ふ、孟襄陽の詩は佳ならざるに非ず、惜しむべし作料少しと、然れども作料の多少を論ずるは、古詩長律に於てすべきも、絶句短章に於てすべからず、故に施愚山（閏章）は之を駁して、東坡の詩、佳ならざるに非ず、惜しむべし作料多し、夫れ詩は人の眸子の如し、一點の靈光この中に金屑を着し得ず、作料は豈に詩中に在つて求むべけんやと云へり、この論若し之を古詩長律に施さば、亦矯枉過正の弊なからず、而して孟襄陽が本編の如きに至つては、正に所謂眸子一點の靈光なるもの是れなり。

春曉

春眠不覺曉。　處處聞啼鳥。
花落知多少。　夜來風雨聲。

蕭子顯云へるあり、高きに登りて目を極め、水に臨んで歸るを送る、早雁初鶯、花開き葉落つ、來ることあれば斯に應ず、毎に已むこと能はず、その自ら來るを須つ、力を以て構へずと、是れ詩の興會神到の候を解疏するもの、王士源は孟浩然の詩を序して、製作ある毎に、佇興して就ると謂ふ、佇興の義亦此れに外ならず。浩然がこの作、春睡未だ褥を離れざる時に就いて、その閨中の靜思を寫す、眞情・實景・妙、名づくべからず、參し來れば誠に是れ一時の佇興中に無限惜春の意を含めること、所謂淨名の默然、達磨の得髓と同一

の關捩あるものなり、その自ら來るを須つ、力を以て構へず、鈍根初機の人、常にこの語を三復して可なり。

襄陽この種一片の化機、深く王摩詰と契合す、故に右丞手づからためにその吟詩の圖を作るに至る、葛立方の記する所に據れば、右丞その圖の上に題して云はく、維嘗て孟公が吟を見るに、曰はく「挂席幾千里。名山都未逢。泊舟潯陽郭。始見香爐峰。」とその風調を美なりとし、素軸に圖す云云、その後に張洎の題識あり、言ふに據れば、王右丞が襄陽吟詩の圖は、筆跡神妙を窮極す、襄陽の狀、頎にして長く岋にして瘦せ、白袍を衣し、韡帽重戴し、欵段馬に騎る、一童、總角なるもの、書笈を提げ、琴を負うて從ふ、風儀落落として、凜然生けるが如しとあり、その詩を愛して終にその人を圖す、二家神契の眞に深きを見るべし、王・孟名を齊しうして、千古廢せず、自ら是れ君が身に仙骨あるなり。

洛陽訪袁拾遺不遇

洛陽訪才子。　江嶺作流人。
何如此地春。　聞道梅花早。

此れ蓋し袁拾遺の嶺外に遷謫せられしを知らずして之を訪ひ、已に流人と作りしと聞いて之を惋惜す、嶺梅は早しと雖も、何ぞ洛中の春に如かんや、率然命筆して轉た痛悼に勝へざるものあり、所謂淺語にして情を盡くせるものなり。

王阮亭その居易錄に於て自ら記して云はく、汪鈍翁嘗て予に問ふ、王・孟名を齊しうす、何を以てか孟は王に及ばざるや。予曰く、正に襄陽の未だ俗を免るゝ能はざるを以て耳と、汪深く之を然りとす、且つ曰はく、他人從來見て此に到らず云云と、王又之をその漁洋詩話に載す（帶經堂詩話卷一品藻）、平生得意の談たるを知るべし、然るに汪鈍翁が說鈴を觀るに、云ふ、王推官（阮亭を謂ふ）予と唐の王・孟の詩を論ず、余謂ふ襄陽は稍俗に涉ると、王丞かに歎じて知言と爲す云云。此れに據れば孟を以て俗に涉れりと爲すは、卽ち鈍翁が言なり、二家各〻その自筆に出づ、未だ烏の雌雄を辨ずる能はずと雖も王・汪初め相得て後ち相睽く、想ふに亦この種爭名損美の念の胸中を去る能はざりしに由れるならん、顧みて今人を見れば、この類實に往往にして有り、故に襄陽の短絕を評釋するに於て偶〻一たび此に及ぶ。

洛陽道獻呂四郎中

儲光羲

大道直如髮。春日佳氣多。五陵貴公子。雙雙鳴玉珂。

儲光羲は兗州の人、開元中監察御史と爲り、安祿山の亂、終に賊中に陷り、輒ち僞署を受く、賊平らぐの後、此れを以て嶺南に貶死す、是れ實に王右丞・鄭廣文等とその非運を同じくして而かも更に不幸なるものなり、儲の詩その源亦彭澤より出づ。王・孟・韋・柳の間に介して、特に一席を擅らにし、未だ肯へて輒ち下らず、殷璠は評して格高く調逸に、趣遠く情深し、常言を削盡す、風騷の迹を挾み、浩然の氣を得たり、覽るものは猶ほ韶濩の音を聽く如く、先づ桑濮（桑間・濮上）の耳を洗はゞ、賞音に庶幾からんと云ふ。欒城遺言（蘇轍）にも亦儲の詩、高處は陶淵明に似たり、平處は王摩詰に似たりと稱す、劉須溪はその采菱詞を評して、製欵備さに至る、多きに在らず、深きに在らずとし、その田家雜興を評して、陶に比すれば差〻健にして贍なり、然れども各自に好しと云へり、然れども王漁洋は以爲らく、孟浩然・王昌齡・常建・劉眘虛・李頎・綦毋潛・祖詠・盧象・陶翰の數人はみな廢詰と相頡頏す、獨り儲光羲の詩は龍虎鉛汞の氣多く、田園樵牧の諸篇又迂闊にして事情に切ならず、古今儲・王と稱するは何ぞやと（帶經堂詩話卷一品藻）、是れ大いに儲を抑す、人の嗜好同じからざるかくの如し、平心に論ずれば、儲の古詩は或は推して第一流と爲す能はざるものあらん、若し絕句短篇に至つては、則ち他に覩て遜色ありと云ふことを得ず、天下固より完人少し、その能ありて不能ある亦何ぞ多く諱まんや、孟と雖も亦然り、獨り儲のみに非ざるなり。

大道の一直線なるを狀して如髮と云ふは、鮑照が「馳道直如髮」（都人士）の語に根するなり、本篇只〻道中見る所のものを直寫す、玉珂は馬勒を飾れるものなり、五陵の貴公子、雙雙珂を鳴らして過ぐ、その意氣の揚れる、句字の外に見ゆ、唐仲言は云ふ、蓋し詩經の「綢繆束薪、三星在天」の句を用ふ、蓋し世胄は高位に躡り、英俊は下僚に沈むの意ありと、此れ善く反面より作者の微旨を摘明したり。行路の俗謠に云はずや、

「別人騎馬我騎驢。子細思量我不如。回頭只一看。還有挑脚漢。」

と彼の意氣甚だ揚れるもの、何すれぞ少しく思はざるや、筆を用ひ思を遣る此の如し、以て風すべきなり。唐仲言又言ふ、詩に五陵を云ふ、題は當に長安道に作るべし、洛陽と云ふは誤なりと、然れども唐時已に洛

陽を以て東京と爲す、東西京の間、官人の往來自然に絶えず、安んぞ五陵の貴公子にして洛陽道に在るなきを保せんや、この解恐らくは穿鑿に屬す。

長安道

鳴鞭過酒肆。　袨服遊倡門。　百萬一時盡。
含情無片言。

此れ亦揮金蕩子が一時豪邁の氣貌を狀出す、崔國輔が少年行と同意なり、但、彼れは稍〻婉曲、此れは頗る坦率なるのみ。

「含情無片言」の句、古來みな之を蕩子の一邊に就いて之を解し、百萬金を一擲すとも、片言の之に及ぶなし、即ち惜しまざるの意なりとす。然れども含情の二字甚だ着落なし、故に余は必ず之を娼婦の一邊に移し去らんと欲す、鳴鞭袨服して、酒肆倡門に出入し、百萬を一擲して以て美人が一笑を買はんと欲するも、彼れは只聊か含情して以て迎ふるのみ、曾つて一語の謝辭に及ぶことなきなり。蓋し蕩子游客、豪奢の程度愈〻高ければ、美人の性、隨つて愈〻高傲となり、珠玉寶物を前に羅すと雖も、輕易にその顰笑を呈露せざるを謂ふ。唐時長安狹斜の盛は、一に我が德川時代の中葉に於ける北里の如し、故に我れその倡家の風俗必ず此の如きものあるを信じて疑はず。

關山月

一雁過連營。　繁霜覆古城。　胡笳在何處。
半夜起邊聲。

關山月は樂府鼓角橫吹詞の一にして、即ち笳中に吹く所の曲名なり、塞上正に秋にして、野營相連なる、一雁啼き度りて、霜古城を覆へり、邊庭の風色、凄慘已に堪へず、何來の胡笳ぞ、夜半に忽ち邊聲を起す、何人か千端の離緒を觸動し、萬種の悲感を牽惹せざるものあらんや、先づ邊景を寫し、次に胡笳を寫すは、この時に當つてこの聲を起す、眞に征夫の樂み聞く所に非ざるを形せんが爲なり。

通篇現前の事物、少しも斧鑿を加へず、上の二首亦然り、一見甚だ味なきが如く、咀嚼して始めてその津津たるを知る。張蕭亭(實居)は儲の眞率を擧げて、李白の飄逸、杜甫の沈鬱、孟浩然の清雅、王維の精緻、王昌齡の醲俊、高適・岑參の悲壯、李頎・常建の超凡と對稱し、沈歸愚は儲が詩、陶を學んでその朴實を有すと謂ふ、所謂眞率朴實、此れを以て以上の三篇を求め、中に古雅の味あるを知らば、庶幾くは思ひ半に過ぎん。

送郭司倉

王昌齡

映門淮水綠。　留騎主人心。
春潮夜夜深。　明月隨良據。

王昌齢は七言絶句を以て擅絶の譽あり、直ちに李謫仙と雁行す、五絶の如きは固とその長に非ず、然れども此れ但〻その七絶に如かずと云ふのみ、五絶に工ならざるには非ず、本篇の如きは抑〻何ぞ情を用ふるの婉約にして、詞を措くの深長なるや。

淮水門に映ず、以て客騎を留むるに足る、別れに臨んで祖餞す、主人の情深きこの水の如きあり、明月相隨ふ、依依捨て難く、春潮夜至つて倍〻憑を長ず、明月の句は行く者の思ひ、春潮の句は居る者の情、作法を以て言へば明月・春潮、並に映門淮水綠の五字より引出す、ほぼ楊盈川が趙氏連城璧と相似たり。

答武陵田太守

仗劍行千里。　微軀敢一言。
不負信陵恩。　曾爲大梁客。

大梁は魏の都する所、魏の公子信陵君が事は今疏注を須ひず、蓋し昌齢、田太守の厚遇を受く。故に信陵を以て之に比するなり。今や劍に仗りて將に千里の程に上らんとするに際し、微軀卑賤なりと雖も、敢へて請

ふ一言せん、他なし、身已に我家の賓客として異常の待遇を蒙る、この恩長く肺腑に銘し、沒生肯へて相負かざらんことを誓ふと云ふ爾。昌齢人と爲り小節を顧みず、細行を護せず、故を以て終に龍標尉に貶せらる、その倜儻不屈の概、亦實に二十字中に見はれたり、後、刀火の際を以て竊かに鄉里に歸り、刺史閭丘曉の忌む所と爲り、終に害に遭ふ、既にして張鎬軍を河南に按ず、兵大いに集まる、丘曉獨り期に後れたり、鎬怒つて將に之を戮せんとす、丘曉家に老親あるを以て哀を乞ふ、鎬曰はく、王昌齢の親は誰れと與に養はんと欲するや、丘曉默然たり。この一事亦以て昌齢が才名の一時卿大夫の耳目を聳動したるものあるを徵すべきなり。

孟城坳

結廬古城下。　時登古城上。
今人自來往。　古城非疇昔。

裴廸

裴廸・輞川の諸作、清眞古澹、靡詰と各〻妙緒を抽んで、斷として遜庭を加ふべからず。劉須溪(辰翁)は裴を以て王に及ばずとし、鑿鑿之を言ふ、然れども試に王が孟城坳の作を擧げて本篇と對照せんに、王は云ふ、

新家孟城口。　古木餘衰柳。　來者復爲誰。　空悲昔人有。

古拙を以て詞として、中に感慨を寓する淺からざるは、兩首誠に相同じと雖も、一字着けざるの妙、轉た裴を以て勝れりとするの觀なからず、單にこの一首に視ても、已に劉辰翁の說の定論に非ざるを知るべし、或

は云ふ、廸が詩佳なるものは獨り輞川の諸作のみ、然れども王は多く題外に於て詞を屬し、裴は題に就いて意を命ず、佞倆自ら別なりと、此れ又未必の論に屬す、何となれば詩は固より題を離れて佳なるものあり、（上に錄せし王維が蹕槃の作の如き）亦題に卽いて妙なるものあり（本篇の如き）、此れこの妙を以て彼れの佳に換ふること能はざると同じく、彼れの佳亦實に此れの妙を掩ふこと能はず、且つ蹕詰の詩と雖も、上に錄せる孟城坳の作の如きは亦題に就いて意を命じたるものに非ずして何ぞや、故に吾れは左右肩を袒して以て王阮亭が「王・裴、輞川の唱和は工力悉く敵す、劉須谿意あつて裴を抑するは謬論なり。」（帶經堂詩話　卷四刪訂）と云へるに同意せんと欲す。

鹿柴

日夕見寒山。　便爲獨往客。　不知松林事。
但有麑麚跡。

鹿柴たるに依つて「麑麚跡」と云ふ、所謂題に就いて意を命じたるものなり、この一篇の「空山不見人」に及ばざるは或は當に此れあるべし、此れ猶ほ孟城坳一篇の王・裴に及ばざると等しく、鶴長鳧短、各〻自ら相待つ、故に工力悉く敵すとは謂ふなり、日夕獨往せるは、寒山を見るがため、松林間の事物は固より關知する所にあらず、但〻路に麑麚の跡あるに依りて、此れ卽ち鹿砦たるを知れるのみ、幽人獨往の思、眞に此の如きものあるべし、王に及ばずと云ふと雖も、亦未だ曾て高絕幽ならずんばあらず。楚辭（招隱士）に云ふ、

「白鹿麑麚兮或騰或倚」と、注に云はく、麑は麋なり、麚は牝鹿なり。

裴の作仍ほ王の例に依りて二三を中に摘す、木蘭柴に云はく、「蒼蒼落日時。鳥聲亂溪水。緣溪路轉深。幽興何時已。」宮槐陌に云はく、「門前宮槐陌。是向歌湖道。秋來山雨多。落葉無人掃。」南坨に云はく、「孤舟信風泊。南坨湖水岸。落日下崦滋。清波殊淼漫。」白石灘に云はく、「跂石復臨水。弄波情未極。日下川上寒。浮雲澹無色。」無絃の琴音、獨り天風に彈す、人をして蕭寥として遺世の想あらしむ。

後來顧況が樂府（悲歌）に

城邊路。　今人犁田昔人墓。　岸上沙。　昔時江水今人家。

と云へるは、蓋し裴が孟城坳より脫化す、近日の蹕槃（刪が、

一灣碧水疎籬護。　今人栽花昔人墓。　今人又作墓中人。
惟有花開客來去。（樊榭山房集卷七、蹕槃城南看花作）

と云ふに至つて語意更に一層を進む、廸が音節最も古なるものと對觀すれば遞變の理を悟すべきものあり、因つて附記を加ふ。

復愁

杜甫

萬國尙戎馬。故園今若何。昔歸相識少。
早已戰場多。

此れ復愁十二首の一、蓋し少陵夔に流落せる時の作、復愁の義、浦二田說き得て好し、曰はく公の懷、時として愁へざるは無し、復愁とは猶ほ詠懷と云ふが如く、一たび懷を動かして愁復た至るなりと。肅・代の朝、禍亂相踵ぎ杜の身を終るまで曾て寧日なし、所謂「萬國尙戎馬」なり、「尙」の字天寶祿山の反に溯り、中に無極の悲慨あり、故園今將た何狀を爲すを知らずと雖も、昔歸の時、早く已に寇を被り、田廬は化して戰場と爲り、故舊四散して、相識のもの少なりき、昔歸にして此の如し、今日知るべし、意盡きて語盡きず、是れ歇後の格なり。

浦二田之を揣摩して云ふ、一は則ち亂久しうして言ふに忍びず、一は則ち別れ久しうして深く悉さずと、妙に言外の意を得たり。沈歸愚以爲らく、先づ今を言うて昔を追言す、作法を會すべし、又云はく、苦處は早已二字に在りと。要するに「今」の字「昔」の字倒置し得て妙、「尙」の字自ら「已」の字と相發明す、斡旋の自在、杜詩を讀むものは、一字を放下するを容れざるなり。

絕句

江碧鳥逾白。山青花欲然。今春看又過。
何日是歸年。

一二是れ景、三四は是れ情、この景に對してこの情を出す、信に美なりと雖も、吾が土に非ざるの感あり、江水愈〻碧にして鳥羽の愈〻白きを形はし、山黛益〻青くして花紅益〻、燃えんと欲するを覺ゆ、二句刻畫の至にして轉た自然に造たる、是れ渲染の工なり。

杜は固より絕句を以て長を見るものに非ず、故に一唱三歎の致に至つては終に謫仙・右丞に一着を輸す、唯〻その句法斬釘截鐵、肯へて含蓄の語を成さずして、渠が身分自ら箇中に存す、是れ則ち又少陵に非ざれば道ふ能はざるものなり。八陣圖に題して、

功蓋三分國。名成八陣圖。江流石不轉。遺恨失吞吳。

と云ふ、沈痛前なく、又、代宗の朝、宦官魚朝恩が兵を禁中に屯するを刺りて、

任轉江淮粟。休添苑囿兵。由來貔虎士。不滿鳳凰城。

と云ふが如きは、最も關係あるの作、本選並に選し及ばず、余深く以て憾と爲す。

長干行　崔顥

君家住何處。妾住在橫塘。停船暫借問。
或恐是同鄉。

劉逵が吳都の賦の註に、建鄴の南五里に山岡あり、其間の平地、吏民雜居す、長干と號す、中に大長干・小長干ありと。今水邊を謂つて水干と稱す、干の字義を知るべし、この詩寫す所は卽ち長干の商婦が船に倚つて笑を賣り以て顧客を招くの情景なり、舟中の少婦、突然として他船の男子に向つてその家の何處なるやと問ひ、口に順うて又自己が家の所在を說明す、この婦の何種の婦にしてその意の何等の意なるやは自然に明白なり、結句故らに之を一邊に撇開し去り、或はその同鄉ならんことを思ふが故に之を問ふのみ、復た他意あるに非ずと道ふ、この婦含羞、生客を牽くに開口する難きの狀宛然たり、蓋し一たび說破を經れば便ち半文錢に値らず、六朝小樂府の妙、全くこの種の處に在るなり。

崔がこの作猶ほ一章あり、

家臨九江水。　來去九江側。　同是長干人。　生小不相識。

これ則ち男子前篇の問に答ふるの詞、婦の意を知つて之を痛絕するの意。「生小不相識」の五字に含包す、亦詞を設くるに工なるものなり、分つて二章と爲すと雖も、實は是れ一篇のみ、亦以て劃裂の太だ謂なきを知るべし。

詠史　高適

尙有綈袍贈。　應憐范叔寒。
猶作布衣看。　不知天下士。

起結「尙」・「猶」相對し、一層兩層、意を用ふること極めて周匝なり。蓋し須賈が范雎（一に睢に作る）に於ける初め仇讎あり、乃ちその一寒を憐んで、尙ほ綈袍を以て之に贈る、その意深く感ずべきに似たり、故に「尙」と云ふ、當に憐むべからずして而して能く憐むの意を美するなり。然れども當時范雎は寔に已に秦に相たり、須賈終に之を知らずして猶ほ布衣貧賤の范叔なりと想へり、天下の士を見るの明なきや明らけし、故に「猶」と云ふ、當に知るべくして而して知る能はざるを刺るなり、斷案をこの兩虛字に藏して更に議論を着せず、命意超絕と稱すべし。唐仲言言ふ、高達夫は少うして嘗て落魄し、晩年に始めて貴し、疑ふらくは當時必ず之を輕んずるものあり、故に古人を借つて以て之を詠ずるならんと、此れ想ふに當に然るべし、大典は以て卽ち韓文公が「感恩則有之、曰知己則未也。」と云へるの意なりと爲す、頗る痲姑の長爪を倩うて以て背搔を搔くに庶幾し。（杜牧の詩に「似倩痲姑爲爬背」（贈韓杜集）の句あり。）

田家春望

出門何所見。　春色滿平蕪。
高陽一酒徒。　可歎無知己。

卒然として筆を命ず、何の深意あること無し、然れども春色平蕪の句、語を換へて之を言へば、寔に是れ滿眼の庸流看るに堪へざるの意あり、此を以て興と爲して、以て三四に緊接す、亦豈に凡手の能くする所な

らんや、この種の絶句、一轉すれば則ち杜子美が沈鬱の調たり、謫仙・右丞が神妙自然なるとは全くその宗派を異にす。故に王阮亭唐の五言詩を論じて、高適は質樸にして笨伯を免れずと云ふ（帶經堂詩話卷一品藻）、持論太だ苛なるに似たるも、未だその當なしと云ふことを得ず。

行軍九日思長安故園

岑參

強欲登高去。無人送酒來。遙憐故園菊。
應傍戰場開。

岑參の出でゝ嘉州刺史と爲るや、杜鴻漸表して安西の幕府に置く、傳に稱す、その累りに戎幕を佐け、馮翊間に往來すること十餘歲、征行離別の情を極め、城障塞堡經行せざること無しと、此の如き乎その行軍の作あるなり、九日登高、白衣送酒、是れ重陽習見の典、强ひて之を欲して、而して人の來る無き所以は正にその行軍中たるを以てなり、自己が行軍に就いて、遙かに故園の菊花の仍ほ戰場に傍うて開くを憐む、軍中の寂寞も未だ故園の慘狀に若かざるを慨するなり。

嘉州のこの篇、多く少陵が復愁の作と同時、故にその感傷する所、亦ほぼ相似たり、菊にして戰場に傍ふ、佳景安くにか在る、思うて此に至れば、眞に悲歌して以て泣に當つべし、詩に行軍を明點せずして却つて故園の戰場たるを言ふ、表裏明暗、互文の法なり。

見渭水思秦川

渭水東流去。何時到雍州。憑添兩行淚。
寄向故園流。

渭水は隴西首陽の鳥鼠山より出で、東流して長安の京兆に至り、終に黃河に合流す、秦川は卽ち長安なり、隴西は蜀に屬す、蓋し嘉州西蜀に在りて長安を思ふの作、隴頭の古歌に云はく、「隴頭流水。鳴聲幽咽。遙望秦川。肝腸斷絕。」と、又、杜少陵が哀江頭にも、「淸渭東流劍閣深。去住彼此無消息。」とあり、みなこの意なり。

能く秦川に通ずるものは唯〻この一水、身は異土に羈して歸ること能はず、此れ我れ固より水に如かず、而して我が淚も亦水のみ、この水を以て彼の水に添へば、冀くは故園に向つて流れんとなり、第二句、先づ「何時到雍州」の疑問を以て一筆を開き、因つて以て淚を故園に寄せんと云ふ、布詞極めて次第あり。

登鸛雀樓

王之渙

白日依山盡。黃河入海流。欲窮千里目。

更上一層樓。

白日は看す看す山に依りて盡き、黄河は直ちに海に入りて流る、此樓の大觀乃ちかくの如きものあり、我れ故に目を千里に窮めんと欲し、更に一層の高處に上れるのみ、四句全對にして、意到り筆隨ひ、自然の興象に叶ふ、眞に俯視一切の概あり、その排偶たるを覺えざるは尤も灝氣を以て流走せるに由る、宜しく疎心の者の滑過するを防ぐべきなり。

之渙がこの作、その「黄河遠上」の一篇と共に相傳へて絶唱と爲す。之渙は幷州の人、少うして俠氣あり、從游する所はみな五陵の少年、擊劍悲歌し、從禽縱酒す、詩は情致雅暢して齊・梁の風を得たり、作ある毎に樂工輒ち取つて以て聲律に被らすと云ふ、信なるかな、この作の傳ふる所以、獨り詞意の暢美なるのみならず、亦必ず大いに音節に關するものあらん也、その最も名を得たるは卽ち旗亭畫壁の本事に在り、詳かに七絶の條下に具す。

終南望餘雪　祖詠

終南陰嶺秀。　積雪浮雲端。
城中增暮寒。　林表明霽色。

此れ蓋し祖詠が應試の作、時に僅かに四句を以て納卷す、主試の者その甚だ少きを語る、對へて曰はく意盡きたりと、詠がこの語實に千古作詩者の正法眼藏にして、黄山谷が吟詩多きを務むるを須ひず、但〻意盡くれば可なりと云へるも亦此に基づけり。長安より望む所は卽ち終南の北面、故に陰嶺と曰ふ、陰嶺なるが故に雪積んで消えず、雪消えざるが故に霽色倍〻明らかにして暮寒彌〻甚だし、藤井竹外が所謂「雪白比良山一角。春風猶未到江州。」情景は殊異なるも、意象は此に取る、亦點化に善き者歟。

後來中唐の閻濟美、試に應じて天津橋より洛城の殘雪を望むの詩を作る、亦止〻二十字を賦し得たり、曰はく、

新霽洛城端。　千家積雪寒。　未收清禁色。　偏向上陽殘。

主司之を覽て大いに稱賞を加へしと云ふ、二事相類して韻も亦ほぼ同じ、奇事と稱すべし、但、閻が詩は刻畫の跡宛然たり、祖に遜ること遠し。

罷相作　李適之

避賢初罷相。　樂聖且銜盃。
今朝幾個來。　爲問門前客。

左相が本篇の事、已に飲中八仙歌の條下に注す、須く互參を爲すべし。按ずるに本事詩に云はく、開元の

末、宰相李適之、疎直坦夷にして時譽甚だ美なり、李林甫之を惡み、排誣罷免す、朝官その無罪を知ると雖も、謁問するもの甚だ稀なり、適之意憤り、日に醇醪を飲み、且つこの詩を爲る、林甫愈〻怒り、終に禍を免れず云云、罷相以て戚とせず、故に杯酒自ら遣る、然れども賓客の來るは固より平時より減ぜざる能はず、即ち翟公が所謂門前雀羅の意にして、人情の冷暖、古來此の如し、左相が嘯達を以て豈に之が爲に歎を抱かんや、偶〻之を語に形はすと雖も、詩意は甚だ深怨なきに似たり、本事詩の「意憤」云云と云へる恐らくは荒唐に屬す、但し避賢樂聖、偶然相對す、若し深文して之を覩れば、濁を去つて清に就くの義を生ず、鷹隼の猜を招きし所以其れ此に在る歟、我れ此を以て益〻出語の愼まざるべからざるを知るなり。

奉送五叔入京兼寄綦毋三　李頎

陰雲帶殘日。　悵別此何時。
無由見所思。　欲望黃山道。

題を以てすれば送別は主にして寄懷は客なり、意を以てすれば寄懷は是れ主、送別は是れ客、雲日慘憺の光景を以て主客を一貫し、之を括するに「此何時」の三字を以てす、則ち送別寄懷、その情俱に到り、主客偏重する所なし、此れ遣詞に妙なるもの。

黃山道は是れ綦毋潛が居る所にして五叔入京の經る所なり、陰雲殘日、望んで見えず、此れ果して何等の時にして、而かも復た將に別れんとするや、その迴環意生ずるの妙に至つては我が筆拙澁、吾が意中に解得せるものをすら曲盡すること能はず、況や本詩の神處をや、讀むもの諸を諒せよ。

左掖梨花　丘爲

冷艷全欺雪。　餘香乍入衣。
吹向玉階飛。　春風日莫定。

丘爲は初め累舉して第せず、山に歸りて書を讀むこと數年、天寶の初め、終に進士に擧げらる、王縣詰甚だ之を稱許し、與に唱和の什あり。本篇は亦その應試の作、左掖は已に五律の部に見ゆ、即ち門下省なり、左掖の梨花を詠じて、更に近君の思を動かす、深く擢用を望むの意あり、首句は是れ梨花の正面。「乍入衣」と云ふに至つて、作者その人自ら箇中に在り、因つて言ふ春風心あらば、且つ幸ひに定まらざれ、希はくはこの餘香を吹きて、更に玉階御座の近き處に飛ぶことを得んとなり。由來花を詠ずる者、多く恨を春風の無情に致す、此れ却つて深くその定まるなきを幸とす、命意頗る斬新に屬す、丘爲は纔母に事へて孝、靈芝ありその庭に生ず、鄉里、德行を以て稱し、壽九十六にして終る、その言の蘊包多味なる亦當に此に坐すべし。

九日陪元魯山登北城留別　蕭穎士

綿連湟川迥。　杳渺鴉路深。　彭澤興不淺。
臨風動歸心。

蕭穎士は李華と名を齊しうし、時に蕭・李と稱す。亦曾て元魯山に兄事す、集十卷あり、李華之に序して曰はく、開元・天寶間、文學を以て時に著はるゝ者を蘭陵の蕭穎士とす、字を茂挺と云ひ、年十九にして進士の第に擢んで、淮南の連師、君を表して揚州の功曹と爲す、汝南の旅次に沒す、君文章制度を以て己が任と爲す、時人咸此れを以て之を許す云云。又按ずるに、元魯山は卽ち是れ唐書卓行傳中の人物、名は德秀、字は紫芝、河南の人なり、家貧にして魯山の令たらんことを求め、任期滿ちて、笥に一縑を餘すのみ、決然として柴車に駕して去る、天下その行を高とし、之を名せずして單に元魯山を稱すと云ふ。魯山は汝南の地、詩中の湟川鴉路、並に亦汝州に屬す、則ち蕭がこの篇、應に是れ元が令を罷めて歸る日の作なるべし、時恰も重陽に値ふ、元、故に北城に登りて留別す、湟川の綿連たる、みな登城卽目の景、而して元は將にその綿連を亙り、杳渺を經て河南の鄉里に歸らんとす、臨風一望、歸心愈〻動くは、眞に彼の陶彭澤が田園の興復た淺からざると一般、蓋し元の魯山令を罷むる、陶の彭澤令を罷めて歸去來分を歌ふと同一の意況なるを以て、兼ねて之を九日に切ならしむ、死事活用、その妙を曲盡す。

湟川の湟は直里の切にして、その音雉に近し、以て鴉跡に對す、是を借音の對と曰ふ、漢の光武、北河、朔に邊り、汝州の界に到りて路を失す、鴉の馬前に導くを得て始めて達す、故に名づけて鴉路を稱す。蕭穎士

又、殷寅・顏眞卿・柳芳・陸據・李華・邵軫・趙驛と友誼極めて篤く、時人能く交道を全うするものを曰つて、必ず殷・顏・柳・陸・李・蕭・邵・趙と稱せざるものなし、その卒するや、門人諡して文元先生と曰ふ、高風亮節、元魯山と相得たるの深き、宜しく此の如きものあるべきなり。

平蕃曲　劉長卿

渺渺戍煙孤。　茫茫塞草枯。
萬里不防胡。　隴頭那用閉。

戍煙已に孤なり、復た烽火の警なく、塞草全く枯れて、胡馬の侵を憂へず、邊境淸寧なる此の如くんば、守備は宜しく速かに撤すべきのみ、三四この意を半含半吐の際に置きて、以て下篇の地を爲したり。

其二

絶漠大軍還。　平沙獨戍閒。
萬古在燕山。　空留一片石。

軍還りて守撤し、戍閉にして無事なり、唯、燕然一片の石の長く大將の功勳を勒して以て萬古に傳ふるあるのみ、正に是に華夷一統、四境靖謐の光景、眞に所謂平蕃曲なり、然れどもその一「空」字を着する、反つて此れも亦多事に屬するの意あり、故に側面より之を觀れば、大いに「一將功成萬骨枯。」（曹松「己亥詩」）とその歸趣を一にす、則ち上篇「渺渺」「茫茫」中亦未だ全く「可憐無定河邊骨。曾是春閨夢裏人」（陳陶「隴西行」）の感なしとせず、詩の反覆玩味せざるべからざるや此の如し。

逢俠者　錢起

燕趙悲歌士。相逢劇孟家。
前路日將斜。寸心言不盡。

燕趙悲歌の士、錢以て自況す、劇孟は借つて俠者を稱するなり。李青蓮が扶風豪士の歌に云はく、「洛陽三月飛胡沙。洛陽城中人怨嗟。天津流水波赤血。白骨相撐如亂麻。我亦東奔向吳國。浮雲四塞道路賒。東方日出啼早鴉。城門人開掃落花。梧桐楊柳拂金井。來醉扶風豪士家。」余酷だ之を愛誦す、錢は卽ちその意を十字中に縮用す、彼は紆餘曲折の妙あり、此れは迫促、更に音響を成す、聶隱袖中三寸の劍、未だ曾て龍泉・太阿の光芒を奪はずんばあらざるなり、三四の意は俠者の風を慕うて、而して

光景の遲暮を惜む、寸心感激、言は意を盡さず、請ふ亦杜少陵の句を借つて以て之を解せん、曰はく「眼中之人吾老矣。」（短歌行贈王郎司直）

江行無題

咫尺愁風雨。匡廬不可登。祇疑雲霧窟。
猶有六朝僧。

匡廬の山咫尺に在りと雖も、登る可からざるものは風雨の驟かに至らんことを愁ふればなり、明らかに登るべからざるを知つて猶ほ躊躇依戀の情に堪へざるは、誠に彼の雲霧深杳の中、六朝の僧の當に存するものあるべきを疑ふに由る、身は世網に囚して轉た方外の慕を起す、無聊の意緒、以て察すべきなり、蓮社の惠遠、廬山に隱る、六朝の僧は蓋し若輩を指す。

秋夜寄丘二十二員外

懷君屬秋夜。散步咏涼天。
幽人應未眠。山空松子落。

韋應物

韋郎五字の詩、同時の白樂天已に傾倒極りなく、後來蘇東坡亦之を稱する一再に止まらず。その澄澹高妙、王右丞と雁行して耻なきもの、實に左司あるのみ、この篇永夜の寄懷「山空松子落」の一語、窅然として以て深く、蕭然として以て遠し、正に白石道人が所謂幽懺を寫し出して清潭の底を見るが如きものなり、松子の落つるに由つて、幽人の未だ眠らざるべきを想ふ、耳に聞く所、心に感ずる所、因つて而して之を手に應ず、偶〻この事を寫さんと欲す、詮解すべき所なし。

聽江笛送陸侍御

遠聽江上笛。　臨觴一送君。　還愁獨宿夜。
更向郡齋聞。

江笛凄清、人の離愁を助く、別時此の如し、別後何ぞ堪へん。

郡齋は蓋し左司が蘇州刺史たる時の居る所、その郡齋雨中諸文士と燕集するの詩、殊に「兵衛森畫戟。燕寢凝清香。」の二句を以て名あり、又全椒山中の道士に寄する作「今朝郡齋冷。忽憶山中客。澗底拾枯松。歸來煮白石。欲持一瓢酒。遠寄風雨夕。落葉遍空山。何處尋行跡。」杳然として結ぶ、亦「山空松子落」の亞。郡齋とは猶令の官宅と云ふがごとし。

聞雁

故園渺何處。　歸思方悠哉。　淮南秋雨夜。
高齋聞雁來。

「渺」「悠」の二虚字下し得て綿邈、歸思正に遠くして、復た夜雨に値ふ、未だ雁を聞かざるに已に若許の凄惻あり、況や嘹唳たるもの正に我が高齋を過ぎ去るをや、この種の作尤も輕易に學ぶべからず、その平凡を去る、間髪を容れず、若し肅手に誤らるれば、則ち幼學詩韻と何ぞ擇ばん、愼レ旃。

答李澣

林中觀易罷。　溪上對鷗閑。　楚俗饒詞客。
何人最往還。

讀易の高人、狎鷗の漁父、李乃ち此を以て生涯と爲す、閒趣殊に羨むべし。況やその地卽ち楚にして、楚は左徒宋玉よりの後、代々詞客多し、何人の常に相往還するやを知らざれども、君と相親しむ者は、斷じて

古人に愧ぢざるの詞客たるを信ずと言ふなり。唐仲言解して、李、時に失意獨居す、故に相知を得て落寞ならしめざらんことを冀ふものなりとす、然れども二十字中に於ては、李が失意の時なりとの義、毫も之を見出す能はず。

婕妤怨

皇甫冉

花枝出建章。　鳳管發昭陽。　借問承恩者。　雙蛾幾許長。

皇甫冉は十歲にして能く文を屬し、張九齡、一見して歎ずるに清才を以てす、獨孤及、その集に敍して曰はく、沈(佺期)・宋(之問)始めて六律を成し、之を言うて倫に中り、之を歌うて聲を成す、情緣綺靡の功、是に至つて乃ち備はる、沈・宋既に沒して、司勳(員外)・右丞(王維)復た開元・天寶間に崛起す、その門を得て入る者は當代數人に過ぎず、皇甫補闕はその一なりと。此れ冉を以て崔顥・王維が後を承け、沈・宋の統を接するものとす、同時の人、稱許或は過當を免れずと雖も、亦以て冉が詩風を想ひ見るべし。

建章は天子の宮、昭陽は飛燕が居る所、花發し笙聞ゆ、極めて兩處の盛を狀して、以て婕妤が長信の冷落を反襯す、因つて想ふ彼れ果して何種の粧容を爲してか、能く恩を承け寵を迎ふる此の如くなるやと、秋扇宮人の胸中を描出しほぼ怨意を見はす、是れ痴語なり、看て妬語と爲すこと勿れ。

題竹林寺

朱放

歲月人間促。　煙霞此地多。　殷勤竹林寺。　更得幾回過。

卽ち人生能く幾輪の屐をか着し得たるの意、歲月は移ると雖も、煙霞は換らず、故に殷勤に意を致して以て屢〻この勝地を過ぎんことを願ふなり、朱放は字は長通、剡溪に隱居す、曹王皐、江西を鎭するとき、辟して節度の參謀とす、のち召されて左拾遺と爲るも終に就かず、竹林寺は廬山に在り、想ふに是れ江西の參謀たりしときの作、語の極めて跫促に似たるもの、適〻以てその性の極めて放曠なるを形出せり。

秋日

耿湋

返照入閭巷。　憂來誰共語。　古道少人行。　秋風動禾黍。

情景凄然として、饐く冷致あり。返照の巷に入る、我が憂を催し來るが如し、只見る古道人少にして禾黍

風に動く、四顧都べて是れ蕭條たるのみ、眼前の景物、應用するに葩經黍離の語を以てす、彼れは云ふ、我を知るものは我が心憂ふと謂ひ、我を知らざるものは我れ何をか憂ふと謂ふと、今は則ち共に語るべきなし、孑然たる一身、佇立彷徨の狀を見るが如し。范景文が對床夜語に、李白が玉階怨を以て、李端が拜月の詩、

開簾見月時。　卽便下階拜。
細語人不聞。　北風吹裙帶。

に配し、又、耿湋がこの篇を以て、端が蕪城懷古、

風吹城上樹。　草沒城邊路。
城裏月明時。　精靈自來去。

に配し、並に唐人五言四句の警絶なるものなりと推し、前者は婉戀の深情を備へ、後者は荒寂の餘感を抱くと謂ふ、荒寂餘感の四字、眞に本篇を悉す、但し蕪城懷古の詩は純然たる鬼語のみ、未だ以て此に配すべからざるに似たり。

和張僕射塞下曲　盧綸

月黑雁飛高。　單于遠遁逃。
欲將輕騎逐。　大雪滿弓刀。

月黑く雁飛ぶ、一語邊塞朔漠、胡騎敗陣の狀を反攝し出す、王右丞が觀獵の起句「風勁角弓鳴」と同一の神理を見る、勝に乘じて之を逐ふ、雪の弓刀に滿つるを覺えず、正に曹景宗が鼻端に火を出し耳後に風を生ずるの時、全然寒苦を言はずして、寒苦の甚だしき實に之を言ふに勝るものあり、故にその調極めて雄健にして、而かもその意極めて悲壯、信ぜずんば請ふ之を遼東從征の兵士に問へ。

別盧秦卿　司空曙

知有前期在。　難分此夜中。
不及石尤風。　無將故人酒。

前程期あり、客の遲緩すべからざるは明らかに之を知ると雖も、この夜寧ろ復た遽かに手を分つに忍びんや、たとへば今夜若し石尤風起らば、如何に前期を闕はんと欲するも、終に船を發する事能はざるに非ずや、然るに今我に對し前期の緩うすべからざるを以て强ひて行かんと欲す、此れ則ち故人の酒を以て石尤風に及ばずと爲すなり、客の情豈に眞にかくの如くに薄き乎、何ぞ少しく留らざるや、通篇一意、苦留の思を寫す、造意尤も工。

司空曙は大歷十子中に在つて鏘鏘たる美譽あり、その五絶、吾れは尤も金陵懷古の、

輦路江楓暗。　宮庭野草春。
傷心庾開府。　老作北朝臣。

の一篇を愛す、于鱗の選却つて本篇を取るは、豈にその立意の新なるを美とせる耶、格調を以て詩の準的と爲す、滄溟の如きにして、猶ほこれあるは奇と稱するに足る。石尤風は唐人多く之を用ふ、洪容齋謂ふ、未

だその義を知らずと。而して江湖紀聞に據れば昔、石氏の女あり、嫁して尤郎の婦と爲り、情好甚だ篤し、尤は商と爲りて遠行す、妻之を阻するも從はず、終に出でゝ久しく歸らず、妻之を憶うて病み、歿するに臨んで長嘆して曰はく、吾れその行を阻する能はずして以て此に至ることを恨む、今商旅にして遠行するものあらば、吾れ當に大風と爲りて、天下の婦人のために之を阻すべきなりと、自然商旅の船を發するに、打頭の逆風に値へば、則ち謂つて石尤風なりと云ふ。是れ固より颶風に石郵の名あるより附會したる小說家の言に過ぎず、然れども亦以て掌故に備ふべきなり。

幽州

李益

征戍在桑乾。　年年薊水寒。　殷勤驛西路。
此去向長安。

傳に據るに、李益、幽州の節度使劉濟が幕を佐け、久しく薊北に在り、此れその時の作、以て思歸の意を申す、桑乾原頭に征戍して、年々空しく薊水の寒きを見る、因つて驛西の途路を指し、曰はく此より以て往かば、卽ち長安の歸路なり、何ぞ望むべくして至るべからざる耶、慇勤と言ふものは、盼望屬情の甚だ切なるを見はすなり。

この詩に據れば益が歸思殆ど自ら禁ぜざるものゝ如し、而してその劉節度に上るの詩、便ち云ふ、

日日醉涼州。　笙歌卒未休。　感恩知有地。　不上望京樓。

是れ劉が知遇に感ずるがために、復た京師を思はざるの意、自ら本篇と相矛盾す、益は本と輕薄の士、才ありて行なし、則ち口に隨せて迎合す、語豈に肺腑より出でんや。後、憲宗の知を得て集賢殿の學士と爲るに及び、自らその才を負んで士衆を凌轢す、議する者乃ちその「不上望京樓」の一句を取りて、怨望に涉れるものとし、終に右庶子に貶せらる、本と特操なく、自らその禍を取る、深く益が爲に之を寃とする能はざるなり。

三閭廟

戴叔倫

沅湘流不盡。　屈子怨何深。
蕭蕭楓樹林。　日暮秋風起。

沅湘の盡きざるは屈子の怨の如きあり、屈子の怨の深きは實に沅湘の水に同じ、楚辭に云はく、「湛湛江水兮、上有楓。」(招魂)と、この景千歲猶ほ昔の如く、日暮蕭蕭として秋風又起る、屈子の魂兮、其れ能く歸來せん耶否耶、蓋し怨の勝げて言ふべからざるものあるなり。唐仲言は云はく、屈子の怨、沅湘の能く流し去る所に非ず、楓樹の蕭條たるその遺恨に非ずやと、此れ亦能くこれを詮解す、但し「盡」「深」の二語、宜しく沅湘の詠と屈子の怨を雙頂して自ら互文を成すものと見るべし、この義を滑過せずんば、始

めてその語の愈〻多味なるを知らざるなり。

戴叔倫曾て謂ふ、詩家の景は藍田日煖かに、良玉煙を生ずるが如く、望むべくして而して眉睫の前に置くべからざるなりと、此れ則ち鏡花水月の旨、亦復た不着不離の義に協ふ、誠に微喩に工なるものなり、王伯厚以爲らく、李義山が錦瑟の詩「藍田日煖玉生煙」は全く之を叔倫の語に取れるなりと（困學紀聞卷十八）、料るに亦誣に非ず。

思君恩　令狐楚

小苑鶯歌歇。長門蝶舞多。眼看春又去。
翠輦不曾過。

亦王維が「門外度金輿」と同意、賞心樂事も、失寵の者の眼中に映じては、往々として沾愁惹恨の料ならざるは無し、鶯歇んで春去る、蝶舞は多しと雖も、翠輦は至らず、夫れ今にして至らず、安んぞ復た來幸の日を望むべけんや、結語凄然、正に知らず、古今の宮人幾千萬行の淚點をか灑ぎ得たるを。令狐楚は燉煌の人、德・憲二帝の知遇を承け累擢して中書侍郎同平章事に至り、聲望頗る隆し、當時白樂天・元微之・劉禹錫等と唱和尤も多し、李商隱の如きも亦實にその門下に出づ、その子綯の相と爲るに及んで、忌克する所多く、遂に蕭牛・怨李の禍を媒す。趙嘏綯に贈るの詩に云はく、「鶚在卿雲冰在壺。代天才藥奉訏謨。榮同伊陟傅朱戸。秀比王商入畫圖。昨夜星辰回劍履。前年風月滿江湖。不知機務時多暇。猶許詩家屬和無。」亦以て令狐父子が一時の威權を見るべきなり。

登柳州鷄山　柳宗元

荒山秋日午。獨上意悠悠。如何望鄉處。
西北是融州。

荒山日暮獨り登つて悵望す、子厚は河東の人、河東は遠く柳州の西北に位す、融州は卽ち柳州西北附近の地、相去る僅かに三十里に過ぎず、今柳州の山に登つて西北を望む、融州に見るも河東を見る能はざるは固よりその所なり、故に若し理を以て相格せば、この語寧ろ太痴に非ずや、痴處は正にその妙處、如何ともすべきなく、出すに反語を以てす、最も澹にして愈〻味あり淺にして尋ぬるに耐へたるものとす。子厚が五絶は由來「獨釣寒江雪」（江雪）を以て稱せらる、然れども酸鹹の外その美の存する所、或は彼に在らずして此に在るなり。

秋風引　劉禹錫

何處秋風至。　蕭蕭送雁群。　朝來入庭樹。
孤客最先聞。

頗る蘇頲が汾上驚秋の作に類す、但、彼れは「秋聲不可聞」と曰ひ、此れは「孤客最先聞」と曰ふ、聞く可からざるを以て聞くに堪へざるの實を寫さんよりは、最先に聞くを以て聞くに堪へざるの意を傳ふるに如かず、是れ本篇の彼に比して一倍の凄惻を加ふる所以なり。抑〻亦獨り蕭蕭の響の聞くに堪へざるのみならず、その群雁を送るは、孤客に在つて更に看るに忍びざるもの、この意唯〻「群」「孤」の二字相映帶せる上に盡し去り、讀者をして句外に之を默會せしむ、用意殊に深しと謂ふ可し。禹錫が五絶は、

秋水清無力。　寒山暮多思。　官閑不計程。　徧上南朝寺。（龍興州西建康）
流水閑門外。　秋風吹柳條。　從來送客處。　今日自魂銷。（別蘇州）

二首最も神韻饒し、余をして選政に任ぜしめば、必ずこの種を取らん。

鞏路感懷　呂溫

馬嘶白日暮。　劍鳴秋氣來。　我心渺無際。
河上空徘徊。

暮景凄其にして秋氣蕭瑟、我馬嘶き我劍鳴つて、我心は則ち渺然として託する所なし、只河に臨んで徘徊し、水雲の際なきを悵眺するのみ、題して鞏路感懷と曰ふ、滿紙只覺ゆ一片窮途の思。

呂溫は字は和叔、初め陸宣公に從つて春秋を治む、王叔文に黨せるを以て遷謫せられ、久しく絶域に留まりて歸ることを得ず、常に自ら悲惋す、その詩文は藻翰精絶、一時の流輩みな之を推尚す、然れども傳に稱す、性險躁詼惟にして利を好むと、則ちその人殊に取るに足らず。

古別離　孟郊

欲別牽郎衣。　郎今到何處。
莫向臨邛去。　不恨歸來遲。

別れに臨んで衣を牽く、明らかに別るゝに忍びず、別るゝに忍びずと雖も、別れざること能はず、已むことを得ずして便ちその何處に往くやを問ふ、是れこの女子が念頭最も喫緊の事、蓋しその行く所の如何に由つて以て將來を卜するに足るものあるを以てなり。抑〻歸來の遲きは何をか恨まん、只〻その臨邛に向つて去らんことを恐る、臨邛の酒壚、今若し文君その人の如きものあらば、郎はその新愛に眷眷して終に以て我を棄てんことを保する能はざればなり。筆致簡絶にして態度宛然、但〻臨邛の地を點出して敢へてその意を言はず、兼ねて臨別匆遽の光景を狀出す、臨邛文君相如の故事は最も習見の典に屬す、今贅述を須ひざるなり。

孟東野・賈閬仙は並に韓文公が布衣忘形の交あるもの、韓が孟東野を送るの序、その推稱彼の如く、而して「處士」の一篇は亦專ら東野の爲に作る、その言に云はく、「有窮者孟郊。受材實雄鷙。冥觀洞古今。象外逐幽好。橫空盤硬語。妥帖力排奡。」と。由來排奡妥帖の字、人多く文公を稱するの語と爲すも、文公は卽ち實に之を以て東野に許せり。又その「醉留東野」の詩、

昔年因讀李白杜甫詩。長恨二人不相從。吾與東野生並世。如何復蹉跎。東野不得官。白首誇龍鍾。韓子誚姦黠。自慙青蒿倚長松。低頭拜東野。願得終始如駏蛩。東野不回頭。有如寸筵撞鉅鐘。吾願身爲雲。東野變爲龍。四方上下逐東野。雖有離別無由逢。

雲龍追逐を以て願と爲すに至る、顧ふに是れ獨りその才を憐むのみならず、亦實にその窮を憫むなり。東野初め嵩山に隱れて處士と稱す、後、溧陽の尉に調せらるゝも、その地に投金瀨・平陵城の諸勝ありて、林薄蕭翳し下に積水あり、郊乃ち往いて水傍に坐し、酒を命じ琴を揮ひ、裴回詩を賦すること終日にして曹務多く廢し、終に辭官家居するに至る。その生事に拙にして一貧骨に徹するも亦宜なり。その詩は哀怨淸切にして窮入冥搜の工を極め、思ひ奇澁に苦しみ、讀む者をして憚ばざらしむ。故に東坡に郊寒・島瘦の譏あり。又嚴滄浪は謂ふ、孟郊の詩は憔悴枯槁にしてその氣局促して伸びず、退之の之を許す彼の如きは何ぞや、詩道は本と正大なり、孟郊自ら之が艱澁を爲す耳と（滄浪詩話）、淸の翁覃溪（方綱）の如きは、人に勸めて孟東野の詩を讀むこと勿らしむるに至る、然れどもその退之との聯句を見れば、宏壯辯博にして筆力鼎を扛ぐ、斷として

憔悴枯槁の態に非ず、見るべし渠が本領は自ら有り、文公も亦貶稱虛譽を事とせるものにあらず、不幸にして今に傳はる所の東野の詩、多く寒險苦澁の作、此れを以て疑を文公が稱許に致すは、未だ苛論たるを免れざるなり、或は云ふ聯句の作は、孟の平生に類せず、此れ定めて退之が潤色に出でたるべしと、此れ東野を抑する殊に過甚なり。黃山谷云ふ、退之安んぞ能く東野を潤色せん、若し東野、退之を潤色すと云はゞ却つてこの理ありと。此れ又、東野を揚げてその實に過ぎたるものと云はざるべからず。愈瑒の曰はく、聯句は國手の對奕する如く、旁旁相當り、又知音の合曲する如く、聲聲相應ず、故に孟・韓の相遇ふに非ずんば、この奇觀を得る能はざるを知ると、趙雲菘も亦韓・孟俱に奇を好む、故に兩人一手に出づるが如しと云ふ（讀北詩話卷三）、二者頗る持平の見なり。

尋隱者不遇

賈島

松下問童子。言師採藥去。只在此山中。雲深不知處。

童子と問答するに借つて、その人に遇はざるを寫す、立意既に曲折す、その二は童子の答辭、三四直ちに接するに作者意中の語を以てす、章法も亦曲折せり、已に藥草を採り去る、料るに遠處に在らず、只この山中ならんのみ、而かも白雲杳杳として興に尋ぬべきなし、澹中の意象、殊に山居の幽邃に叶へり。

「兩句三年得。一吟雙淚流。知音如不賞。歸臥故山秋。」（題詩）閬仙の詩に於て功を用ふる此の如し、宜なりその心を萬仞に游し、虛を無窮に騁せ、刻苦冥搜の際に當りては、前に王侯貴人あるもみな覺えざること。是を以て「秋風渭水、」劉栖楚が車騎に唐突し、「僧敲月下、」韓文公が輿從を驚駭せしむ、甚だしきは則ち天子の微行を知らずして攘臂して之を叱斥するに至る、その交する所はみな廊外の人、況味蕭條として生計岨峿し、臨死の日、家に一錢なく、惟〻病驢・古琴あるのみ。嘗て歎じて曰はく、余が素心を知る者は、惟〻終南・紫閣・白閣諸峰の隱者のみと、その資性此の如し。故に最も孟郊・張籍等と相得たり、孟郊を哭するに云はく、「身死聲名在。多應萬古傳。寡妻無子息。破宅帶林泉。塚近登山道。詩隨過海船。故人相弔處。斜日下寒天。」世に傳ふ韓退之、閬仙に貽るの詩、「孟郊死葬北邙山。日月星辰頓覺閒。天恐文章中斷絕。再生賈島在人間。」島の名此れに由つて大いに振ふと。閬仙が韓公の推挹に由つて、僧を去り擧に應ぜしは固より實事に屬す、然れども詩は甚だ淺率、恐らくは文公の手筆に非ず。趙雲蔡謂ふ、韓門に游ぶ者、張籍・李翺・皇甫湜・賈島・侯喜・劉師命・張徹・張署等、昌黎みな後輩を以て之を待つ。盧仝・崔立之は平交に屬すと雖も昌黎亦甚だしくは推重せず、心折する所の者は惟〻孟東野一人なりと（韓北詩話巻三）、此れを以て愈〻再生の語の僞託たるを知るべし。

宮中題

文宗皇帝

輦路生秋草。上林花滿枝。憑高何限意。無復侍臣知。

唐代宦官の禍は古今絶無と稱す、その權反つて人主の上に在りて、その立君・弑君・廢君を視る、殆ど兒戲に似たるものあり、德宗の時、帝武臣を以て禁兵を典どらしむるを欲せず、乃ち神策・天威等の軍を以て護軍中尉中護軍等の官を置き、宦者をして之を主どらしむ、是れ宦官兵權を得るの始、その後又、樞密使の職を置き、凡そ詔旨を承受し、王命を出納する、一に之を中宦の手に歸す、是に於てか宦官亦機務參預の權を得たり。これよりその後、憲宗・穆宗・敬宗の三代を經て太阿を倒持してその柄を授け、承系卽位の事盡く宦官の力に由らざるは無し。初め敬宗奢を好み獵を愛し群小を狎昵す、夜獵宮に還り、中宦劉克明・蘇佐明等二十八人と飲む、帝醉うて室に入り更衣す、殿上の燭忽ち滅し、劉克明等同じく帝を害す、蘇佐明等乃ち制を矯め絳王を立つ、樞密使王守澄、禁軍を率ゐて賊を討ち、絳王を誅し、江王を迎へて位に卽く、是を文宗皇帝とす、是れ敬宗の弑は宦官に由り、文宗の立つも亦宦官の擁戴に出づ、萬乘の位を擧げて、之を宦官が傾軋爭奪の犧牲に供す、國事寧ろ問ふ可けんや。文宗既に中宦の立つる所と爲るも、心竊かにその專橫を惡み、禍胎を芟除して以て國恥を雪がんと欲す。因つて李訓・鄭注等を擢用し、將に大いに謀る所あらんとす、訓・注等帝の意を揣度し、則ち又借つて私怨を報じ、先づ陳宏度を杖殺し、王思澄を酖し、郭行餘・王璠・羅立言・韓約・李孝本等を援引して、或は兵權を有し、或は君側に近づかしめ、廣く豪俠を召募して、中宦を一

網に打盡せんとす、事成るに垂んとして遂に甘露の變あり、前局盡く翻りて、此より中宦仇士良・魚宏志等の氣餒天を薰す。帝の本篇は蓋し變後の作、史に稱す鄭注・李訓等が伏誅の後、帝登臨游幸する毎に往往獨語す、左右恐れて敢へて進問することなし、因つてこの詩を賦すと、その滿肚の憤懣、實に咄咄人に逼るの思あり。

文宗の太和九年、宦者仇士良を以て神策中尉と爲す、この年十一月二十一日、帝紫宸殿に御し、班定まる、韓約奏じて曰はく、金吾の仗院に石榴開き、夜甘露あり、臣已に狀を進め訖ると、宰相百官齊しく賀を稱す、李訓因つて帝の親しく左仗に幸して之を觀んことを請ふ、帝乃ち軟輿に乘じて紫宸門を出で、金元殿に升る、百官班列す、宰相兩省官をして先づ往いて視しむ、還り奏して曰はく、臣等その眞甘露に非ざるを恐る、敢へて輕言せず、言出づれば四方必ず賀を稱せん、帝曰はく韓約は妄言するものならん耶と、更に中尉仇士良・魚宏志をして諸內官を率ゐて往いて視しむ、既に去る、李訓起つて王璠・郭行餘を召して曰はく、來りて勅旨を受けよ、璠恐悚して前むこと能はず、行餘獨り殿下に拜す、蓋しこの時、王・郭二人の官健、已にみな兵を執り伏して丹鳳門外に在るなり。仇士良等の諸宦者方に左仗に至るに、幕下に兵聲あるを聞き、驚恐して走出し、その狀を回奏す、韓約氣懾れ、汗流れ、首を擧ぐること能はず、宦者等奏じて曰はく、事急なり、請ふ陛下內に入れと、卽ち軟輿を擧げて帝を迎ふ、李訓、金吾の衞士を呼びて曰はく、來りて殿に上り乘輿を護せよと。宦者等乃ち殿後の罘罳を破り輿を擧げて疾趨す、李訓之を攀して、呼んで曰はく、陛下內に入ることを得ず、仇士良曰はく、李訓反せり、帝曰はく、訓反せず、時に金吾の衞士數十人、訓に隨つて入る、羅立言・李孝本等、臺府の從人共に四百餘を率ゐて殿に上り、宦者を縱擊し死傷數十人、訓、輦を

持する愈〻急にして、還邅して宣政門に入らんとす、帝瞋目して訓を叱す、宦者都志榮、拳を奮うてその胸を擊つ、訓、地に仆る、帝遂に上閤門に入る、門卽ち闔づ、須臾にして宦官禁兵五百人を率ゐ、刃を露はして出で、人に遇うて則ち殺す、訓・璠・行餘・約・立言・孝本、以て宰相王涯・賈餗・舒元輿等に及ぶまで、みな族誅せらる、是れ卽ち所謂甘露の變なり、初め鄭注、出でゝ鳳翔を鎭し、訓と事を謀る期あり、中外相應じて協勢せんと欲す、訓が事發すと聞き親兵五百を率ゐて闕に赴き、敗を聞いて卽ち還る、監軍張仲清之を殺し、首を京師に傳ふ。宰相王涯は已に禁兵に擒にせらる、士良因つてその反狀を鞫問す、涯、實にその故を知らず、榜笞極めて酷涯、楚痛に勝へず、乃ち反狀を手書して以て自ら誣ふ、凡そ訓・注の黨に坐して族せらるゝもの十一家、流血尤も慘なり。既にして仇士良揚言す、王涯は李訓と逆を謀り、將に鄭注を立てんとしたりと、帝聞いて悲憤し、涯が供狀を令狐楚に付して曰はく、果して涯が書なりや、楚曰はく然り、涯誠に謀ありと、帝已に宦官に逼られ、心にその寃を知るも之を白すること能はず、遂に詔書を下して涯・訓等が罪を天下に暴布す。明年二月昭義節度使劉從諫の王涯等が罪名を表請し、又、上表して仇士良が罪惡を暴揚するに及んで、令狐楚從容として奏して曰はく、王涯等身死し族滅せられ、遺骸道路に棄捐す、請ふ之を收瘞せん。帝慘然之を久うし、京兆に命じて收葬せしむ。仇士良之を聞き潛かにその墳を發き、骨を渭水に棄つ、自後生殺除拜、みな士良に決す、帝實に與り知らずと云ふ。蓬路草生ず、游幸自ら稀、上林花滿つ、好景も亦徒然に屬す、高きに憑つて以て望み、悵然として以て思ふ、侍臣と雖も知ることを得ず、是れ人主上に孤立するなり、その悲鬱想ふべし。文宗の病大漸するに及び、敬宗の子成美を皇太子とし、密旨を降して監國せしむ、乃ち仇・魚の小人、仍ほ詔を矯めて成美を廢し、顥王宦を立てゝ皇太弟とし位に卽く、是れ卽

ち武宗なり。文宗、宦官の横を悪んで制する能はず、徒らに李訓・鄭注等をして狂躁誤國の跡あらしむ、その任用の人に非ざる、亦咎を辭すべからざるものあり、本篇を讀む者は唯〻その志を哀んで可なり。

勸酒　于武陵

勸君金屈巵。　滿酌不須辭。
人生足別離。　花發多風雨。

屈巵は盃の手把あるもの、佳景長うし難く、良會は數〻せず、且つ花の未だ落ちず人の未だ別れざるを趁うて、この一盃を滿酌すべきなり、語は是れ及時の行樂、意は是れ觸景の感愴。傳を按ずるに于武陵は嘗て進士に擧げられて意に稱はず、琴書を携へて商洛巴蜀間に往來し、或は卜中に隱れ、獨醒の志を存ず、避地嘿嘿、語は榮貴に及ばずと。是れその人本と高士、宜しく爾許の達觀あるべきなり。

秋日湖上　薛瑩

落日五湖游。　煙波處處愁。
誰與問東流。　浮沈千古事。

薛瑩は唐末の人、煙波改まらずして、世事數〻變ず、誰れかその故を問ふことを得ん乎、中に一脈興亡の淚あり、當に是れ唐室潛移の後の作なるべし。

題慈恩塔　荆叔

漢國山河在。　秦陵草樹深。
暮雲千里色。　無處不傷心。

唐仲言云はく、此れ登高に因つて弔古の思をおこす、咸陽は秦漢の國都、陵寢在り、今存する所は特に山河草樹のみ、この暮雲に對して能く傷感なからん耶、荆叔は史その爵里を載せず、その詩を讀めば盛唐の音あり、その意を想ふに、衰世の慨多し、未だその時を定むべからずと。今按ずるに詩意、上の薛瑩が作と同一の悲嘆あり、亦必ず是れ亡國後の作、若し疑を慈恩の塔の事、五古岑參が詩下に詳述す、參觀すべし。

伊州歌　無名氏

聞道黃花戍。　頻年不解兵。
可憐閨裏月。

偏照漢家營。

絶句已に唐の樂府たり。故に名人の作、往往途歌巷謡に存す、以下の二首は卽ち開元中、蓋嘉運なるもの、西涼の節度使たりしとき、採進せるの曲にして、偶〻その姓氏を逸す、後の選家或は之を以て蓋嘉運の詩なりとせるは非なり。黄花戍は唐の平州北平郡の地、卽ち白狼・紫蒙・昌黎等の十二戍壘の一なり。戍兵解せず、夫還る期なし、唯〻この空閨を照らすの月、亦能く漢營を照らす、而かも亦儂が相思を以て之を郎許に達すること能はず、空しく月に對して傷懷するのみ。宛轉凄清、人腸をして九廻せしむ、溫飛卿云ふ「天寶年中事玉皇。曾將新曲教寧王。鈿蟬金雁皆零落。一曲伊州淚萬行。」（人彈琴）この曲既に開元の採進に係る、則ち天寶年中に在つては、仍ほ新曲たるなり、溫が詩を誦せばこの篇之を音律に被らしめ、更に凄惻聽くに堪へざるものあるを想像するに足る。

その二

打起黄鶯兒。　莫教枝上啼。
啼時驚妾夢。　不得到遼西。

前人、人に絶句を作るを教ふるに、須くこの篇を熟讀して、その肺腑中より一氣に流出せる處を得べしと

謂ふものあり、又或はこの篇を取りて、起承轉合の法を講ずるものあり、蓋しこの篇最も解し易く又最も順口記誦に便なるを以てなり。遼西も亦北平の地、命意の在る所はほぼ前章に同じく、惟〻一夢の往來を冀ふ、その意更に苦なり、その眞情より發して天籟と爲り、一句一意にして亦仍ほ一首一句の如きは唐樂府中に在つて實に最上に位せり、然れども此れ漸く後世詞曲の法門を開く、若し專ら此に習ふときは、則ち恐らくは輕率油滑に流れん、詩の格調に泥むは固より中空にして實なく、その性情に偏するも亦俚質の弊あり、學者は每にその中を折し、須く此に於て三思を加ふべきなり。全唐詩話此を以て金昌緒の作なりと爲す、未だその何の據あるを知らず、李青蓮が長相思に「夢魂不到關山難」の句あり、暗に本篇の意を用ひたるものゝ如し。

哥舒歌　西鄙人

北斗七星高。　哥舒夜帶刀。
至今窺牧馬。　不敢過臨洮。

哥舒翰、隴右の節度使と爲り、功を西域に建つ、故に西鄙の人之を歌ふなり、傳に曰はく、哥舒翰、王忠嗣に事へて牙將に署す、吐蕃邊に寇す、翰半段槍を持して迎擊す、向ふ所披靡し名、軍中を蓋ふ、後、神威軍を青海の上に設く、吐蕃攻めて之を破る、更に龍駒島に築き、二千人を以て之を戍る、是に由つて吐蕃敢

へて青海に近づかずと、臨洮は府の名、隴右道に屬す。北斗七星、刀光と相暎帶す、起五字若し朱傳の例に倣はゞ當に賦にして比なりと稱すべし。少陵哥舒開府に贈る詩に云ふ、「今代麒麟閣。何人第一功。君王自神武。駕馭必英雄。開府當朝傑。論兵遺古風。先鋒百勝在。略地兩隅空。青海無傳箭。天山早掛弓。」云云と、亦以て哥舒一時の威風を見るに足る、祿山の反に及んで、潼關に一敗し、恥を千古に貽す。然れどもその前功は則ち沒すべからず、故に英雄初めより成敗を以て之を論ずる能はざるなり。

答人　太上隱者

偶來松樹下。　高枕石頭眠。
寒盡不知年。　山中無曆日。

逍遙自在、殆ど是れ羲皇以上の人の語、想ふに是れ唐時隱君子の流ならんのみ。許渾が「賣藥修琴歸去遲。山風吹盡桂花枝。世間甲子須臾事。逢着仙人莫看棊」（送宋處士歸山）その用意實に此より脫化したり、小說家相傳へて以て木石の惟の吟ずる所とす、此れ偶〻その氏名を失するを以て故らに附會して以て之を神にせるのみ。

沈德潛既に太白・右丞・蘇州の三家を以て唐代五絕の冠と爲し、又云はく崔顥が長干行、金昌緒が春怨、

（卽ち伊州歌の第二曲）王建が新嫁娘、張祜が宮詞等の篇は專家に非ずと雖も亦絕詞と稱すと、本選その二を取りてその二を逸す、今後に附錄す。

三日入厨下。　洗手作羹湯。　未諳姑食性。　先遣小姑嘗。（王建「新嫁娘」）

故國三千里。　深宮二十年（二十年は恐らく十二年の誤）。　一聲河滿子。　雙淚落君前。（張祜「宮詞」、一題、河滿子）

祜が詩は當時傳へて宮禁に入る、武宗病篤きとき、孟才人を目して曰はく、吾卽ち諱まずば爾何をか爲さんとする、才人笙囊を指して泣いて曰はく、請ふ此を以て縊れん、帝惻然たり。復た曰はく、妾嘗て歌を藝ぶ、請ふ上に對して一曲を歌ひ以てその情を泄さんと、乃ち一聲の河滿子を歌うて氣絕すと云ふ、この曲調の凄惋想ふべし。毛稚黃（先舒）が詩辨坻、王建新が嫁娘を評して、事を摹する太だ情に入るも便ち卑格に落つと云ふ、此れ七子格調の餘習を承けたるもの、大約是れ小兒の强ひて解事を成すのみ。

次本田種竹晩春臺北閒居詩韻（七首錄一）　森槐南

艸堂琴思愔　忽被熏風促
動操入無絃　衆山響而綠

唐詩選評釋　卷七

七言絶句

蜀中九日　王勃

九月九日望鄕臺。
他席他鄕送客杯。
人情已厭南中苦。
鴻雁那從北地來。

七言絶句も亦齊・梁の樂府に胚胎す、唐に至りてその聲勢を穩順し、始めて一定の體あり、三百年間終に絶句を以て擅場とし、凡そ宮掖の傳ふる所、梨園子弟の歌ふ所、旗亭の唱ふる所、邊將の進むる所、殆どこの體ならざるは無し、或は前二句は散語を以てし、對語を以て之を結び、或は對語を以て起り、後二句散語を以て結ぶ、或は四句俱に對語を用ひ、或は前後俱に散語を用ふ。或は云ふ絶句は則ち截句なり、律詩の前四句を截ち來りたるもの、卽ち前散後對の格と爲り、律詩の後四句を截ち來りたるもの、則ち前對後散の格と爲る、みな對語を用ひたるは律詩の中四句を截取し、全く散語を用ひたるは律詩の起結四句を截取したるものなりと。この說殊に人耳に入り易し、故に三家村の學究先生、今尙ほ此れを以て蒙童を講習せるもの少からず、然れども絶句は自ら是れ短詩の名稱、未だ五七言八句四韻の律體なるものあらざる以前に於て早く已にこれあり、律詩を斷截したるが爲に名づけられたるものに非ざるや實に昭然たり、現に勃がこの篇の如き

は四句盡く對偶を用ふ、而して當時は固より未だ所謂律詩なるものあらず、此れをしも猶ほ本篇は律詩の中四句を截取したるものなりと謂ふことを得べき乎、律詩の沈・宋に創定せるは前屢〻之を論ず、玆に再述を須ひざるなり。

絶句の語淺く情深うして、中に微旨遠意あるを貴み、亦能く一氣に呵成して、正面反面互に相開合し、宮・商の諧叶せるを以て正宗と爲すは、五七言を通じてみな然らざるは無し。但、沈・宋の後、律詩その體を定めてより、彼の前散後對、後對前散若しくは四句全對の格は眞に宛も律詩の前後を斷截して做し出したるものゝ如き嫌なからず、是を以て絶句の極盛と稱する開元・天寶以後の諸名家は、多く對語を爲すを屑とせずその千古必傳の絶唱と稱するは、通篇散語を用ひたるもの十の七八に居れり、則ち四句全散の格を以て絶句の正式と爲しその餘を變調に置くも固より妨げなきに似たり。王阮亭は謂ふ、七絶は初唐風調未だ諧はず、開元・天寶に至りて始めて美を備へ、善を盡くせりと（帶經堂詩話卷四刪訂）。此れ實に吾がこの說を相羽翼するに足る、然れども風調未諧の一語は少しく語弊なからず、何となれば初唐に在つては古・律・絶の三體猶ほ混沌として未だ全く剖判せず、既に剖判せず、則ちその看て不諧に似たるものは、固より初唐當時の風調たり、未だ剖判以後の風調を以てその諧否を議する能はざるを以てなり。

王子安（勃）鬪雞の檄を以て禍を取り、既に廢せられて劍南に客たり、劍南は卽ち蜀中なり、傳に云ふ、王、劍南に在るとき山に登りて曠望し、慨然として諸葛の功を思ひ詩を賦して情を見ると、本篇の如きも蓋し又所謂登山曠望中の一たるなり。蜀の成都の北に望鄕臺あり、蜀王秀が築く所、九月九日卽ち重陽の佳節、高きに登り酒を酌む、俗習相沿す、今や我が登る所は望鄕の臺なり、我が酌む所は送客の杯なり、鄕心已に切にし

て、而して復た他鄕他席、客中にして客を送る、尤も懷を爲し難し。南中は蜀なり、我れ固よりこの南中を厭ひ鬱鬱として久しく居り難きの感あり、獨り惟む九秋將に盡きんとして北雁南に飛ぶ、彼の雁たるもの果して何の南中に樂しむ所ありてか乃ち來れるや、眞に解すべからざるなり。我が南中を厭ふの切なるより推して以て雁の北地より來れるを尤む、所謂無情の處に於て情を生ずるもの、後人無數の法門を開けり、次の杜審言が渡湘江の作、亦此の如し、その曠望中の肺腑に發して毫も修飾せざる所を味はふべきなり。

渡湘江　杜審言

遲日園林悲昔游。
今春花鳥作邊愁。
獨憐京國人南竄。
不似湘江水北流。

杜必簡神龍の初め張易之の黨に坐して嶺南に貶竄せられ、途、瀟湘を經、偶〻春の回るに逢ふ、因つて京國の昔游を追懷してこの詩を賦したるなり。遲日園林・昔游・花鳥、則ち「獨憐京國人南竄」の七字を以て且つ之を收束し、且つ一轉して湘江を渡るの題位に入り、感愴を以て結ぶ、開合極めて好し。唐汝詢が徒、箇中の消息を解せず、誤つて園林昔游を以て之を湘江に屬し、云ふ湘は舊游の地たるを以て、昔を感じて悲み、邊愁則ち物に觸れて生ずと、此れ詎んぞ痴人の說夢に異ならん。

遲日園林、花開き鳥啼く、昔游の樂事此の如し、而して今春は則ちその人已に南竄す、花鳥舊の如しと雖も亦當に邊愁を作すべきのみ。故に「悲」と云ふ、三四この一「悲」より對景の愴情を引出す、所謂「邊愁」なり、文義は自ら明らかなり。

贈蘇綰書記

知君書記本翩翩。
紅粉樓中應計日。
爲許從戎赴朔邊。
燕支山下莫經年。

百官志を按ずるに元帥節度使の府には掌書記一人を置く、詩意を審すれば、蓋し蘇綰が朔方節度使の掌書記と爲りて北邊の幕に赴くを送るなり。魏の曹丕、臯質に答ふるの書に「元瑜（阮瑀の字）書記翩翩、致足樂也。」の語あり、今此れを以て蘇が才幹の眞にその職に稱へるを贊す、この才幹あり、以て戎幕を佐すべし、故に「爲許從戎赴朔邊」を以て之に接す、以上二句卽ち是れ蘇綰が公事。

燕支山は塞外の山名、この山に紅藍を產す、以て燕脂と爲すべし。故に匈奴の古諺に、「失我燕支山、使我婦色無顏色。」と云ふ、本篇その地名に依つて以つて意を見はすこと、一に孟郊が古別離の「不恨歸來遲。莫向臨邛去」と同一の筆致に屬す。今蘇已に北に去る、則ち樓中紅粉の婦、應に計日して以てその歸期を待つものあるべし、幸に燕支山下の顏色に留連して、年を經て還らず、この家室の戀好を誤らしむること勿れ、以上二句、卽ち是れ蘇綰が私情。

私を以て公を廢せよと謂ふに非ず、實に公を以て私を忘るゝなからんことを望む、大旨は只〻その久滯するなきを欲するのみ、室家の情を以て之を出すものは、その人を感動する泛常贈別の言に比して更に深きものあるが故なり、その流走對を作し、紅粉燕支、表裏映合の妙なる、是れを情文雙絶なるものとす。

戲贈趙使君美人

紅粉青峨映楚雲。　桃花馬上石榴裙。
羅敷獨向東方去。　漫學他家作使君。

起二句直ちに是れ絶妙著色の美人羅馬の圖、その色部の字面を以て相渲染せるは、直ちに彩錦離披として之を呼べば出でんと欲するの想あり、この美人偶〻是れ趙使君が寵姬、因つて趙姓上より羅敷が陌上桑の故事を湊合し、その意を翻用して謔に入る、題して戲贈と云ふ所以なり。

細かに三四の意を釋せんと欲せば、先づ陌上桑の故事を詳かにせざるべからず、陌上桑の故事を詳かにせんと欲せば、陌上桑の篇に就いて之を述ぶるより善きは莫し。按ずるに羅敷は晉時の女子。

日出東南隅。　照我秦氏樓。　秦氏有好女。　自名爲羅敷。

その本姓は卽ち秦氏たりしなり、嫁して邑人千乘王仁が妻と爲り、而して王仁は曾て當時に勢權赫赫たる趙王倫が府の家令たりしなり。この羅敷常に出て桑を採り、以て蠶を飼養す。

羅敷喜蠶桑。　採桑城南隅。　青絲爲籠係。　桂枝爲籠鉤。
頭上倭墮髻。　耳中明月珠。　緗綺爲下裙。　紫綺爲上襦。

その出る毎に靚粧せること此の如く、又、その天然の丰姿の此れに稱へるものあるを以て、路人の指目を惹くこと殊に甚だしかりき。

行者見羅敷。　下擔捋髭鬚。　少年見羅敷。　脫帽着帩頭。
耕者忘其犁。　鋤者忘其鋤。　來歸相怒怨。　但坐觀羅敷。

羅敷を爭ひ觀んがために、互に相怒怨すと云ふに至つて、その喧噪の極に達す、故に終に彼の趙王が目に觸るゝこととはなれり。

使君從南來。　五馬立踟躕。

使君は則ち趙王なり、羅敷を一見してその馬を駐む、彼の髭を捋り帽を脫し犁を忘れ鋤を忘るゝものとは、自ら貴賤の殊、態度の別あり、然れどもその心情は則ち一なり。

使君遣吏往。　問是誰家姝。　秦氏有好女。　自名爲羅敷。

先づその姓名を問ひ、

羅敷年幾何。　二十尙不足。　十五頗有餘。

次にその年を問ひて、絶好妙齡の女子たるを明知す、乃ち眷眷の思に勝へず、

使君謝羅敷。　寧可共載不。

將に奪ひ載せて行かんとす、然れども羅敷は本と是れ貞烈の女子、又その夫と伉儷正に篤し、豈にこの非

禮に觀うて乃ち勢を見て還るものならんや、
羅敷、前に致辭。　使君一何愚。
一喝して以てその氣を奪ひ、
使君自有婦。　羅敷自有夫。
決然として之を拒絶したり。然れどもその夫固より趙府の令たれば、或は使君が猶ほ之を輕視して奪ひ易しとせんことを恐る、因つて盛んに自己が平素その夫に屬望する所以のものを陳し、他年の榮顯決して使君の後に在るものにあらざるを申言して、峻拒の辭柄とす。

東方千餘騎。　夫婿居上頭。　何用識夫婿。　白馬從驪駒。
青絲繫馬尾。　黃金絡馬頭。　腰中鹿盧劍。　可直千萬餘。
十五府小吏。　二十朝大夫。　三十侍中郎。　四十專城居。
爲人潔白哲。　鬚鬚頗有鬚。　盈盈公府步。　冉冉府中趨。
坐中千萬人。　皆言夫婿殊。

強ひて他人の婦に委禽せんと欲し、百方勸誘を事とするに當りて、反つてその婦の口中より、聲聲夫婿、言言夫婿を聞き、その夫を誇稱するより外、肯へて復た他辭なきに於ては、寧ろ爽然として自失し、呆然として退かんことを思はざるものあらんや、趙王が威權を以て一婉柔子の志を奪ふ能はざりしは、寔に羅敷がその夫を誇るの機智膽量、意料の外に出でたるに由る、故に傳へて美談とす、此れ卽ち陌上桑の故事なり。

古の羅敷はその夫を謂つて東方千餘騎の上頭に居れりとす、今の趙使君の美人は自ら桃花の馬に鞭つて獨り東方に向つて去れり、古の趙使君は羅敷を奪はんと欲して、その拒絶に遭ひ、今の趙使君は反つてこの美人を得て、之を金屋に貯ふ。古今の使君その姓みな趙、我れより之を言へば則ち是れ他家なり、今我れ街頭に於て、今の趙使君が美人の馬を馳せて去るを見て、謾に他家の故事を學び、古の趙使君が曾て羅敷に向つて爲せし所のものを以て、之を今の趙使君の美人に施さんと欲す、知らず今の趙使君の美人は、能く羅敷が古の趙使君に對せし所のものを以て我れを拒絶せんや否や、抑〻知らず今の趙使君は、我がその美人に向つて爲す所、一に古の趙使君が羅敷に於けるが如きを見て、他家の故事たるが故に能く我が調笑を許さんや否や、此れ卽ち戲贈の本意なり。

銅雀臺　劉廷琦

銅臺宮觀委灰塵。
卽今西望猶堪思。
況復當時歌舞人。
魏主園陵漳水濱。

銅雀臺は曹阿瞞(操)の建てゝ以て宮人歌伎を置くの處、西の方漳水を隔てゝ、則ち阿瞞が所謂疑塚あり、その將さに死せんとするや、遺令して曰はく、吾が伎人はみな銅雀臺に居り、六尺の床を臺上に設け、綿帳を懸けて以て吾が靈位とし、朝晡に脯糒の屬を供ふべし、月朝及び十五日に逢はゞ、輒ち帳に向つて伎を奏ぜよ、又時時に雀臺の上に登りて以て吾が西陵の墓田を望めと、一代の姦雄彼が如きも、猶ほ爾許の痴想を

抱く、その情轉た憐むべきものあり、今、雀臺灰と爲つて、園陵猶ほ在り、生前の樂地何處ぞ、死後の遺丘空しく存す、この凋殘廢落の餘、之を望む猶ほ感慨多し、況や當時の歌伎、豈に悲傷せざらんや、俯仰低回、懷古の致を曲盡す。「思」は「悲思」の「思」、故に讀んで去聲と爲す、聲律に疎なるには非ず。劉は開元中の人、その爵里、考を失す。

邙山

北邙山上列墳塋。
城中日夕歌鐘起。
萬古千秋對洛城。
山上惟聞松柏聲。

沈佺期

北邙の墳塋は、卽ち洛城萬家の人の歸着する所、この山千秋この城に對す、人を提醒すること少からず、抑〻城中の歌鐘は是れ生前の歡樂、山上の松柏は是れ身後の哀情、哀情既に歡樂の極まる所たれば明らかに歌鐘は、卽ち松柏の先聲、其娛むべきを覺えず、寧ろ其悲むべきを覺ゆ、美酒佳肴前に陳し、妖童美女後に侍するも、亦只是れ十八層地獄油鍋裏の活計のみ、貴盛を以て人に驕るもの、何ぞ少しくその禍を惜まざるや。曰はく「百年同謝西山日。千秋萬古北邙塵。」(公子行)、曰はく「請看古來歌舞地。唯有黃昏鳥雀悲。」(代悲白頭翁)、初唐の人每に此種の懷抱を抒ぶるを喜ぶ、蓋し一時の風氣なり、本篇も亦便ち是れ這箇の意思。

送司馬道士游天台

羽客笙歌此地違。
蓬萊闕下長相憶。
離筵數處白雲飛。
桐柏山頭去不歸。

宋之問

司馬承禎字は子微、天台山に隱れ自ら白雲子と稱し、穀辟導引の術に通ず、中宗の朝、頻に徵せども起たず、睿宗に至つて、雅に道敎を尙び、頗る尊異に加ふ、是に於て始めて出で〻京に朝し、幾もなくして又、苦辭して山に歸る、乃ち寶琴花帔を賜うて之を餞し、朝士詩を贈るもの百餘人に至る、宋延淸がこの篇亦その一なり。笙歌の樂を張りて大いにその行を壯にす、其聲樂むべきが如きも、その人は則ち此地に違はざる能はず、司馬は自ら是れ神仙中の人、則ちその行色亦大いに人間に異なるあるべし、離筵數處に、白雲自ら湧く、是れ豈に凡庸の能くする所ならん耶。後漢の薊子訓は神異の術あり、その去るの日、唯〻見る白雲騰起して、且より暮に至る是の如きもの數十處ありと云ふ、二句はこの事を用ひたるなり。蓬萊闕は天子の官を指稱す、而かも蓬萊は本と神仙の居る所、故に特にこの字面を撰みたり、桐柏山は卽ち天台の別名。この人一たび隱れて、長く九重の憶念を動かす、一面にその去を惜み、一面にその遇を榮とし、又一面にその操を高しとす、廻環して義を見る、轉た對偶の中にあり、語は流動せずして意却つて流動す、殆どその妙を喩る能はざるなり。

司馬子微、後、又玄宗の召を被ぶる、曾て江陵に在りて李太白を一見し、その仙風道骨ある、以て與に八極の表に神游すべしと謂ふ、太白深く知己に感じ「大鵬遇二希有鳥一賦」を作りてその意を自廣す。唐書禮樂志に據るに、司馬は又晉律に精通す、則ち本篇「羽客笙歌」云云、亦泛辭に非ざるを見る。

送梁六　張説

巴陵一望洞庭秋。　日見孤峰水上浮。
聞道神仙不可接。　心隨湖水共悠悠。

是れ張岳州に在る時の作。唐書地理志を見るに、岳州巴陵郡に、巴陵縣あり、縣に洞庭山あり、洞庭湖中に在り、數語以て詩の意境を想像するに足るなり、梁六は想ふに是れ隱者の流、故に神仙を以て之を期す、巴陵よりして洞庭を望めば、秋天正に霽れて、遙かに孤峰を水上に見る、この中の形勝、眞に神仙の窟宅に宜しきものあるに似たり、君の將に往かんとする、實にその所を得たり、抑〻聞く神仙の道は玄虛を旨とす、絶えて世人と相接せず、君一たび歸隱せば、則ち恐らくは再逢すべからず、徒らに我が思慕の心をして洞庭湖水と共に悠悠極りなからしむるのみ、長く相見るの日を望む能はざるべしとなり。「心隨」の七字、夷曠にして澹永、亦是れ不着一字の妙詣。

涼州詞　王翰

葡萄美酒夜光杯。　欲飲琵琶馬上催。
醉臥沙場君莫笑。　古來征戰幾人回。

李滄溟、王鳳州(貞世)と共に、唐一代の絶句に就いて、その壓卷を定めんと欲す、滄溟は王昌齡が「秦時明月漢時關」を推し、鳳州は卽ち翰がこの作を推す、一時の標榜、借りて以て自ら高くす、是れ實に七子の習氣、固より定論と稱するに足らず、然れども亦以て翰がこの作の一氣に廻旋して、警動異常なるものあるを證すべきなり。

落筆極めて豪宕にして、命意極めて沈痛、その大達觀を成すが如き、卽ち實に大悲觀の極たり。詩意を尋索すれば、設けて戍客豪飲の詞と爲す。葡萄の美酒を以て、夜光の玉盃に盛る、既に將に飲まんと欲して、適〻馬上の琵琶の相催すあり、以て我が觴を侑めんと欲するもの〻如し、是に於て快極つて痛飲し、頹焉として沙場に醉臥す、その態狂に似たるも、君且つ笑ふこと勿れ、抑〻古來の征士、生還するもの幾人ぞ、既に生還せず、則ち今日の生、唯〻是れ暫時の生のみ、那んぞ大いに飲んで以て今夕を永うせざるを得んや。索生に壯語を做す、自らその悲を遣る所以、想うて此に至る、その沸沸たる酒氣、卽ち是れ點點たる淚痕なり。

涼州は本と是れ宮調の曲、亦開元中に於て西涼の都督郭知運が採進する所のもの、翰が本詞實にその聲に

依る、又葡萄酒は卽ち唐時涼州の產する所、故に題して涼州詞とは謂へり。當時段和尙なるもの自らこの曲譜を製し、之を康崑崙に傳ふ、崑崙は琵琶の名手、乃ち翻して琵琶調に入り、名づけて玉宸宮と曰ふ、蓋しこの曲初めて進むるとき、乃ち玉宸宮に在りしが故なり。西域記に曰はく、龜茲國王、その臣庶の樂を知る者と大山間に於て風水の聲を聞き、約節して音を爲し後翻して中國に入る、伊州・涼州・甘州の如きみな龜茲の境なりと、以て聲樂の淵源を知るべし。比ろ河野秀野が絕句を閲するに、「霓裳散序敎坊譜。乃是聽風聽水成。」の句あり、余窃かに渠が箇中の消息に於て了悟徹底する所あるを覺せざるを得ず。

王翰字は子羽、幷州の人、少うして豪宕、才を恃んで不羈、縱酒を喜ぶ、樞は名馬多く、家に妓樂を蓄ふ、夙に張說の推許する所と爲り文士祖詠・杜華等と善し。杜少陵が韋左丞に上るの詩に、「李邕求識面。王翰願卜鄰。」の句あり、此れ杜自らその才識の人を動かすに足るものあるを誇ると雖も、實は又、翰が卜鄰を願ふを以て自ら重んず、翰の才名の當時に喧渙せらるるに非ずして能く是の如き歟。或は謂ふ杜華が母崔氏將に卜居せんとし、その子に謂つて曰はく、汝をして王翰と鄰を爲さしめば足ると、是れ恐らくは少陵が卜鄰の語あるに依りて揑造したる小說ならんのみ。張燕公は翰の文字を評して、瑤杯玉斝の如く爛然珍とすべきも、而かも玷缺多しと云へり、然れども葡萄美酒の一篇の如きは、只〻その珍とすべきを見て、未だ玷缺あるを覺えざるものなり。

清平調詞三首

李白

雲想衣裳花想容。
若非群玉山頭見。
春風拂檻露華濃。
會向瑤臺月下逢。

太白が絕句の神品たるは古來衆口の異辭なき所、玆に縷陳を庸ふることなし。清平調の詞三章、及び宮中行樂の詞十首、是れ太白天寶中玄宗特達の知遇を蒙り、召に應じて而して作る、實にその一生最得意境に在る時の作、而して渠が後半截、放逐曠廢の禍、正に復た此に坐して興る、その太白が出處に關繫するや洵に尠少に非ず。顧ふにその事蹟、傳聞異辭多くして、紛紛一ならず、今先づ新舊唐書正史の本文を基礎とし、遍く衆說を綜羅して以て好古のもの〻一考に資せんと欲す、清平調を評釋せんと欲するに於て尤も攷究せざるべからざる所のものたればなり。

玄宗曲を度し、樂府新詞を造らんと欲し、亟く白を召す、白已に酒肆に臥したり、召し入るとき水を以て面に灑ぎ、卽ち筆を秉らしむるに、頃刻にして十餘章を成す、帝頗る之を嘉みす。嘗て殿上に沈醉し、足を引きて高力士をして靴を脫せしむ、是に由つて斥け去り、乃ち江湖に浪跡し終日沈飲す、是れ劉昫が舊唐書の文なり。玄宗、白を金鑾殿に召見して、當世の事を論じ、頌一篇を奏ず、帝、食を賜ひ、手づから爲に羹を調し、詔して翰林に供奉せしむ、帝、沈香亭子に坐して意感ずる所あり、白を得て樂章を爲さしめんと欲し、乃ち召し入る、白已に醉へり、左右水を以て面に潠ぎ、稍〻解く、筆を援いて文を成すに、婉麗精切にして思を留むることなし。帝、その才を愛し、數〻宴飲する每に、白常に侍し醉うて高力士をして靴を脫せしむ、

力士之を恥とし、その詩を摘して以て楊貴妃を激す。帝白を官せんと欲す、妃輙ち之を沮止す。白、自ら親近に容れられざるを知り、益〻驚放して自ら修せず、飲中八仙の徒と爲り、山に還らんことを懇求す。帝乃ち金を賜うて放還す、是れ宋祁が新唐書の文なり。二史各〻詳略ありと雖も、舊樂府新詞若しくは樂章と云ふのみ、並に白が作りし所のもの果して何の詩なるやを點明せず、而して舊書には十餘章といふ、則ち是れ宮中行樂の詞を指稱せるもの〻如し。新書には又、帝、沈香亭子に坐す云々の語あり、却つてその清平調たるを實せるに似たり。孟棨が本事詩を閲するに云はく、李太白才逸に氣高く、陳拾遺と名を齊しうし、前後合德す、玄宗之を聞き、召して翰林に入る、その才藻人にすぐれ器識兼ねて茂きを以て、便ち上位を以て之を處く、故に未だ命ずるに官を以てせず、曾て宮人の行樂せるに因つて、高力士に謂つて曰はく、この良辰美景に對す、豈に獨り聲伎を以て娛と爲すべけんや、儻し時に逸才の詞人の之を詠出することを得ば、以て後に誇耀すべしと。遂に命じて白を召す、時に寧王、白を邀へて酒を飲ましむ、自已に醉ふ、召し至つて拜舞頴然たり、上その聲律を溥しとして長ずる所に非ずと謂ふを知り、命じて宮中行樂を題とし五言律詩十首を作らしむ、白、頓首して曰はく、寧王、臣に酒を賜ひ、今已に醉へり、若し陛下臣に畏れなきことを賜はゞ始めて臣が溥伎を盡すべしと、上曰はく可なり、卽ち二內臣をして之を扶掖し、命じて墨を研し筆に濡らして以て之に授けしめ、又、二人に命じて朱絲欄をその前に張らしむ、白、筆を取り思を抒べほぼ停綴せず、十篇立ちどころに就る、更に點を加ふること無し、筆跡遒利にして、鳳峙龍挙の如く、律度對屬、精絶ならざるなし云云。此れに據るときは太白が玄宗の御前に於て醉を帶んで艸する所のものは、全く是れ宮中行樂の詞たりしなり。韋叡が松窗錄を檢するに云はく、禁中初め木芍藥を重んず、卽ち今の牡丹なり、紅・紫・

淺紅・通白なるもの四本を得たり、上、因ち之を興慶池東沈香亭前に移植す、會〻花方に繁開す、上、照夜白に乘り、太眞妃步輦を以て從ふ、詔して梨園弟子中の尤なるものを選み、樂部十六色を得たり、時に李龜年歌を以て一時の名を擅らにす、手に檀板を捧げ、衆樂を押して前み、將に之を歌はんとす、上曰はく名花を賞し、妃子に對す、焉んぞ舊樂を用ひることをせんや、遂に龜年に命じ、金花箋を持し翰林供奉李白に宣賜し、立ちどころに清平調詞三章を進めしむ、白、欣然として旨を承く、猶ほ宿醒の未だ解けざるに苦しむ、因つて筆を援いて之を賦す、龜年乃ち詩を以て進呈す、上、梨園の弟子に命じ、約略絲竹を調撫し、遂に龜年に促して之を歌はしむ、太眞妃玻瓈七寶の盞を持し、西涼州の蒲萄酒を酌み笑つて歌意を領する甚だ厚し、上因つて王笛を調し、以て曲に倚る、曲遍將に換らんとする每に、則ちその聲を遲うして以て之に媚ぶ、太眞妃、飲み罷んで繡巾を斂めて再拜す、上是より李翰林を顧みること、尤も他の學士に異なり云云。此れに據るときは則ち太白が賦する所は純ら是れこの清平調たるなり。而して李陽冰が草集堂の序以爲らく、天寶中皇祖(玄宗を謂ふ)詔を下し徵して金馬に就く、螫を降り步迎し、綺皓を見るが如し、七寶牀を以て、食を賜ひ、御手羹を調し以て之を飯す、謂つて曰はく卿は是れ布衣なるも名、朕に知らる、素と道義を蓄ふるに非ずんば、何を以てか此れに及ばんと、金鑾殿に置き翰林に出入し、問ふに國政を以てす、潛かに詔誥を草す、人知る者なしと、是れ絶えて醉中進詩の事に及ばず、陽冰は太白が族孫たるを以て唯〻その大なるもののみを擧げたるなるべし。趙顕が李翰林集の序則ち云ふ、上皇豫游して白を召す、白、時に貴門に邀飲し、至るに及んで半醉す、出師の詔を艸せしむるに、草せずして成ると、太白が醉中艸する所を以て出師の詔なりとす、一異說なり。范傳正が墓碑に至つては、玄宗白蓮池に泛ぶ、太白宴に在らず、皇歡既に洽し、太白を召して

序を作らしむ、白已に酒を翰苑中に被ぶる、仍ほ高力士に命じて扶けて以て舟に登らしむ、優寵是の如しとあり、則ち以て白蓮池の序なりと爲す、又、一異說なり。若し少陵が飲中八仙歌「天子呼來不上船」を以て之を證すれば、この說も亦信ずべきが如し。太平廣記引く所の王保定が摭言には、李翰林白、詔に應じて白蓮花開の序及び宮辭十首を艸す、時已に大醉す、中貴人冷水を以て之に沃ぎ稍〻醒む、白御前に於て筆を索めて一揮す、文點を加へずと云ふ、是れ白蓮池の序文と宮中行樂辭とを同時の作なりとす。鐘泰華が文苑四史の文には玄宗、李白を召して白蓮の辭を艸せしめ、太眞をして硯を捧げ力士をして靴を脫せしむと見ゆ、是れ脫靴の外、又、楊妃捧硯の一事あり。段成式が酉陽雜俎に所謂李白名海內に播す、玄宗便殿に於て召見す、神氣高朗にして、軒軒として霞舉の如し、上覺えず萬乘の尊を忘れ因つて履を納れしむ、白遂に足を展べて高力士に與へ、靴を去れと曰ふ、力士勢を失し遽かに爲に之を脫す、出づるに及んで、上、白を指し、力士に謂つて曰はく、この人固より窮相なり云云に至つては、則ち又、脫靴の一異聞に屬す。今按ずるに宮中行樂の詞は多く仲春桃杏正に花さくの景を謂ふ、清平調已に牡丹を詠ずれば、此れ則ち春暮なり、白蓮池に至つては又是れ夏天の事、大抵各〻その聞く所の一事を擧げて言ふ、故に紛紜として同じからざる此の如し、松窗錄の文尤も詳且つ密、稍〻小說家の言に類すと雖も、想ふに亦據なきの談に非ず、新唐書の傳殊にその趣きに合して、而して宋の眞宗咸平元年に上柱國樂史が述ぶる所の序、亦全く此に依據す、則ち此を以て定めて清平調の本事と爲すも固より大差なきに似たり。

清平調の詞三章、句句牡丹を詠ずるもの、却つて是れ句句楊妃を詠ず、楊妃は本と環肥を以て名あるもの、牡丹の豐艷眞に相配するに足る、味は語意雙關の處に在り、若し一〻分析し來つて、某句は牡丹を指さし、

某句は楊妃を指すと云はゞ、則ち妙義索然として盡く、善讀の者は宜しくその卽かんと欲して仍ほ離れ分つも合はざる能はざる處に於て、子細に咀嚼を爲すべきなり。首句「雲想衣裳花想容」の七字、明らかにその人と花とを雙提す、雲を以て衣裳かと想ふ、その人知るべく、花にしてその人の容かと想ふ、その花又知るべし。落筆縹緲として天際より落つ、是れ太白が獨りその勝を擅にせるもの。第三者の「名花傾國兩相歡。」は全くこの句の注解と爲して見るべし。「春風拂檻露華濃。」是れ多く花に黏して之を言ふ、猶ほ第二首の承句「雲雨巫山枉斷腸。」の多く人に黏して言ふに同じ、花を言つて人その中に在り、則ちその人を言ふもの、未だ曾て花を言ふが爲ならんずんばあらず、所謂互文を以て義を見はすものなり。穆天子の傳に、穆王西崑崙に至り西王母を見るの事を敍して、群玉の上に至ると云ふ、蓋し群玉山は西王母の居る所なればなり、離騷に云はく、瑤臺の偃蹇たるを望み、有戎の佚女を見ると、二事卽ち三四の用ふる所、牡丹の異種必ず是れ天上に有る所、楊妃の國色亦全く人間に逢ふ罕れ、二典本と是れ仙女の故事、意を此に寓して、亦借つて以て花を形容す、是れ化境なり是れ神境なり。

更に意を逆へて之を觀るときは、「雲想」の七字想を設くること幻絕、乃ち「群玉山頭」「瑤臺月下」と云ふに至つても、花に非ず、人に非ず、仙に似たり、鬼に似たり、故に副島蒼海先生(種臣)以爲らく、楊妃不壽の兆、自ら箇中に在り、太白に在つてもその下筆の際、固より能く之を逆料し得たるには非ず、唯〻天この意をして自然にその筆と會せしむ、是れ太白が詩に聖なる所以なり、下の「雲雨巫山枉斷腸」亦之の如しと、その重きを天卽ち神明の作用に歸するに至つては、固より是れ此公の一家言に屬す、予豈に敢へて贊否をその間に容れんや。然れども詩の神聖の域に到る或は以て之を致すことあり、詩聖の二字は由來人多く

之を杜少陵に擬す、獨り朱子は太白を以て詩に聖なるものとす、恐らくは未だ見る所無しと言ふ能はざるなり。

宋の蔡君謨（襄）この詩を書して、その起句則ち「葉想衣裳花想容」に作る、止〻是れ一字を換へて、この句全く化して牡丹の詠物と爲る、而して近清の吳舒鳧なるもの、盛んにその從ふべきを稱し「雲」に作るを以て甚だ謂はれなしとす、此れ則ち貪奇好異の過なり。王琦曰はく、雲を以て葉に作らば、便ち嚼蠟に同じく索然味なし、必ず是れ君謨が一時落筆の誤のみ、意ありて金を點じて鐵と爲せしには非ずと駁し得て極め、て當れり。唐仲言に至つては、清平調三章を解するに、强ひて分析を加へ、その一章を以て玄宗未だ楊貴妃を得ざる時に就いて言ふものとし、二章を既に楊妃を得たる後、三章を楊妃善媚を寫すとす、而して「雲想」「花想」の句を解して謂ふ、玄宗武妃の薨後に於て、美人を得んことを思ふ、故に雲を見てはその衣を想ひ、花を見てはその貌を想ふと、迷謬此に至る、眞に一笑にも値せず、毛稚黃は云はく、二「想」の字已に塡詞の纖境に落つ、「若非」「會向」も居然たる滑調なり、「一枝濃艷」「君王帶笑」に至つては了に高趣なし、此君七絕の豪なるも、此三章は殊に人意に滿たずと。「天に向つて唾を吐く」適〻以てその面を涴す、稚黃が詩源は本と大倉（王元美）・歷下（李于鱗）より出でたり、故に好んで高論を爲し、復た忌憚なし、太倉・歷下の人を誤るかくの如し、眞に妄男子なり。

其二

一枝濃艷露凝香。　雲雨巫山枉斷腸。
借問漢宮誰得似。　可憐飛燕倚新粧。

平心にしてこれを讀む、初め譏刺に涉れるものあるを見ず、夫れ巫山の雲雨は、本と是れ夢寐恍忽の言、豈に目前にこの濃艷の花あり而してこの花に似たるの人あるに如かんや。故に彼を枉く斷腸すと謂ふものは、適〻以てこの眞に銷魂するに足るを見はせるのみ。則ち漢官飛燕を以て之に擬するに至つても、古今の推して絕色と爲す所のものを擧げて、聊かこの花、この人の無雙なるを喩へんと欲するに過ぎず、飛燕が本と微賤より起りて終に漢の禍水たりしと否とは、太白落筆の際斷じて想ひ及ぶ所に非ざるなり。故に楊妃、龜年の之を歌ふを聞きて、笑つてその意を領すること甚だ厚し。若し果して後人穿鑿の說の如きものあらん乎、此れ特に隱諷なるのみならず、顯然として指斥す、力士が讒を待つて始めて知るべきにあらず、楊妃たるもの尙ほ何の笑つて意を領することか之れ有らんや。出語の不謹に似たるは太白が豪縱磊落の然らしむるところなり、此れを以て口實を小人に與へ、裴非貝錦羅織中傷終に放廢を致す、昔賢、讒人を惡んで、豺虎に投げ卑へんと云ふは正に此れが爲にして、寃は不白と雖も、罪、無心に出づ、亦是れ太白の貴ぶべき處、若し公然非福の言を爲して、以て直諫の名に居らんと欲するものなりとせば、碎屍萬段と雖も、亦惜むべきに非ず、故に予は必ず定めて諷刺の意なきものなりと爲すなり。

力士致讒の由、上章に引く所の新舊唐書の傳、ほぼ一班を見る、今、松窗錄に就いて更にその詳細を擧げん

に、力士深く脫靴の一事を耻とす、異日楊貴妃重ねて前詞を吟す、力士戲れて曰はく、我れ窃かに妃子は李白を怨んで深く骨髓に入ると謂へり、何ぞ反つて拳拳たる是の如きや。楊妃驚いて曰はく、何ぞ翰林學士にして能く人を辱かしむる是に至らん。力士曰く、飛燕を以て妃子を指すは、是れ之を賤しむ甚だしきなり。楊妃深く之を然りとす、上、嘗て三たび李白を官せんと欲す、卒に宮中の捍する所と爲つて止むと云ふ、力士が一激、巧言簧の如し、讒舌の畏るべき、以て鑒と爲すべし、魏顥が序には云ふ、白、張洎の讒を以て逐はれ海岱間に游ぶと、李陽冰は云ふ、醜正列を同うし能を害し謫を成す、格言入らず、帝用つて之を疎んずと、范傳正が墓碑には、則ち白、上疏して舊山に還らんことを請ふ、玄宗甚だその才を愛するも、或はその醉に乘じて省中に出入し溫室の樹を言はざる能はざるを慮り、後患を貽さんことを恐る、因つて惜しんでその志を遂げしむとあり、群言を括して之を裹するに、白が豪宕の才、時人の忌剋を招く、一にして足らず、外には同列の集失あり、內には楊妃・力士の間沮あり、玄宗の愛才を以てすと雖も、終に之を用ふること能はず、深く嘸喟すべきなり。事已に讒構に屬す、その無根たるを知るべし、若し本篇實に譏諷に意あらば、讒者の言は讒に非ずして當然の理なりと謂はざるを得ず、我れ故を以て後世箋釋家の說の採るに足らざるを信じて疑はず。

蕭士贇が太白詩注、由來稱して善本と爲す、然れどもその本詩を解する殊に深文を用ふ、その言に云はく、傳ふる者謂ふ、高力士、飛燕が事を指摘して以て貴妃を激怒すと、予謂へらく、力士をして書を知らしめば卽ち雲雨巫山、豈に尤も甚だしからずや、高唐の賦の序に、神女常に先王に枕席を薦むとありて、その後又、襄王夢に之に遇ふと曰ふ、此に枉しく斷腸すと云ふものは亦その曾て壽王の妃たりしを譏る、壽王をして未だ

情を忘るゝこと能はざらしむ、是れ卽ち枉しく斷腸するものに非ずや、詩人の事を比して興を引く、深切著明なる此の如し、特に讀む者以て常事と爲して之を忽せにするのみと。昔人曾て李玉溪(商隱)が「薛王沈醉壽王醒」(龍池)を刺りて、國惡を暴揚するものとす、然れども彼れは仍ほ事後の論なり、太白が本篇にして果してこの意あらんにはその輕薄なる寧ろ更に甚だしからずや、乃ち士贇は此を以て轉た國風諷諫の體を得たりとし、太白纔かに君側に近づくを得て當時の人の言ひ難き所の者を以て、之を詩內に寓し、玄宗をして詩に由つて悟る所あらしむ。その社稷蒼生、庶幾くは摎ゆることあり、豈に小補すと云はんやと贊揚して措かざるに至る、是れ詩の比興を以て動もすれば君子小人の辯に混ずるものと同一の腐論に屬す、詩を解するもの、必ずこの見を胸中に執りて、之を句度字權せば、則ち古今の詩、一として時を譏り政を誹るの作に非ざるは無く、忠厚和平の旨は是に於て全く失す、故に我れ殊に王琦が注に取ることあるなり。

王琦の注に曰はく、力士の讒は惡極まれり、蕭氏が解する所は則ち尤も甚し、之を揆るに太白起草の時則ち安んぞ是れ有らんや。「巫山雲雨」「漢宮飛燕」は唐人之を用ひて、已に數見不鮮の典たり、實に若し蕭氏が說の如くば、巫山の一事は只以て聚淫の艷冶に喩ふべく、飛燕の一事は、只以て微賤の宮姝に喩ふべし、此れより外はみな宜しく言ふべき所に非ず、何ぞ三唐の諸子、初め此れを以て忌とせざる耶。抑、清平調は是れ應詔の作、乃ち敢へて宮闈暗昧の事、君上の言ふを諱む所のものを以て微辭もて之を隱喩す、將た君が之を知らんことを欲する乎、亦君の之を知るを欲せざる乎、若しその知らずんば、言ふも亦何の益ぞ、如しその之を知らば、是れ龍の逆鱗を批して虎尾を履むなり、至愚極妄の人に非ざるよりは、當に此れを爲さゞるべし。又、楊妃の宮に入るゝこの時に至りて幾ど將に十歲ならんとす、この時卽ち忠君愛主の親臣ありとも、

亦只成事は說かず、既往は咎めざるを以て、之を奈何ともする無きに付せんのみ、若し新進太白の如きもの、却つて之を無益の空言に託して、君の一悟を期せんことを欲すと謂はゞ、何ぞ其れ不智の甚しきや、古來文字の累は大抵自ら知らざるに出てゝ而して莫須有に成る、深く是れ畏るべし、然れども小人は人を陷るゝを以て事と爲す、その言本と惟むに足ることなし、而して詞人・學士の詩文を數百載の下に品隲せる、亦巧詞曲解を爲すことを效ひ、以て前人が辭外の旨を擬議せんとす、是れ則ち大いに異とすべきなり云云。嗚呼是れ眞に識微の論と謂ふべきなり。

其三

名花傾國兩相歡。　長得君王帶笑看。
解釋春風無限恨。　沈香亭北倚欄干。

春風無限の恨、惟〻この牡丹の名花楊妃の傾國を見て、始めて解釋し去るべし、故に兩つのもの沈香亭北の欄干に相倚つて、常に君王の笑を帶んで看ることを得たるなり。究竟是れ萬事を破除して一に歡樂に從ふの義。「解釋春風無限恨」とは、名花と傾國と能くその恨を解散し去るべきを謂ふ、この二つの者卽ち之を解識し得たりとの義には非ざるなり。唐仲言謂ふ、楊妃の心に春風無限の恨を解す、故に正に欄に倚つて媚を君王に求む、蓋し春風は歡み易し、故に以て恨むに足る、漢武の云はく、「歡樂極兮哀情多」（秋風辭）と太白極歡

の際に於て一恨字を着す、意甚だ淺からず云云。是れ全く「解釋」の二字を解して「解識し得たり」の義と爲す、見る所太だ膚淺なり、而して後人その語を受くるもの正に復た少からず是れ更に異しむべきなり。

開元天寶遺事に、玄宗林苑の中に於て、初め千葉桃あり盛んに開く、帝貴妃と日に逐つて樹下に宴す、帝の曰はく、獨り萱草の憂を忘るゝのみにあらず、この花も亦能く恨を銷すと（銷恨花）、所謂「解釋春風無限恨」亦輙ちこの意なり。按ずるに開天遺事亦一則あり、謂ふ玄宗貴妃と華淸宮に幸す、宿酒の初めて醒むるに因つて、妃子が肩に凭り、同じく木芍藥を看る、上親しく一枝を折りて妃子に與へ、遞にその艷を嗅ぐ、帝曰はく、惟〻に萱草の憂を忘るゝのみならず、この花香艷にして亦能く酒を醒ますと（醒酒花）、醒酒・銷恨各〻その趣を異にすと雖も、その事は則ち太だ相類す、若し千葉桃を以て木芍藥の誤りとし、醒酒を以て銷恨の異辭のみに過ぎずとせば、則ち太白が本篇又安んぞ當時の本事を實寫したるものに非ざるを知らんや。

我邦菅茶山が鐘馗を詠ずるの詩、「于腮旰目突其冠。相見醒風送筆端。別有夔魖君識否。沈香亭北倚闌干。」池五山（菊池侯孫「五山堂詩話」卷一）特に之をその詩話の首に冠して、以爲らく李句を全用す、殊に警拔を覺ゆと、然れどもこの詩終南道士が劍を以て楊妃を斬らざるを恨む、その意明の蔣主孝が、「偸花竊笛渾閒事。忍看三郎萬里穡」より出でたるは五山も亦已に之を言へり、既に意を襲ふ所ありて、亦乃ち太白がこの詞を襲ふ、貶して偸句の鈍賊なりと曰はゞ或は失當を免れずと雖も、亦斷じて才人の爲すを屑とする所のものに非ず、況や前三句みな疎調にして、結句獨り太白が成語を用ふ、絕えて相匀稱せず、此れ亦實に無鹽を刻畫して西施に唐突すると同日の談に屬す、五山の徒盛んに擊節を加へ、又獨り疑をその第二句に致す、是れ眞に別に肺腸あり、吾輩の常に解すべから

ずとする所なり。

客中行

蘭陵美酒鬱金香。　玉碗盛來琥珀光。
但使主人能醉客。　不知何處是他鄉。

白、已に力士の讒を以て放たれ、乃ち從祖陳留の採訪大使李彦允に就き北海の高天師に請ひて道籙を齊州の紫極宮に授かる、是より四方に浮游し、北は趙・魏・燕・晉に抵り、西は邠岐を涉り、商を歴て洛陽に至る、南は淮泗に遊び、再び會稽に入り、魯中に寓し、時に齊・魯間に往來す。本篇「蘭陵美酒鬱金香。」蘭陵は唐の沂州に在り、沂州は春秋の魯境に屬す、即ちその齊・魯間に往來せる時の作なるを知るなり。

蘭陵の酒は鬱金香草を以て之を浸醸す、その味最も芳美、況や盛るに玉碗を以てす、黄流澄澈して琥珀の光の如きあり、此れを以て客に勸む那んぞ飲まざるべけん、既に飲んで而して醉ふ、即ちその客たることを忘る。酒ありかくの如し、天下何の地か吾が土に非ざる、流放の餘、恬然として自適す、是れ青蓮が落落の襟懐、竄徙を經ると雖も、初め怨怨に厝慮たらざるを見るなり。起二句を誦す、酒人余の如き已に覺ゆ垂涎三尺、妙は「琥珀光」の三字形容し得てその流動を極むるに在り、此れ亦惡客と倶に此れを語るべからざるものなり。王翰が「夜光杯」と並傳して酒を寫すの雙絶と稱するに足る。

峨眉山月歌

峨眉山月半輪秋。　影入平羌江水流。
夜發清溪向三峽。　思君不見下渝州。

始め清溪を發して、遥かに峨眉山月半輪の倒影、平羌江水中に瀲灩たるを見る、既にして舟、三峽に向ふ、連山疊障、峽逼り岸圍む、是に至つて復た天月を望むこと能はず、終に渝州に到れるなり。渝州は今の四川重慶府、峨眉山・平羌江、並に是れ嘉州の地、清溪は驛の名、亦渝州の犍爲縣に在り、三峽は即ち巴峽・明月峽・巫峽を謂ふ、詩意は大抵右の如し、箋註家古今地埋の同異に就いて紛紜粲訟す、要するに大義に於て關する所頗る少、故に今一切を剗除し盡せり。「思君不見」は固より月を指して言ふ、然れども月は本と是れ峨眉山の月、峨眉の蛾眉と音相通ずるより尋味すればその中亦固より人の在るあり、故に劉辰翁は評して含情悽惋にして竹枝縹緲の音ありとは謂へるなり。

この詩古來推して妙品と爲す、蘇東坡人の嘉州に守たるを送るの長篇中「峨眉山月半輪秋。影入平羌江水流。謫仙此語誰解道。請君見月時登樓」と云ふ、その深く之に傾倒せる、猶ほ太白が「解道澄江如練。令人長憶謝元暉」（三山望金陵寄殷淑）と云うて、宣城に低首せるが如きものあり。王元美（世貞）は謂ふ、此れは是れ太白の佳境、二十八字中に峨眉山・

平羌江・清溪・三峽・渝州あり、後人をして之を爲さしめば恐らくは痕跡に勝へず、益〻この老が鑪錘の妙を見ると（鶴苑巵言）。王敬美（王世懋）も亦謂ふ、談藝の者、七言の一句中に兩故事を入るべからず、一篇中に故事を重犯すべからずと謂ふものあり、吾れ以てみな妙悟に非ずとす、詩を作りて精神の傳處に到れば、分に隨うて自ら佳下し得て痕跡を覺えざらしめば、一句に兩故事を入れ、一篇に一事を重犯すとも、亦目ら傷なけん、太白が峨眉山月歌四句の如き、地名を入るゝもの五、古今目して絶唱とす、殊にその重を厭はず、云云みな知言なり。凡て太白の詩は景、意と會して、筆を振うて疾書す、宇宙の奇觀を極め、古今の絶調を爲す、胡元瑞、太白と王昌齡の異同を論じて云ふ、大概李は景を寫して神に入り、王は情を言うて極に造る、王の宮辭樂府は李爲すこと能はず、李の覽勝紀行は王作ること能はずと（詩藪）、然れば則ちこの首及び「朝辭白帝」等の篇は、實に青蓮が獨擅中の殊に專長を見るものと謂ふべし。

上皇西巡南京歌二首

誰道君王行路難。
地轉錦江成渭水。

上皇西巡南京歌、凡そ十首、玄宗幸蜀の事を賦するなり、按ずるに唐書玄宗紀に天寶十五載六月、安祿山の兵潼關を破り、己亥京師を陷る、帝出でゝ蜀に幸す、七月庚辰、蜀郡に次す、八日癸巳、皇太子皇帝の位

六龍西幸萬人歡。
天廻玉壘作長安。

に靈武に即く、帝を尊んで上皇天帝と曰ふ、至德二載十月丁巳、皇帝京師を復す、癸亥太子太師韋見素をして上皇を蜀郡に迎へしむ、十二月丙午上皇蜀郡より至る、戊午、大赦して蜀郡を以て南京と爲す、蜀は本と天下の西偏に在りて之を南京と謂ふは、その長安の南に位するが故なり、蜀を謂つて南京と爲すは、肅宗の長安を回復して以て玄宗を蜀より迎へしの後に在ること、正史の文昭々たること是の如し。本篇既に明らかに題して南京と曰ふ、則ち十首の文專ら玄宗が西巡の事を賦すと雖も、實は玄宗還京の後に於て、偶〻既往の事實に溯りて作りしものなることは、固より論ずるを待たざるべし。唐室既に再造し、上皇の駕亦京闕に還る、當時に在つては實に最大の慶事に屬す、この大慶の日に遭ふ、則ち彼の乘輿播遷・流離蒙塵の跡の如きは、臣子として再び之を言ふに忍びざる所、況や太白が本貫は原と蜀の隴西に在り、上皇が幸蜀、一時社稷の傾危を致すも、乾坤一たび整頓せる今日より之を視れば、適〻以てその桑梓の地に榮光を加へたるが如き觀あり、故に十首みな鋪張壯麗にして、絶えて一衰颯の語を着せず、既に國辱を雪ぎ因つて以て國體を全うす、洵に浣花叟（杜甫）が楊妃縊死を賦して「不聞夏殷衰。中自誅褒姒」（北征）と云へると水乳の筆法。立言の嚴正にして、用意の切到なる太白が集中亦有數と稱すべきなり。

玆にその二を選す、本篇は即ちその第四首なり、「天子にして都を棄てゝ奔竄す、古今絶大の驚心動魄の事、一たび青蓮が筆に入りて、忽ち化して沈博絶麗花團錦簇の文と爲る奇絶幻絶と稱すべし。言ふ心は蜀道古へ行き難しと稱す、然れども六龍西幸して轉た坦途の如く、萬人歡悅して壺漿道に載つ、復たその難を見ざるは何ぞや、他なし、天地造化の之がために斡旋して、錦江の流を轉じて渭水と爲し、玉壘の山を廻して長安と作す、駕は蜀地に幸すと雖も、實は仍ほ京師の康莊を行くに異ならざればなり。餘の八章、大抵みなこの

筆法を用ふ、その二に云はく、「九天開出一成都。萬戸千門入畫圖。草樹雲山如錦繡。秦川得及此間無。」その三に云はく、「華陽春樹似新豐。行入新都若舊宮。柳色未饒秦地綠。花光不減上陽紅。」その五に云はく「萬國同風共一時。錦江何謝曲江池。石鏡更明天上月。後宮親得照娥眉。」その六に云はく、「濯錦清江萬里流。雲帆龍舸下揚州。北地雖誇上林苑。南京還有散花樓。」造語各〻同じからざるも、命意の在る所ほぼ相同じ。詞は蜀都の佳麗を誇るに似て、思は實に故都の感を寓す、その歩歩、長安と相對比し、口口、渭水・秦川・曲江・上林を離れざるに於て之を領すべきなり。王弇州(世貞)此れを以て宋人が東狩鑑塘の封事に異ならずとす(藝苑巵言)、胡震亭之を駁して曰はく、夫れ太白亦詩酒みづから娛み、一生を跌宕せるものゝみ、安んぞ能く語の忌拘敎義を顧みてこの屑屑たる者を爲さんや。詩人は各自に一性情を寫し、各自に一品局を成す、固より錦袍の豪翰を取りて、强ひて繩するに瘦笠の苦藻を以てし、必ず籥吹を同じうして、善と爲すことを得ざるなり(唐音癸籤)と、その辨自ら此の如し、然れども李がこの歌の玄宗が還京後に作り、暗にその早還を幸とするの意あるを知らずして、一味に豪縱不羈の語なりとするに至つては、則ち之を讀んで未だ精なる能はざるを免れざるに似たり。抑〻當時倉皇西幸して扈從蕭條、崎嶇たる棧橋、淋鈴を聞いて悲感せるの情事は、太白が蜀道難、既に爾許の大手筆を用ひて、滿腔憂國の至誠を吐露す、太白たるもの豈に眞に此れを以て盛事と爲さんや。然れども歸馬雲屯し紫極新たに開くの日に於て之を作る、則ち冷凄惻愴の音を一洗して以て喬皇典麗の觀を點綴せるは、固より是れ詞人の本色、故に余は寧ろ此れを以て得體の作なりと謂ふに憚からざるなり。唐汝詢は

云はく、猗嗟は莊(魯の莊公)を譏りて而してその藝を贊し、副笄は宣(衛の宣公)を刺りて而してその容を美す、太白は尊者のために諱むと雖も、然れども亡國の恥は正に言表に在りと、此れ又此れを求めて却つて深きに失するものなり。

其二

劍閣重關蜀北門。
上皇歸馬若雲屯。
少帝長安開紫極。
雙懸日月照乾坤。

蜀よりして長安に歸る、宜しくその北門よりすべし、劍閣の險、自ら是れ蜀の門戸、玄宗幸蜀に由りてこの險始めて開く、今は則ち長安に還幸す、是れこの門戸再び閉づるなり、故に「重關」と云ふ、蓋し本歌の第一章云ふ、「胡塵輕拂建章臺。聖主西巡蜀道來。劍壁門高五千尺。石爲樓閣九天開。」而して本篇は卽ちその卒章に屬す、故に遙かに起手に照應し「劍閣重關」を以て之が尾を收めたるなり。解する者或は「重關」を以て重疊關封の義と爲し、唯〻その絶險を狀するの語とするは誤れり。玄宗既に歸途に就きて、肅宗も亦已に長安を克復す、紫極新たに開きて、上皇少帝龍馬玆に會す、是れ猶ほ日月を雙懸して以て乾坤に照臨せるが如く、殘破の山河重ねて靈秀を鍾め、焚殘の草木、再び雨露に霑ふ、天下庶幾くは此れより靜謐に歸せんとなり。劍閣の關づるは正に紫極の開くが爲、少帝の復

せるは卽ち上皇が歸れる所以、起句より三句に至る、この意相對峙して雙奇峰を爲し、「雙懸日月」を以てこれを總攬す、格法また自ら別なり。乾隆帝以爲らく、當時の事を述ぶる何等の明白、詩史と作すべし、或は曲解して肅宗當に位を避けて上皇に復辟せんことを請ふべきを諷するものとし、或は肅宗が張良娣に惑うて上皇を南内に徙せるを刺るものとせるは、みな附會の說なりと。蓋し太白がこの歌、本と上皇の還幸を聞き、深く慶して以て作る、故に驚喜の意每篇に溢滿す。尙ほ何ぞ諷刺の言を爲すに暇あらんや、且つ兩宮の嫌疑は全く後日の談に屬す、作歌の當時、寧ろ此れあるを容れん、世に深文の徒あり、口を開けば、輒ち此種の論を成し、自ら以て得たりとす、吾れ正にその何等の肺腸なるやを知るに苦しむなり。僧大典の解頤「上皇歸馬若雲屯」の下に、注して云ふ、蜀を謂つて京と爲す、故に稱して歸と曰ふなりと、乖謬此に至る最も噴飯するに堪へたり。

肅宗未だ京師を收復せず、玄宗仍ほ蜀都に播遷するの時に於て、永王璘、正に重兵を江陵に擁す、璘は玄宗の第十六子なり、少うして母を失ひ、肅宗自ら之を養視す、長じて聰敏學を好めるも、その貌醜陋にして正視すること能はず。史にその擧兵の始末を敍して曰はく、江淮の租賦鉅億萬、所在に山積す、璘、宮中に生長して、事に於て通曉せず、その富强なるを見て遂に江左を窺ふの意あり、肅宗之を聞き、璘に詔して、還りて上皇を蜀に覲せしむ、璘從はず、その子襄成王陽、剛鷙にして謀に乏しく、亦亂を樂む、因つて璘に金陵を取らんことを勸む。卽ち舟師を引いて東下し、甲士五千、廣陵に趨り、渾惟明・李廣琛・高仙琦を以て將と爲す、然れども未だ敢へて江左を取ることを顯言せず、云云と。是の時太白、四方を放遊して匡廬に到る、永王その名を聞き招いて之を幕下に致す、璘が擧兵に當りて、太白乃ち永王東巡歌十一章あり、以てその事

を紀す、その風調氣格實に上皇西巡南京歌と相髣髴す、詩法を究めんと欲するもの、必ず參觀せざるべからざる所、而してこの詩卽ち太白が一生の罪案にしてその出處に關係する亦頗る大なり、因つて此にその尤なるものを附見し、併せて考證に備ふ。

その第一章に云ふ、「永王正月東出師。天子遙分龍虎旗。樓船一擧風波靜。江漢翻爲鴈鶩池。」蕭士贇謂ふ、永王の出師を詠じて首篇之を表するに「天子遙分龍虎旗」を以てするものは、夫子春秋を作りて王を書するの意なり、太白が忠君の心此に于て見るべしと、此れ未必の論に屬すと雖も、太白實に曾て永王に異志あるを知らず、時正に羯胡縱橫して社稷危殆の秋なるを以て、その兵を動かすは卽ち王命を遵奉して勤王討賊の師を出せしものなりと認定したりしは疑ひなきなり。その第二章に云ふ、「三川北虜亂如麻。四海南奔似永嘉。但用東山謝安石。爲君談笑靜胡沙。」是れ隱然謝安を以て自負す。宋の蔡寬夫以爲らく、太白は豈に人に從うて亂を作すものならん、但〻その學は本と縱橫より出で、氣俠を以て自ら任ず、中原擾攘の時に當りて之に藉りて以て奇功を立てんと欲するのみ、「但用東山謝安石」云云、亦その志を見るべしと。第三章「雷鼓嘈嘈喧武昌。雲旗獵獵過潯陽。秋毫不犯三吳悅。春日遙看五色光。」第四章「龍蟠虎踞帝王州。帝子金陵訪古丘。春風試暖昭陽殿。明月還過越鵲樓。」俱に力を極めて出師の盛を狀す、その賊亂を平定して旣倒の狂瀾を挽さんと欲するの外、千萬別に一段の深謀あるを知らざりしは、豈に皦然として明らかならずや。第五章に至つては、「二帝巡游俱未回。五陵松柏使人哀。諸侯不救河南地。

更喜賢王遠道來。」端を改めて言ふ玄・肅の二宗、俱に出でゝ外に在り。長安累代の寢陵、終に胡騎の蹂躪に遭ふ、是れ何等の時にしてか、而かも天下の諸侯多く坐視して救はざるや、深く永王が出師の國家の重を繫ぎ父兄の恥を雪ぐに在るを美するなり。その卒章に云ふ、「試借君王白玉鞭。指揮戎虜坐瓊筵。南風一掃胡塵靜。西入長安到日邊。」その終に大功を成し、京に入つて凱を奏せんことを望む、若しその逆念あるを悟らば、豈に復たこの語を成さんや。抑〻永王江左に竊據せんの意あるは、本と是れ重大機密の事、幕賓輩の得て窺ふ所に非ず、故に史傳にも敢へて顯言せずの文あり、特に此れのみならず、永王が將李廣琛が將に出走せんとするに際し、諸將に謂へるの言に曰はく、吾れ公等と永王に從ふは、豈に反せんことを欲するものならんや、上皇播遷して道路通ぜず、而して諸子、王より賢なるものなし、如し江淮の銳兵を總べて雍洛に長驅せば大功成るべし、今は乃ち然らずして、吾等をして名を叛逆に挂けしむ、後世を如何と、是れ明らかにその心腹の諸將と雖も、初めは亦永王が出師を以て勤王討賊と誤認したるもの多きを見る、太白に於て何をか咎めん。況や太白が永王の幕に入る、實はその願ふ所に非ず、その自述の詩に云はく、「僕臥香爐頂。喰霞嗽瑤泉。半夜水軍來。潯陽滿旌旆。空名適自誤。迫脅坐樓船。徒賜五百金。棄之若浮煙。辭官不受賞。翻責夜郎天。」以て證とすべし、既に願ふ所に非ず、何を以てか永王を頌揚する此に至れる、他なし、勤王討賊の實に美事にして、一日も早く中原を克復し二帝の歸駕を見んことは、その心心念念未だ曾て忘るゝ能はざる所なるが故のみ、既にして王の悖逆漸く見はるゝも、未だ之を識破すること能はず、李廣琛等が出走に至りて、猶ほ悟らず、事敗るゝに及んで始めて倉皇として奔逸し、

終に夜郎流竄の辱を蒙り、今に至りて不明の譏を辭する能はざるものは、亦止〻その初一念確信して疑はざりしがために累せられしなり。その心跡を推せば寧ろ深く悲しむべからずや。東坡云ふ、璘の狂肆寖陋なるを豫てせば、庸人と雖もその必ず敗るゝを知る、太白能く郭子儀の人傑たるを識りて、璘の成ること無きを知らずとせば此れ理の必ず然らざる者なりと。此等の議論專ら事理を以て事情を推斷す、然れども理の無き所、情或はこれあり、那んぞ妄りに揣摩すべけん、蔡寬夫は謂ふ、大抵才高く意廣き孔北海の徒の如きも、固より未だ成功あらず、而して人を知り事を料るは尤もその難しとする所、譏するもの、若し太白を責むるに、璘の猖獗にして仰いで以て事を立てんと欲し、孔巢父・蕭穎士輩が之を未萌に察せしが如くなる能はざるを以てせば、或は斯れ可ならん、若しその志を論ずれば則ち亦哀しむべしと、此れ稍〻平允に屬す。趙雲菘（翼）、白が南奔（懷）の詩の「主將動疑。王師忽離畔。賓御如浮雲。從風各消散。」の句を指して、反つて李廣琛等が反正歸國を謂つて離畔と爲すものに似たり、その愚も亦甚だしと爲し、又、「張良未遇韓信貧。劉項存亡在兩臣。暫到下邳受兵略。來投漂母作主人。」及び「蕭・曹・曾・作沛中吏。攀龍附鳳會有時。」（猛虎行、原作會を當に作る）等の句を指摘して、直ちに亂に乘じて風雲の際會を圖らんと欲するものなりと斷定せるに至つては（韻北詩話卷一）、甚だ穿鑿に渉る、多く取るに足らざるを信ずるなり。

聞王昌齡左遷龍標尉遙有此寄

楊花落盡子規啼。聞道龍標過五溪。
我寄愁心與明月。隨風直到夜郎西。

太白が集中、王昌齡と同じく族弟襄が桂陽に歸るを送るの詩あり、中に云ふ、「秦地見碧草。楚謠對清樽。把酒爾何思。鷓鴣啼南園。予欲羅浮隱。猶憶明主恩。躊躇紫宮戀。孤負滄洲言。」云云。詩意に據れば太白仍ほ翰林に供奉たるの時たり、而して昌齡が左遷は何年の事たるを詳かにせざるも、その祿山の兵塵擾擾の時を期として私かに里中に還るの事傳に見えたれば、料るに亦天寶の末年に在るべし。大典が解頤、詩中に夜郎の二字あるを以て妄りに太白夜郎に流竄したる後の作なりと臆度し、終に「隨風直到夜郎西」を解して昌齡已に東、江寧より西、龍標に至る、願はくは更に西して我が許に至ること、一に月の東よりして西するが如くなれとの意なりとす、迂謬殊に笑ふべし。唐仲言曰はく花鳥將に盡きんとするの時に當り、適〻君にこの行ありと聞く、是に於て明月に因つてこの愁心を寄す、その風に隨うて直ちに君が許に至らんことを欲するなりと、この解稍〻是なるに近し。五溪は武陵夷蠻の名、唐の敍州に屬す。夜郎は則ち溱州に在り、然れども漢書西南夷傳に據れば、西南の君長十を以て數ふ、夜郎最も大なりとあり、然れば本篇直ちに龍標の謫地を指して「夜郎西」と云ふはその總稱を舉ぐるのみ。身夜郎に在りて更にその西せんことを欲するものに非ざるや明らかなり、況や太白が夜郎に竄せらるゝは乾元元年の事にして天寶を去る已に遠し、又、傳に據れば、太白實は未だ曾て夜郎に至らず、

中道にして赦に遭つて歸る、那んぞ夜郎に於て王の龍標に貶せらるゝを聞くと云ふことを得んや。此を以て益〻大典が妄を破るべきなり。

楊花は是れ飄搖、靜くなきの物、子規は卽ち日夜歸るを思ふの鳥、眼にこの花の落つるを看、耳にこの鳥の啼くを聞く、是れ固より暮春の實景、惟〻實景を點染して而してその人天涯淪落の恨、早く已に堪へず、是を神來自然の句と爲す、詩の六義中、惟〻興を以て最難とするは、則ちこの自然の境に達し易からざるが故なり、毛詩黃以爲らくこの詩白樂天が「殘燈無餘影。幢幢」（按ずるに此れ元微之の詩なり樂天の句とせるは誤れり）（聞白樂天左遷江州司馬）と體同じく類類す、而して風趣の高卑は自ら天壤を覺ゆと、蓋し彼れは故らに苦語を作す、語は深くして意は反つて淺露す、その別何んぞ啻に上下床のみならんや。

曹子建が怨詩に「願作東北風。吹我入君懷。」（雜詩）太白が本篇この二語を渾融して、一種の奇語を成し、一倍の深情を見る、剪栽の工を悟すべし、胡元瑞謂つて八極を揮斥し九霄を凌厲するの意ありとし（詩藪）、沈歸愚、以て出すに搖曳の筆を以てし語意一新すと云ふ、並に會心の處ありと謂ふべし。

黃鶴樓送孟浩然之廣陵

故人西辭黃鶴樓。
煙花三月下揚州。
孤帆遠影碧空盡。
惟見長江天際流。

一二送別の正文、三四は卽ち別後の悵望、目力已に極まりて離思盡くることなし、遙情遠韻亦渺として天際に在り、人をして畫表に神行し絃外に意解するの妙あらしむ。按ずるに陸放翁が入蜀記に云ふ、太白が詩「征帆遠映碧山盡。唯見長江天際流。」蓋し帆檣遠山に映ずれば知る能はざるなりと。此れ則ち本篇の異文に屬す、或は「碧空」「天際」、その語複に似たるを以て碧山に從ふを可とすべしと謂ふものあり、然れども帆影の盡くる處、長江卽ち流る、碧空天際、之を申言して愈〻水天渺瀰の狀を見る、若し碧山に作れば、未だ語に滯相あるを免れず、況や「征帆遠映」四字甚だ拙、斷じて謫仙が詞に非ず、當に是れ放翁一時記誦の謬なるべきのみ。

太白、孟浩然に贈る詩、「吾愛孟夫子。風流天下聞。紅顏棄軒冕。白首臥松雲。醉月頻中聖。迷花不事君。高山安可仰。徒此揖清芬。」又春日山に歸り孟浩然に寄するの詩、「朱紱遺塵境。青山謁梵筵。金繩開覺路。寶筏渡迷川。嶺樹攢飛拱。巖花覆谷泉。塔形標海月。樓勢出江煙。香氣三天下。鐘聲萬壑連。荷秋珠已滿。松密蓋初圓。鳥聚疑聞法。龍參若護禪。媿非流水韻。叨入伯牙絃。」後者は則ち方虛谷の最も繫節してその工夫の縝密なるを賞稱する所のもの（瀛奎律髓卷四十七、釋梵類）、要するに浩然が高操を標出せるは二詩實に一轍に屬す。杜少陵も亦云ふ、「復憶襄陽孟浩然。清詩句句盡堪傳。卽今耆舊無新語。漫釣槎頭縮項鯿。」（解悶）浩然「不才明主棄」の五字を以て、玄宗の忌に觸れ、布衣を以て終ると雖も、一代詩豪の爲に傾倒せらるゝ此の如く、獨り王摩詰がその像を圖するのみならず、庶幾くは慽み

なかるべし、王士源が浩然集の序に據るに、開元二十八年、王昌齡襄陽に游ぶ、時に浩然瘖を疾み、將に愈えんとす、相得て甚だ歡び、浪情宴謔し、鮮を食し疾動く、遂に治城の西園に歿す。年五十有二とあり、則ち孟が卒は開元二十八年に在り、太白が諸贈詩は其年以前の作たるを證すべきなり。

海錄碎事に記す、唐の司馬承禎・陳子昂・盧藏用・宋之問・王適・畢構・李白・孟浩然・王維・賀知章と仙宗の十友たりと。是れ竹溪六逸・飲中八仙以外、又是れ一故事たり、又、宋元以後畫家の傳ふる所に七賢過關の圖あり、前人の考證紛紛一ならずして終に定說なし、或者は太白・襄陽を以て並に畫中の人物とせるが故に、今之を下に漉錄し、好事家の一粲に資す、舊と唐人出游の圖あり、その六人は卽ち宋之問・王維・李白・高適・史白・岑參なりと謂ふ、第七人の何人たるを知らず、或は云ふ是れ潘逍遙なり、然れども未だ據を見ず、是れ樓鑰が攻媿集に記する所にして、所謂七賢圖の始めて記載に見ゆるものなり。玉堂漫筆に云ふ、世に七賢過關圖を傳ふ、或は以て竹林の七賢なりとす、屢〻人ありその畫を持し來りて題跋を求むるも、漫にして據りどころなく、その畫を觀るに、衣冠騎從は當に是れ晉・魏間の人物なるべく、意態は將に地を避けんとするものゝ如し、或は謂ふ是れ論語の作者七人（微子）の像にして之を畫に點綴せしのみと、姜南賓舍人は曰はく、是れ開元の間、多雪の後、張說・張九齡・李白・李華・王維・鄭虔・孟浩然が藍田關を出で龍門寺に游べるものにして鄭虔卽ち之を畫がきしなり、虛伯生、孟浩然の像に題する詩に「風雪高堂破帽溫。七人圖裏一人存。」とあり、又、槎溪張輅が詩に「二李清狂狎二張。吟鞭遙指孟襄陽。鄭虔筆底春風滿。摩詰圖中詩興長。」と見ゆ、是れ必ず傳ふる所あるならん云云。

又、李西涯が七賢過關圖の跋に云はく、この圖を論ずるもの多し、會稽の劉孟熙が霏雪錄に載する所、差詳かなり、蓋し黄山谷嘗てこれに題して曰はく、眉山の老書生この圖を作る、人物各〻意態あり、又、想ふに七子なるものはみな詩人なり、この筆乃ち邱壑の意を少く、以て趙雲子の苗裔と爲す、摹擬漸く密にして、放浪閒達は則ち逮ばずと、山谷の言此に止まる、七子の誰某たるを指明せず、元の貫文貞公伯啓が集に詩あり曰ふ、「清談飄逸事陵遲。七子高風世所師。公室傾危無底柱。服牛乘馬欲何之。」と、意は晉代清談の流を指すとす、何に據るを知らず。霏雪錄又稱す、虛邵庵に孟浩然が像に題する詩あり、曰はく「風雪高堂破帽溫。七人圖裏一人存。」と、又稱す國初の唐愚士詩あり曰はく、「七騎從容出帝閽。蹇驢聰馬禁山寧。灞洲學士參差出。十八人中一半人。」則ち是れみな以て唐人なりとす、予、程雪樓が集を觀るに、詩あり曰はく、「長庚自是謫仙人。子美逢時稷契臣。風雪茫茫五君子。醉吟猶得繼清塵。」又、嘗て倪文毅が稱するを聞くに、その父文僖公嘗て舊圖を見たるに、人ごとに各〻標目あり、王維史白なるものあり、悉く記する能はずと、崔世興近ごろ錢舜舉が白描の卷を得たり、その自題に云ふ、「七賢相顧度關時。正是天寒雪又飛。大抵功名俱有分。跨鞍何事不知歸。」卷後に李進の長句あり云ふ、「開元天寶全盛時。閭閻巷陌皆能詩。」又曰はく「承平何事有行役。況復衝寒欲何適。無乃漁洋兵亂後。奔走天涯共爲客。」又曰はく「宋公七言變風雅。崔・李・王・岑各相亞。誰言行輩不同時。雪裏芭蕉古曾畫。」又、淮鹽の李孟蕊が題

句に云ふ、「摩詰也知偏善畫。謫仙應是最能詩。」又三山の秦懋が題辭に、「輞川圖繪異興畫。太白文章攜李詩。海鹽の李季衡が句に「謫仙・之問詩無敵。輞川繪事尤難匹。高・岑・崔・史總奇才。豈少佳章紀行役。」大抵以て唐人とせり、今この圖、摹寫天下に徧うして、而して牛驢贏馬、氈裘大帽、關山風雪の狀みなほぼ相似たり、蓋し必ず本づく所の者ありて、鑒賞考索の家竟にその本末を得る能はざるは何ぞや。

楊升庵も亦謂ふ、七賢過關の事、書傳に經見せず、而して畫家乃ち徧く好事の家に傳ふ、その姓名を究むるに未だその誰れたるを的知せず、先師李文正公(卽ち李西涯)嘗て之を辨ぜり、近ごろ洪武中高得暘が錢舜舉の圖に題する古風を見るに、云はく、「尙疑高李六君子。當時未見潘逍遙。道同氣合志相感。雖曠百世如同僚。畫史貌出有深意。況自昔日傳今朝。屋梁落月見顏色。妙氣不待窮摹描。」又熊直が題詩に、「七賢之名奚所微。七賢去國身何輕。歲晚征途天雨雪。數騎聯翻行欲歇。不如瀟陵橋上翁。破帽吟詩自清絶。惜哉命不偶。奔走半道周。人生遇坎軻。窮苦奚足尤。左遷與投散。逝者良悠悠。他人未足說。所惜柳與劉。天涯相聚一回首。往事于人亦何有。莫念元都舊種桃。且往愚溪賸栽柳。風流畫史眞絶倫。毫端默染太精神。」此れに據れば則ち高適・李白・孟浩然は劉禹錫・柳宗元と同時ならず、潘逍遙は卽ち宋の人、又その後に在り、合して之を圖す謬甚だし、亦深く辨ずるに足らざるなり、博雅の士、その畫を賞せば卽ち可なり、必ず

姓名を添合せば、亦鑿ならず乎。

顧ふに劉・柳の同時ならざるは論なく、宋之問を加ふるものも、亦太だ之を前に失す、故に若し同時を以て論ずれば、玉堂漫筆に錄する所の二張・二李に加ふるに王・孟・鄭の三家を以てするもの尤も信ずべきが如し、然れども開元の時は李白未だ嘗て長安に至らず、天寶改元の後とせば、張說・孟浩然は俱に已に卒したり、安んぞ馬を並べて藍田關を出づるの事あるを得ん、故に王琢崖は謂ふ、畫手の平生墓好する所の人物に就いて之を寫す、必ずしもその事を實せずと、此れ頗る卓論と稱すべきなり。

陪族叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至游洞庭湖

洞庭西望楚江分。　水盡南天不見雲。
日落長沙秋色遠。　不知何處弔湘君。

この詩本選取る所の賈至が「白雲明月弔湘娥」（初至巴陵與李十二白同泛洞湖）と同時の作、至にこの語あるに由つての故に、特に「不知何處」を以て之を翻用す、彌望寥遠にして、窮極する所なく、この蒼茫に對して、胸に交集する所のもの、正に復た一片家國身世の感、緒に觸れて紛來し、人をしてその端を掇ること能はざらしむ。敖器之は謂ふ、綴景宏濶にして湖山を呑吐するの氣あり、落句感慨の情深しと、乾隆も亦以爲らく、即目傷懷して情を含むこと限りなし、二十八字、九辨の哀に減ぜず、解する者之を形迹の間に求む、何を以

てかその神韻を會せん哉と、蓋し太白已に夜郎に謫せられ、乾元二年を以て巴陵・洞庭の間に至る、是より先き賈至は至德中中書舍人を以て岳州司馬に貶せられ、正に洞庭に在り、而して李曄も亦乾元二年の四月を以て嶺州に謫す、三遷客恰も楚天浩淼の地に相會して、以て一夕の歡を永うす、宜なりその懷京戀主の思惻然として以て中に動くものあるや。落日長沙は、即ち是れ楚江分れて水天盡くるの處、昔日賈生（誼）亦嘗て此に謫す、三人なるもの偶〻その況遇を同じうす、則ちその西望の眼中、寧ろ臨風幾點の湘淚なからんや、而して堯の二女、舜を蒼梧に望み、亦實に此地に沒す。是れ楚騷哀怨の託する所にして靈均（屈原）が佗傺彷徨、尤も千古放臣逐客の腸を斷盡す、就いて之を弔せんとすれば、汴瀧雲なくして秋色自ら遠し、遂に復た何處なるを知らず、所謂「九疑聯綿皆相似」なり。詩に愁恨一字を着せずして、讀む者は只無量の愁恨、天地に彌滿するを覺ゆ、能く咀嚼して此に到らば、庶幾くは所謂神韻を會し得たるものと云ふべき歟。この篇既に賈至が句に對して落想す、則ち長沙の秋色、多く意を同姓に取るものあるべし、然れども、本意は三人みな同情を長沙に表す、若し注して獨り至を指すと云はゞ則ち又非なり。

蕭士贇本篇を解して曰はく、この時賈至・岳州の司馬に貶せられ、太白と均しく是れ逐臣なり、邂逅して洞庭の游を爲しこの詩を作る、亦屈原が宗國を睠顧して心を懷王に繫くるの意なる乎と、その李曄も亦逐臣たるを言はざるは、疎漏に近しと雖も、本意に於ては仍ほ大謬なし、而して乃ち云ふ、時に玄宗西京に在り、故に「西望」と曰ふ「楚江分」とは秦楚の隔てあるなり、「水盡南天不見雲」は猶ほ晉の明帝が目を擧げて日を見るも長安を見ざるの義の如く、南天隔遠にして西吾君を望めども得て見るべからざるを謂ふなり、末二句は蓋し舜の葬るとき、二妃從ふことを得ず、湘君の事に即いて、重ねて明皇の王后楊妃が事に感あり、

故に「不知何處」と曰ふ、興を寄すること深遠にして、愛君憂國の意に非ざるは無く、而して全く迹を着せず、國風の體を得たり云云。是に至つて毎句に穿鑿を加へ楊貴妃を以て湘君に牽合す、尤も附會笑ふべきものとす。唐仲言が解に曰はく「洞庭西望」は京師を懐ふなり、「楚江分」は山川之を間するなり、是の如くんば、安くの所にかその衷悃を布かん、故に湘君を弔して之を慰へんと欲す、然れども水光天に接して、秋色際なく、之を弔するに從ふべきなし、恨を飲むに終らんのみ、湘君の舜に從ふを得ざるは逐臣に類するあり、故に之を弔せんことを思ふなり。舊註、湘君を楊妃に擬し、明皇の從つて弔すべきなきを謂ふものとす、此れ青蓮と何んぞ關せん、信に是れ癡人の說夢なりと。その蕭解を破るは頗る可なり、只毎句に就いて詮解せるは、仍ほ乾隆が所謂之を形迹の間に求むるものにして、湘君を弔してその衷悃を慰へんと云ふに至つては、未だ是れ五十歩を以て百歩を笑ふを免れず。鍾伯敬は謂ふ、末句は正に秋色の遠きを形容するのみ、誤認して湘君の事と作す勿れと、此れ殊に詩の神致を剔出す、その見蕭、唐二家の上に在り、然れども作者の本意、若しその語言の外に於て、全く湘君の事に關照する所なしと云はゞ、此れ亦太だ之を淺視したるなり、詩を讀むの難き則ち只この毫釐に存す。

太白が本題原と是れ五首。本篇は卽ちその第一首にして、五首中の最も特傑と稱するもの、餘の四首は亦以て本篇の解疏と爲して讀むべし。

其二　南湖秋水夜無煙。耐可乘流直上天。且就洞庭賒月色。將船買酒白雲邊。

其三　洛陽才子謫湘川。元禮(李膺)同舟月下仙。記得長安還欲笑。

其四　洞庭湖西秋月輝。瀟湘江北早鴻飛。醉客滿船歌白苧。不知何處是西天。

其五　帝子瀟湘去不還。空餘秋草洞庭間。淡掃明湖開玉鏡。丹青畫出是君山。

大抵是れ第一首の餘緒を承けて來り、「不知」の字を疊して三たび意を杳然無際に致す、之を合唱して第一首始めて盡さゞるの意なきなり、第三首の一二、便ち是れ本題の正文、洛陽才子を以て賈至を切にし李郭仝舟を以て李曄に兼ね及ぶ周到の筆なり、「且就洞庭賒月色」此れ措語頗る奇、太白興到の筆墨往往これあり、「白髮三千丈」の如きも亦その類なり。楊昇庵本篇を評して言ふ、前句に「不見」と云ひ、後句に「不知」と云ふ、之を讀んでその複を覺えず、この二「不」字は決して易ふべからず、大抵盛唐の大家正宗、詩を作る、その流暢を取る後人の拘拘たるに似ざるなりと(昇庵詩話卷七)、是れ固より辨を須たざるの言、然れども大義に於て初め關する所なし、因つて此に附記す。

李曄は唐の宗室淮安忠公李琇が子、太白に於ては大父行たり、故に族叔を以て之を尊稱す、舊唐書に據るに、乾元二年鳳翔七馬坊の押官某盜を爲して平人を劫掠す、天興の令謝夷甫擒へて之を殺す、その妻屢〻狀を具して寃を訴ふ、時に曄は刑部侍郎たるを以て、御史中丞崔伯陽・大理卿權獻等と俱に、詔を奉じてその獄を審するに、終に某を直なりとせず、その妻訴して已まず、侍御史毛若虛なるもの、曄等が刑獄を質定する能はざるを劾奏す。是に由つて讜を得て嶺南の尉に貶せらる、その太白と楚地に邂逅するは、詩に依りて之

を測るに、當に是れこの年秋天の事なるべし。太白又、嘗に陪して洞庭に游ぶ醉後の作あり、云はく、「今日竹林宴。我家賢侍郎。三杯容小阮(咸)。醉後發清狂。」(一)「船上齊橈樂。湖心泛月歸。白鷗閒不去。爭拂酒筵飛。」(二)「剡却君山好。平鋪湘水流。巴陵無限酒。醉殺洞庭秋」(三)その相得たるの深きを見るべし。顧ふに二人並に遷謫の途次を以て、楚地に淹留し、湖山に放浪して、詩酒の狂興を縱にす、その拘せざる此の如し、從つて唐時法度の極めて寛なるを知るべきなり。

賈至は大明宮早朝の詩を以て一時の儕輩を壓倒したる事、已に七律の條下に具す、傳に稱す、その事を以て巴陵に謫せられ、李白と相逢ひ日に盃酒に酣し、京華の舊游を追憶して多く酬唱を見ると。今、太白が集中に就いて之を檢するに、本篇にして外、その縱跡仍ほ歷歷徵すべきものあり、白の巴陵に賈舍人を贈るの詩に云はく、「賈生西望憶京華。湘浦南遷莫怨嗟。聖主恩深漢文帝。憐君終不遣到長沙。」用意深婉にして、その潦倒を憐み、その鬱抑を慰む、想ふに是れ初めて相見るときの作、又、賈舍人と龍興等に於て梧桐枝を剪落し潯湖を望むの詩、「剪落青梧枝。潯湖坐可窺。雨洗秋山淨。林光澹碧滋。水閒明鏡淨。雲繞畫屏移。千古風流事。名賢共此時。」潯湖も亦是れ岳州の名勝、張說が所謂「雲間東嶺千重出。樹裏南湖一片明。」とある(二十八頁「湖山寺」參觀)もの即ち是れにして、そのこれに游ぶ、料るに亦洞庭の游と前後相去る太だ遠からざる時に在るべし、既にして太白將に夜郎に赴かんとするや、五言古風二篇を留めて以て別情を志す。

大梁白雲起。飄颻來南州。
鰲抃山海傾。四溟揚洪流。
鳳苦道路難。翔翔還崑邱。
遠客謝主人。明珠難暗投。
長嘯萬里風。掃清胸中憂。

(最後の句は劉琨「贈別盧諶」詩の「誰念百鍊剛、化爲繞指柔」なる句に本づく)

秋風吹胡霜。凋此簷下芳。
謬攀青瑣賢。延我於北堂。
勸此一杯酒。豈惟道路長。
何必兒女仁。相看淚成行。

「鰲抃」「鳳苦」の一喩覺えず天寶禍亂の由に念到す、二人なるもの今日の遷官失處せる、亦未だ曾て此に基せずんばあらず、その晉哀婉にして騷人の遺意あり、この數語を參酌して、愈〻以て「水盡南天」「長沙秋色」の慨を喩すべきなり、而して賈・李の傾倒、亦實に泛常の交誼に非ざるを見る矣。

裴徊蒼梧野。十見羅浮秋。
意欲托孤鳳。從之摩天游。
不肯銜我去。哀鳴慙不留。
拂拭倚天劍。西登岳陽樓。
誰念劉越石。化爲繞指柔。

折芳怨歲晚。離別悽以傷。
君爲長沙客。我獨之夜郎。
割珠兩分贈。寸心貴不忘。

望天門山

天門中斷楚江開。碧水東流至北廻。

兩岸青山相對出。　孤帆一片日邊來。

東流の楚水、是に至つて北折し、青山相對して江を夾んで峙つ狀、天門の如きあり、此を過ぎて而して又、江流漸く開展す、故に遙かに一片の孤帆の日邊より來るを認め得たるなり。「兩岸青山相對出」卽ち是れ「中斷」の實景、「孤帆一片日邊來」正に「東流」「北廻」中に於ける「開」の一字を寫し出せるなり。詞調高華にして貴くに一氣を以てす、故に讀者往往その語脈相承くるの妙を覺えず、唐仲言、落句を以て太白が長安より楚に來りしの意を言ふものとす、是れ深く「日邊」の二字に拘泥す、尤も取るに足らず、胡元瑞云ふ、此れ及び「朝辭白帝」等の作、俱に自然を極め洵に神品に屬す、以て一代に擅場するに足ると（詩藪）、一語蓋しその超詣の處に於て神解を得たりと謂ふべきなり。

早發白帝城

朝辭白帝彩雲間。　千里江陵一日還。
兩岸猿聲啼不住。　輕舟已過萬重山。

王阮亭、滄溟・鳳洲二家が定むる所の唐絶の歷卷に於て、意頗る許可せず、以爲らく必ず歷卷を求むれば、卽ち王摩詰の「渭城朝雨」、李太白の「朝辭白帝」、王昌齡の「奉帝平明」、王之渙の「黃河遠上」それ庶

幾からん乎、唐の世を終るまで絶句亦四章の右に出でたるものなしと、蓋し滄溟・鳳洲は氣を主とし、漁洋は神を主とす、神と氣とはその差本と微眇の處に在りて惟〻燃犀の詩眼を具するもの始めて能く之を辨ず、所謂神行の極致を識らんと欲せば、請ふ先づ太白がこの詩を取りて洛誦すること百遍、然る後纔かに之を言ふことを許さん。

盛弘之が荊州記に、巫峽江水の迅きを狀して曰はく、朝に白帝を發して、暮に江陵に到る、その間一千二百里、乘奔御風と雖も疾を加へざるなりと、此れ則ち太白本篇の粉本、峽流已に急にして、建瓴して下る、順風揚帆、瞬息千里、妙は兩岸の猿啼、一聲未だ已まずして、この舟已に萬重の翠巘を飛過し去るに在り、故に乾隆は謂ふ、但〻眼前の景色を道ひ得て、便ち筆墨間亦神助あるかと疑ふ、三四色を設けて託起す、殊に中流に自在するを覺ゆと。沈歸愚も亦その三句を擊賞し、猿聲の一句を入れて文勢直ちに傷らず、畫家の布景設色、每に此處に於て意を用ふと曰へり。巫峽の沿岸、晴初霜且、林寒く霜肅たるに至る每に、常に高猿あり長嘯す、屬引凄異にして空谷響を傳へ哀轉久うして絶すと、此れ亦是れ水經注の文中の語、太白材料を此に取ると雖も、その運化の妙、殆ど以て風雨を驚かして鬼神を泣かしむべきなり。

杜少陵が詩にも亦「朝發白帝暮江陵。頃來目擊信有徵。」（最能行）の句あり、此れ偶〻弘之の文を用ひて、目擊を以て之を徵するのみ、而して楊昇庵の詩論、此を以て李・杜優劣の判るゝ所なりとし、古人に李・杜優劣すべからざるの說あるは亦太だ憒憒なりと謂ふ、胡元瑞因つて糾正を加へて曰はく、古の大家名を齊しうし德を合する者あり、當に虛心易氣して各〻長ずる所を擧ぐべし、一隅に偏重せば便ち篤論に非ず、況や甲の獨り工なる所を以て、乙の經意せざる所を形せば、何ぞ寸木・岑樓・鈞金・輿羽（孟子告子

上參照)に異ならんや、「朝辭白帝」の詩の如きは、乃ち太白が絶中の絶なるもの、而して楊用修(愼)、杜の歌行中の常語を擧げて以て之に當つ、然れば則ち秋興八首は之を李集に求めて盡く得べき乎、李・杜の二家、本と優劣なし、但、工部は體裁明密にして、法の尋ぬべきあり、靑蓮は興會標擧して學んで至る可きに非ずと(詩藪)、見る所頗る公なり。

秋下荆門

霜落荆門江樹空。　布帆無恙挂秋風。
此行不爲鱸魚膾。　自愛名山入剡中。

張季鷹(翰)秋風の起るを見て蓴羹・鱸膾に感じ、千里駕を命じて便ち歸る、傳へて知機の明と爲すと雖も、未だ故らに達觀を作し、苦に哺啜を貪るの嫌あるを免れず、我が布帆を秋風に挂けて以て荆門霜樹の間に行くもの、豈に此を以て自ら高うせん耶、自ら名山を愛するが爲に剡中に入るのみ、所謂興に乘じて來る卽ち是れなり。超絶警絶、太白が嘯襟、眞に季鷹に高きこと數等。

會稽集道經に「兩火一刀可以逃」の語あり、兩火一刀は蓋し剡の字、剡中に名山多し、漢晉以來隱逸の士多く此に棲託す、太白がこの句兼ねて暗に子猷訪戴の意を用ふ、前人一も之を道破するものなきは何ぞや。乾隆の評語、輕秀にして古を運して化に入る、絶妙の好辭なりと云へるも、亦只季鷹が一典を

翻却したる處に就いてのみ鈎索を加へたるものゝ如し。

蘇臺覽古

舊苑荒臺楊柳新。　菱歌清唱不勝春。
只今惟有西江月。　曾照吳王宮裏人。

閶闔夫差が二世、姑蘇臺上の豪華、轉瞬夢の如く麋鹿游んで後、亦幾百年、苑は舊く臺は荒れたり、而して楊柳の色は萬古猶ほ新たなるがごとし、則ち今日聽く所の采菱の清歌、亦安んぞ昔水嬉の遺音に非ざるを知らん、柳色の新たなる菱歌の清き、恰も正に是れ「春」にして、而してその地は終に是れ舊苑荒臺なり、故に「不勝」と云ふ、覽古の一派辛酸の淚、正に此處より灑ぎ得て出でたり。抑〻今日より之を見れば苑中の春色、固より佳ならざるに非ず、然れども要するに亦是れ吳宮の舊物に非ず、獨り西江一片の月、この月曾て吳王宮裏の人を照らし、曾て蘇臺昔日の春色を見る、人甚だ有情にして興亡定まりなく、月本と無心にして盈虧換ることなし、則ち世の紛華麗靡、知らず亦能く幾時をか保せんや。此れ覽古のもの千人、萬人の胸中、みな言はんと欲する所にして、一たび太白が道破を經て、再び言ふべきなきものなり。末二句、偶〻衞萬が古風と同じ、合觀するに彼此各〻一段の神理あり、俱に踏襲の痕跡を看出す能はず、豈に漫りに臆議を滋すべけんや、故に並存して以て疑案とす。

越中覽古

越王句踐破吳歸。
宮女如花滿春殿。
義士還家盡錦衣。
只今惟有鷓鴣飛。

嘗膽臥薪、無限の苦楚を歷盡して、始めて吳を沼にすることを得たり、句踐の忍や此の如し。然り而して、義士みな錦衣なり、而して滿殿の宮女、艷色花の如きなり、夫れ錦衣如花は固より吳國をして亡滅に至らしめたる所以のもの、句踐たるもの偶〻之を嘗膽臥薪の時に忍んで之を志滿意盈の後に忍ぶこと能はず、幾もなくして越も亦亡び、只今惟〻鷓鴣の飛ぶあるのみ、循環の理、周にして復た始、今にして之を想ふ、則ち夫の舊苑荒臺一片西江の月を贏ち得たるものとその差果して幾何ぞや。義士一に戰士に作る、吳舒鳧謂ふ、越人安んぞ義士と稱するを得ん、當に戰士に作るを正と爲すべしと、未だ孰れか是なるを知らずと雖も、吳說も亦一理あるに似たり。

この詩前三句その盛時を極寫して末一句忽ち跌落し、その今日の荒廢を狀す、用筆の委曲周折せる、是れ人々の知る所、乾隆は則ち云ふ、蘇臺の覽古は、通首その蕭索を言うて、末一語その盛に兜轉し、この首は盛時より說起して、末句轉じて荒涼に入る、此れ立格の異なりと。前詩の用語偶〻本篇と相反對して、而してその擅勝の處、卽ち同一の句法に歸せるは、この外未だ曾て看破し得て到るものあらず、又、兩首俱に「只今惟有」の語を用ひて隱隱相映合せるに至つては、作者微意の在る所、就いて以て窺ふべし、箋釋のもの則ち多く之を疎慢に付す、殊にその故を喩するに苦しむなり。

與史郎中欽聽黃鶴樓中吹笛

一爲遷客去長沙。
西望長安不見家。
黃鶴樓中吹玉笛。
江城五月落梅花。

前二句は是れ史郎中と相見る時の情、後二句は是れ吹笛を聽く時の景、我れに夜郎の謫ありて、史も亦是れ西長安を望んで家を見ざるもの、笛に落梅の曲ありて、恰も卽ち五月落梅の時候、この景この情、齊しく是れ悽切の至、拈して二十八字を成す、聲淚の俱に下るを覺えざるものあり。黃鶴樓の事は詳かに七律の部に注す、武昌志に據れば、昔日眞に此樓に依つて以て笛を吹くの一仙人あり、則ち第三句は是れ題義を實點すと雖も、亦暗に此事に關照する所あるなり。

落梅花本と是れ曲名、今江城五月の時たるを以て之を活用す、點化の能事を極むと謂ふべし。吳曾が能改齋漫錄に云はく、樂府雜錄に載す、笛は羌樂なり、古曲に落梅花・折楊柳あり、之を吹けば則ち梅落つるとの義には非ず、故に陳賀徹の長笛の詩に、「柳折邊城樹。梅舒嶺外林。」張正見が柳の詩、「不分梅花落。還同橫笛吹。」李嶠が笛の詩「逐吹梅花落。含春柳色驚。」

等の如き、意は笛に梅柳の二曲ありと謂へるのみ。然るに後世みな笛を吹けば則ち梅花落つとす、戎昱が聞笛の詩「平時獨惆悵。飛盡一庭梅。」崔櫓が梅の詩「初開已入雕梁畫。未落先愁玉笛吹。」青瑣集の詩「憑仗高樓莫吹笛。大家留取倚欄看。」みなその失を悟らざるなり。惟、杜子美・王之渙・李太白は則ち然らず、杜云ふ、「故園楊柳今搖落。何得愁中却盡生。」(吹笛)王云ふ、「羌笛何須怨楊柳。春光不渡玉門關。」(涼州詞)。李云ふ「黃鶴樓中吹玉笛。江城五月落梅花。」此れみな笛にこの二曲あるを謂へりと。この說に據れば、梅花・楊柳を活用したるものは、卽ち詩人の失にして、而して李が本管實は、只〻笛曲を云ふのみ、梅花の落つるを云ふに非ずとせるもの〻如し、その見洵に僻謬に屬す。苕溪漁隱叢話(卷五)に云はく、詩人笛中に落梅花の曲あるに由つて、故に笛を吹けば則ち梅落つと言ふ、その理甚だ通ず、用事殊に未だ失とせず、且つ角聲に大小梅花の曲あるが如きも初め落つとは言はず、詩人尙ほ猶ほ此の如くに之を用ふ、秦少游が黃法曹の梅花に和して、「月落參橫靈角哀。暗香消盡令人老。」と云ふが如き是れなり、古今の詩詞笛を吹いて則ち梅落つと云ふもの甚だ衆し、若し以て失なりとせば、則ち落梅花の曲、何爲れぞ笛中に獨り之あるや、決して虛設に非ざるなり云云と。是れ吳曾が謬を駁せんと欲するが爲に、則ち又必ずその事を實せんと欲す、更に穿鑿笑ふべしとす、宋人の詩話、迂誕の甚だしき、往往此に類するものあり、乾隆謂ふ、論者紛紛として梅の落つると落ちざるとを爭ふ、豈に痴人の前に夢を說くを得ざるに非ずやと、一語眞に葛藤を斬絕するに堪へたり。

春夜洛城聞笛

誰家玉笛暗飛聲。
散入春風滿洛城。
此夜曲中聞折柳。
何人不起故園情。

惟、その聲を聞いてその人を見ず、故に「暗」と云ひ、兼ねて以て之を聞くの正に夜たるを點す、次句乃ち接して得て渺遠、肅手をして之を作らしめば、この句則ち必ず說いて愁恨に入る、斷じて搖曳の妙、許の如く高渾なる能はざるなり。三句仍ほ曲名を實點し、意を折柳に寓すと雖も、之を明言せず、落して結句に至り、始めて鄕思に堪へざるを鈎醒す、「何人不起」と云ふものは、洛城の中、その聲の達する所、往くとして然らざる無し、獨り斷腸の我のみに非ざるを見る、第二句の脈理此に至つて栩栩として靈動せり、豈に神妙自然の筆に非ずや。乾隆以爲らく、此れ杜が吹笛の七律と同意、但〻彼れの結句は白が黃鶴吹笛の絕句と齊しく出すに變化を以てし、用事の迹を見ず、この詩は之に反し、並に翻新せずして深情自ら見ゆ、亦異曲にして同工なりと、此れ亦以て宋人が紛紜聚訟の說を一掃するに足るなり。

毛稚黃(先舒)云ふ、七言絕は起に矜勢をなすことを忌む、李太白は多く直抒して旨鬯す、兩言の後は只溢思を用ひて波掉を作し、唱歎して餘響あり、抽手は往々起法を安排し、佳思を留めて後に在りて好を作さんと欲す、知らず、首既に嚼蠟ならば、後の十四字中も、亦地窄くして舞抽に、意滿ちて詞滯するを免れずと、

斯れ眞に能く箇中の消息を解し得たる者、今人の古に及ばざる正に所謂起法を安排して佳思を留めて後に在らんことを要するに坐す、絶句を學ばんとするものは諸を紳に書して可なり。稚黄、又前人曾て、俠客行を賦し、初め云ふ、「笑上胡姬賣酒樓。賭場贏得錦貂裘。酒酣更欲呼鷹去。擲下黄金不掉頭。」後ち結語に餘音なしと謂ひ、改めて「天寒飲罷酒家樓。擲下黄金不掉頭。走馬西山射猛虎。晩來風雪滿貂裘」に作りしの事を援きてその前說を證す(詩話)、此れ亦好箇一例と稱するに足るなり。

春宮曲

王昌齡

昨夜風開露井桃。　未央前殿月輪高。
平陽歌舞新承寵。　簾外春寒賜錦袍。

漢魏六朝の樂府、宮掖の瑣事を述べて以て諷詠に資するもの、その源自ら遠し、徐(陵)・庾(信)に至つて香艷清新、婉媚是れ貴ぶ、是に於てか宮體の目あり、然れども是れ猶ほ梁の簡文帝が愛尚する所なるを以て、盛んに當時の宮庭に傳唱せられたるが故に名づけられたるものにして、その詩境は獨り宮庭間に專なるものには非ず、唐興つて應制の體、一時の風氣を開き、文人學士、鴻麗黼藻、以てその才華を掞す、則ち初唐に在つては、この體猶ほ甚だ世に重んぜられざりしなり。李青蓮が詔を金鑾に待つに至つて、清平の調、行樂の詞、これを樂府に播して、譽を當代に馳す、是れ應制の末響と雖も、實に宮詞の先聲たり、王龍標に及んで

でその體始めて成り、錦袍の豪翰を以てして猶ほ且つその勝を爭ふこと能はず、獨り龍標の擅絶を讓る、後來王建・花蕊夫人等が宮詞、宮闈の祕聞を綴りて以て一朝の掌故に備ふるもの、氣味稍〻別なりと雖も、亦實馥の沾溉を龍標に乞はざる能はず。元の楊鐵崖以爲らく、宮詞は詩家の大香奩なりと、大香奩の字甚だ新穎なり、余は則ち龍標を目して、直ちに大香奩の祖なりと謂はんと欲す、未だ知らず允なるや否やゝ高廷禮は謂ふ、七言絶句は太白諸人よりも高く、王少伯之に次ぐと。王弇州(世貞)は謂ふ、五七言絶句、李青蓮・王龍標最も擅場と稱す、有唐の絶唱たり。又謂ふ、七言絶句は王少伯、太白と勝を毫厘に爭ふ、俱に是れ神品なりと。李維楨曰はく、絶句の源は樂府より出で風人の致あるを貴ぶ。その聲歌ふべく、その衣は有意・無意の間、人をして捉着すべき無からしむるに在り、盛唐には惟、青蓮・龍標の二家なり。焦弱侯(竑)曰はく、龍標・隴西は眞に七絶の當家、聯璧と稱するに足る。楊升庵(愼)曰はく、唐人の詩、樂府は本と古體に效うて意反つて近く、絶句は本と自ら近體にして意實に遠し、風雅の彷彿を求めんと欲せば絶句に如くは無し、唐人の偏長獨至する所にして後人の力追するも嗣ぐなきものなり、擅長には則ち王江寧(昌齡)、驂乘には則ち李彰明、偏美には則ち劉中山、遺響には則ち杜樊川云云。盧世漼も亦謂ふ、天、太白・少伯を生じて以て絶句の席を主どらしむ。宋漫堂も亦謂ふ、三唐の七絶、並に不朽に堪ふ、太白・龍標は絶倫逸群なり。古今の評家、龍標に於て衆口一致、殆ど異辭なきもの此の如し、而して胡元瑞には則ち又王の宮辭樂府は李も爲す能はざるの說あり、公論と稱すべし。少伯とは卽ち昌齡の字、江寧と云ふものはその嘗て江寧の令たりしが故なり。

この詩唐仲言解して云ふ、失寵の者、得寵の者を欣羨するの詞たりと、詩の妙は固より空靈にして神を象外に傳へ、言詮に落ちざるに在りと雖も已に之を解せんと欲せば、勢ひ意を以て之を逆へざる能はず、唐の

言や自ら好し、冒するに「昨夜」の二字を以てす、則ち通篇は是れ昨夜見る所聞く所の光景、此に由つて而して一夜眠ることなく、展轉反側して、以て天明に到る、懐に耿耿たるものは只〻君恩の冷熱如何に在り、爾許の神理、亦唯〻この二字より勾攝し出さる。露井は井上に屋なきを謂ふ、古樂府辭に云ふ、「桃生露井上。李樹生桃旁」（漢、相和曲、雞鳴）と、語蓋しこれに本づく、露井の桃花は、風を邀へて夭艷、自ら當に恩露に沾ふことを得べし、然れども亦その側に一樹の李花あるを忘るべからざるに似たり、何ぞこれ偏に寂寞にして彼れ獨り迎恩沾寵せる此の如きや、見るべし龍標の本意、語に古辭の上半を用ふと雖も、兼ねてその下半邊の義を影取せることを。又、既に露井と云ふ、幾分の賤意の在るあり、その出身を料るに、初め平陽の歌舞に出でざるは、第三句を待たずして既に知るべきものあり、且つ桃花正に開く、即ち前殿月高しと雖も、果して然かく春寒なる耶非耶。先づ起一句を咀嚼してこの深婉の處に到る、始めて與にこの詩を語るべきなり。

首句逆筆を以て春寒を反挑し、二句正筆を以て春寒を逗出す、蓋し月高く夜深し、正に是れ春寒の時候たるが故なり。未央既に漢宮の名を借る、故に平陽歌舞、亦漢宮の故事を用ふ、漢の武帝、平陽公主の第に幸し、謳者衞子夫の歌舞を善くするを見て、載せ回りて立てて后とす、是を衞皇后とす、又、李夫人は本と娼を以て進む、その兄延年、歌舞を善くせり、平陽公主、延年に女弟あるを言ふ、武帝乃ち之を召見するに、實に妙麗にして善く舞ふ、是に由つて幸を得たり、二者俱に平陽歌舞の事、必ずしもその一を泥指せず、以て新進にして寵を得たるものに喩ふるのみ。此の如きの歌舞、露井桃開く、而かも簾外春寒の故を以て更に錦袍の寵賜を辱うす、豈に格外の恩典に非ずや、嗚呼是れみな昨夜親見、親聞の事なり、彼の君に得たるもの一に此に到る、何ぞ自ら顧みて惻然たらざるを得ん。

沈歸愚謂ふ、王龍標が絶句、深情幽怨、音旨微茫、「昨夜風開露井桃」の一章、只〻他人の寵を承くるを說きて、而かも己の失寵、悠然として思ふべし、此れ響を絃指の外に求むるなりと。妙旨此に盡く、多言を須ひず、太白が靜夜思・玉階怨、五言を以て此と爭衡す、餘子碌碌眞に道ふに足らざるなり。

西宮春怨

西宮夜靜百花香。
斜抱雲和深見月。
欲捲珠簾春恨長。
朧朧樹色隱昭陽。

夜靜かに花香し、その景極めて佳、而して人は西宮に在り、その恨正に長し、故に珠簾を捲いて一たび月中の景致を賞せんと欲するも、猶ほ之を爲すに懶きなり。一二題意已に完し、故に三四は則ちこの美人の怨意を不言の中に解釋す。是に於て雲和の瑤瑟を抱き、簾中よりして明月を望む、則ち只〻朧朧たる樹色の昭陽宮殿に隱然たるを見るのみ。昭陽の宮人寵幸方に渥く、君王の鴛を彼所に抑留して西宮に到ること無からしむるは、一に樹色の明月を隱翳して我れをして輙く之を見る能はざらしむるに同じ、それ復た何ぞ怨まざるを得んや。斜に雲和を抱くは無限の情緒、善くこの女の怨態を繪がき出せり。

雲和は周禮大司樂の文に「孤竹之管、雲和之琴瑟」とあり、本と山の名にして、その地に良木を產す、用ひて瑟となすに、聲極めて清亮なりと鄭玄の注に見ゆ。西宮は即ち長信宮、班婕妤の退いて箕帚

を奉ぜんことを願ひしの地、昭陽は越飛燕の居る所、飛燕は卽ち所謂涼風、炎熱を奪ひしもの、詩の義を取る以て喩るべきなり。唐仲言三句を解して、中庭に出でゝ月を見るものとす、僧大典が簾中より見るなりと云ふの勝れるに如かず、仲言又云ふ、簾既に捲かず瑟旁らより出づ、故に斜と云ひ宮殿陰沉として月視易からず故に深と云ふ、此れ古人が用字の苟もせざる處を見ると、力めて善く守眼を鈞醒す、轉た取るべきものなきに非ず。

元微之が雜憶の詩、「今年寒食月無光。夜色纔侵已上床。憶得雙文通內裏。玉欄深處暗聞香。」「寒輕夜浸透迴廊。不辨花叢暗辨香。憶得雙文臘月下。小樓前後捉迷藏。」彼れは嬉游行樂を寫す、絶えて怨意を帶ばずと雖も、その景光は則ち約略相類す、蓋し亦王が本篇に胎息したるものなり。

西宮秋怨

芙蓉不及美人粧。
水殿風來珠翠香。
却恨含情掩秋扇。
空懸明月待君王。

芙蓉の花豔なるも美人晩粧の豔なるに及ばず、則ち水殿風來りて、芙蓉香を吹くも、亦なんぞ美人が珠翠綺羅の香に如かんや、他なし、是れ有情無情の別なり。然れども有情なるものは必ず怨あり、乃ちこの美人情思を含んで徒らに秋扇を掩ひ、明月を懸けて空しく君王を待つ、容華此の如きも、只虛名を擔す、その怨

恨將た如何にぞや、此に由つて之を觀れば、却つて芙蓉の無情にして能く鮮妍たるに及ばず、有情未だ必ずしも無情に勝らざるなり。本篇芙蓉を以て起興して西宮の秋怨を寫す、本旨全く此の如し、從前解する者多く第二句を以て專ら芙蓉に貼す、紛紛費解、殊に取るに足らず。

秋扇は固より班姬が事、而して「懸明月」も亦班姬が長信の賦中「懸明月以自照」の語を用ひたり。扇の團團たる本と明月の義あり、此を以て自ら掩ひ、自ら照らす、則ちこの美人の容光心跡、亦含蓄して箇中に在り、措詞の愈〻婉にして愈〻味はふべきを知るべし。曹子建が洛神賦に「載金翠之首飾、綴明珠以耀軀」とあり、本篇起句已に「美人粧」を點明す、則ち「珠翠香」はその粧飾の香澤あるを指すものなること復た疑ふべきなし。

唐仲言は潘岳西征の賦に據りて珠翠を以て帳殿の飾とし、香を以て芙蓉の花香とし、謂はず芙蓉は美人の比に非ざるも、乃ちその香珠翠に達することを得たり、我れの貌は明月と等しきも、乃ち君に進御することを得ずと。大典も亦云ふ、芙蓉は風を以ての故にその香能く達す、我れは則ち瞼ほ團扇の秋風に弃てらるゝが如きなりと、その比義を解する異同あるを免れざるも、第二句の語脈を拗折してこれを芙蓉に曲貼せしめたるは則ち一なり、並に之を求むる深きに失したるものとす。

長信秋詞

眞成薄命久尋思。
夢見君王覺後疑。

火照西宮知夜飲。　分明複道奉恩時。

亦復た展轉反側・寤寐思服の意を寫し出す、眞に國風の遺音、春宮曲と相似て、彼れは他人より影出し、此れは自己より託出す、格局自然に同じからず、その全幅精神の赴く所は則ち一の「疑」字に在り、讀んで三四に到りて識者をして亦迷離惝恍たらしむ、此れ即ち「疑」字の神理たればなり。

長信の廢宮に居り、君王の輦路を絶す、容華は誰が爲ぞ、光陰は虛擲す、此の如くなるときは、則ち我れ豈に眞成に薄命なる耶、之を思うて已まず、積んで而して夢を爲す、忽然として火は西宮を照らせり、知んぬ、是れ天子將に夜飲せんとするの候、忽然として我れ複道に出て、鴛を迎ふ、君王一笑、眷幸舊の如し、奉恩一回、美滿幽香、離れ難く捨て難きに到つて俄然として覺む、歷歷分明にして景光眼に在り、殿庭の燎火我が西宮を照らすもの固より猶ほ依然たり、是れ果して夢か夢に非ざる耶。此れをして夢に非ざらしめば我れを眞成に薄命なりと言ふことを得ず、若し其れ夢なり、何ぞ複道奉恩の分明なる一に[illegible]の如きや、この女の胸中千回萬轉、愈〻疑うて愈〻解すべからず、その心緒を察すれば悲惋鬱結、只〻涕泗の湧泉の如くなるを見る、詩は全く性情の正より出づ、怨に深きものと謂ふべし。

龍標この題本と三首、その一に云ふ

金井梧桐秋葉黃。　珠簾不捲夜來霜。　熏籠玉枕無顏色。
臥聽南宮清漏長。

而してその二は尤も人口に膾炙す、所謂

奉帚平明金殿開。　且將團扇暫徘徊。　玉顏不及寒鴉色。
猶帶昭陽日影來。

是れなり。王漁洋此を以て唐人絶唱の一に置く、決して阿好に非ず、于鱗の選故らに之を削除したるは、豈に團扇・昭陽等の字面の亦上の西宮春怨・秋怨の諸作に見えたるを以て、これを重複として迴避したるに因る耶、果して然らば選實に字句の瑣末を以て古今異辭なきの名篇佳唱を沒却したるの責を免るゝ能はず。

青樓曲

白馬金鞍從武皇。　旌旗十萬宿長楊。
樓頭少婦鳴箏坐。　遙見飛塵入建章。

青樓曲は自ら是れ樂府題、この詩青樓の少婦が箏を鳴らして樓に倚り、遙かにその情人の馬を馳せて天子の游幸に從ふを望むの狀を寫す。裏面には則ちこの貴盛の少年と偕老の契あるを榮とするの意あり、亦此を以て同輩に誇耀するの意あり、大抵羅敷が「東方千餘騎。夫婿居上頭」の一解より融會し出し、既に唐代游俠の風俗を見、兼て當時青樓女子が意氣を見るべし。唐仲言云ふ、玄宗の行事、大約漢武と相類す、凡そ唐人の詩、武皇と曰ふものはみな玄宗を借稱すと、蓋し王母を以て楊娘を稱すると同一の通例に屬せり。首に白馬金鞍を點じ、結句に「飛塵入建章」と云ふ、呼吸相應じ筆姿躍如たり。昨は天子に從つ

て長楊苑に宿衛す、此に由つて青樓少婦が盼望翹待の情に入る、一氣に呵成すと雖も、事に次第あり、命意の極めて細なるを味はふべし。

龍標この題亦猶ほ一篇あり、

馳道楊花滿御溝。　紅粧漫綰上青樓。
夫壻朝回初拜侯。　金章紫綬千餘騎。

言ふは已に扈從して建章に入り、天子の賞賜を辱うして封侯の榮爵を拜し、是に於て始めてその私宅に回るなり。前詩と干連して又互に相發明す、大典本、特に取つて之を連載す、極めて見ありと謂ふべし。唐仲言は前詩を以て娼樂の盛を刺れるものとす。詩中初めこの義なくして、臆を以て附會す、此れは是れ今古箋注家の通弊、唯〻此種美刺の說、殊に人の肺腑に入り易し、故に變ぜざるを得ず。

閨怨

閨中少婦不知愁。　春日凝粧上翠樓。
忽見陌頭楊柳色。　悔教夫婿覓封侯。

十七八の好女郎、初めて嫁して乍ち離る、猶ほ春愁の何物たるを知らず、憨憨焉たり嬉嬉然たり、粧を凝らして樓に上る、夫婿が榮顯を願ふの外肯へて復た他事なきものゝ如し。忽然として陌頭の柳色を見る、この柳卽ち折つて以て別れに贈りし所のもの、青青尙ほ新にして人は則ち見えず、功名の望猶ほ遙かに、離索の情頓に動く、情動いて悔來り、悔來りて愁ひ生ず、是に於て曩の憨憨焉・嬉嬉然たるもの、忽ち化して淚眼啼眉・慵粧蓬髮の一怨婦と爲る、寧ろ甚だ憐むべからずや。「不知愁」の三字反筆を以て提起し少女が極痴の情態より入りて、漸く離別の傷を悵觸す、その悲、初めより愁を知れるものに比して、人を感動する更に一倍を加ふ、是れ落想の超妙なり。

鍾記室は云はく、春風春鳥、秋月秋蟬、夏雲暑雨、冬月祈寒、斯れ四候の諸を詩に感ずるものなり、嘉會には詩に寄せて以て親しみ、離群には詩に託して以て怨む、楚臣の境を去り、漢妾の官を辭するに至つては、或は骨、胡野に橫たはり、或は魂、飛蓬を逐ふ、或は負戈の外戎、殺氣の雄邊、塞客衣單に、孀閨淚盡く、凡そ斯の種種、心靈を感蕩す、陳詩に非ざれば何を以てかその義を展べん、長歌に非ざれば何を以てかその情を騁せんと。彼れ蓋し興觀羣怨第一義を說く、而して少伯が本篇の如き、亦實に所謂心靈を感蕩してこれを歌詠に形するもの、宜しくその最上の一品に位すべきなり、唐汝詢、本篇を贊しては蟲鳴に觀はんことを思ふ、南國の正音、萱草心を痗ましむるは東遷の變調、閨中の作はそれ近體の二南なる歟と云ふ、亦この意なり。

出塞行

白草原頭望京師。　黃河水流無盡時。
秋天曠野行人絕。　馬首東來知是誰。

少伯邊塞の調、亦彼の宮掖閨幃の體と並びに千古に卓越す、出すに七絶を以てして猶ほ李の古風・杜の律體と衡行し、その斤量肯へて少しも讓る所なきは洵に彼が奇句俊格の耳を驚かし目を駭かすものあるに坐せずんばあらず、詩家天子の稱ある、一時の標榜と雖も固よりその當なしとせざるなり。沙漠の地、草を生せず、故に「白草原頭」と云ふ、唯、この四字、邊庭荒寂の景象已に繪がき到らざる所なし。首を回らして京師を望む、黄河の流水、渺綿として極りなし。此の如きの曠野、況や秋天寥落の時に逢ふ、絶えて行人なきは固よりその所、而かも馬首東來して、行き邁くこと靡靡たるものあり、知りぬ是れ誰ぞや、蓋し孑然たる一箇の我なるのみ。前程遼遠、四望蕭條、この時の胸中、茫茫として交集するもの、百端何ぞ限らん、乃ち一辭を着けず凄涼として獨絶す、神品たる所以此に在り。

末句の解、唐氏は云ふ、馬首して東する者は誰ぞや、大都みな狄産なりと、索然として味なし、大典は云ふ、或は是れ京師の人ならんと、唐に比して稍〻深し、然れども此を以て反語と爲して、自己の外復た行人なきを言ふとせるの婉曲なるに如かず、この解寔に我が先君子（森魯直、號は春濤）に出づ、今謹んで遺教に遵ふ。

從軍行

烽火城西百尺樓。
更吹羌笛關山月。
黄昏獨坐海風秋。
無那金閨萬里愁。

邊塞の調は悲壯を主とす、悲にして壯ならずんば軍中の樂を成さず、壯にして悲ならずんば、征人の情を慰むることなし、故に古來の作者、力をこの兩者の調和に致さざるは無くして、唐賢至つて多くその成功を見る、少伯の如きはその尤なる者なり。以下選する所の從軍行三篇、克く壯克く悲、呑吐の際兩つながら絶頂に達し、一緩響なく、一懈辭なし、烏んぞ推して擅絶と爲さざるを得んや。

戍樓百尺、黄昏獨坐して以て烽火を望む、胡敵未だ摧けず、兵の警を解かざる知るべし、時に於て海風肅殺秋聲人に逼る、感懐已に堪ふべからず、況や羌笛凄清、正に關月を奏す、何人か復た金閨萬里の愁に想ひ及ぼさざる者があるや、既に室家を思はゞ、則ち兵士たるものは只〻一刻も早く烽火を滅絶するを以て心とせざるべからず、此れを以て心とせば、臨陣赴敵、何の破るべからざるかこれ有らん。此れその情を諒してその志を激す、悲調を以て壯意を行ふものなり、切に專ら沮心喪氣の語を爲すものと做す勿れ。下詩亦この意を申明す。

金閨は本と兩義あり、此を以て朝廷を指稱せるものとするは正解に屬すと雖も、本篇の義に非ず。湯惠休が詩に「金閨流耀。玉牖含英。」（楚明妃曲）の語あり、牖を以て閨に對す、彼れは卽ち閨房室家の義たり、則ちこの字面獨り承明金馬の庭を指稱するに限らざるを證すべきなり。

二

青海長雲暗雪山。
孤城遥望玉門關。

黄沙百戰穿金甲。
不破樓蘭終不還。

青海は西羌の地、哥舒翰が神威軍を築きしの處、雪山は祈連山を曰ふ、即ち所謂天山、冬夏雪を見る、故に亦雪山と稱す。青海雪山、長雲暗澹、是れ胡敵が出沒の所在、懸軍萬里、孤城遙かに玉關を後方に望む、身は正に遠く關外に在るなり。風沙を冒して苦戰し、着する所の金甲も亦已に穿破すと雖も、前敵陰霾の光景未だ消散せざる限り、即ち樓蘭未だ破れざる限りは、生きて玉關に入ることを望むべからず、還期の遽焉たるは悲しむべからざるに非ず、則ち悲しむべしと雖も亦力めざるべからざるなり。前人この詩を解す、亦多く悲意の一邊にのみ粘說す、然れども風人の本意、何ぞ兵氣をして自ら挫敗せしむるに在らん、故に余は必ず悲壯の調、兩意相生して、始めて神に入れるものと爲すなり。

三

秦時明月漢時關。
萬里長征人未還。
但使龍城飛將在。
不教胡馬度陰山。

李太白が戰城南「秦家築城備胡處。漢家還有烽火燃。」此れ即ち本篇首句の注脚に充つべし、明月の關に臨む、秦漢一轍に出づ、乃ち今日の唐家亦實に之れに同じ、征人の出づる萬里還らず、戰伐の休まざる、誠に强胡の伏し難きに由る、此れ亦秦漢以來殷鑑昭然たるものなり。この時に當りて但し飛將軍その人の如きを得て、以て龍城の塞邊に臨み、胡敵を彈壓せしめば、其れ復た胡馬の駸駸南牧して陰山を渡るを恐れんや、蓋し深く慨を當時の人なきに寄せ、兼ねて又そのこれあらんことを切望す、調高響亮にして壯采四射す、その妙殆ど以て名づくることなきなり。龍城は匈奴の地、漢の武帝元光五年、車騎將軍衞青匈奴を擊ち、上谷を出でゝ龍城に到り、首を斬ること數百、此れ即ち漢書の記する所、李廣この地に到るは則ち未だ經見せず、夫れ衞青にして猶ほ且つ此の如し、飛將軍をして在らしめば、即ち更に如何ぞや、作者が屬望の意此に在り、註する者或は謂ふ、二事を合して一事と爲すは杜撰なりと、此れ未だ詩意を詳審する能はざるものなり。李滄溟已にこの詩を定めて壓卷とす、王元美云ふ、余始め滄溟の道ふ所を信ぜず、少伯の集中には更に極めて工妙なるものありと思へり、既にして之を思ふに、若し意解に落せば當に取る所あるべし、若し有意・無意解すべく解すべからざるの間を以て之を求むれば、この詩乃ち第一たるを免れざるのみと。所謂、有意無意不解の間とは、專ら首句を指して謂ふものに似たり、然れどもこの句實に何の解し難き處あるを見ず、故に我れは鳳洲に與みする能はざるなり。曰はく「漢朝陵墓對南山。胡虜千秋尚入關。」曰はく「多少材官守涇渭。將軍且莫破愁顏。」曰はく「蜀公本意築三城。擬絕天驕拔漢旌。」曰はく「獨使至尊憂社稷。諸君何以答昇平。」是れ杜少陵が「諸將」の詩、彼れは事後に成る、故にその言痛切なる此の如く、此れは開元盛時の作、故にその言極めて渾含蘊包す、その命意に於ては則ち一なるのみ、明眼の人自ら能く之を知る。

梁苑

梁園秋竹古時煙。　城外風悲欲暮天。
萬乘旌旗何處在。　平臺賓客有誰憐。

梁苑は漢時、梁孝王が園囿、その東苑に修竹林あり、即ちこの詩詠ずる所の處、孝王は竇太后が愛子たるの故を以て、特に天子の旌旗を賜ひ、出入萬騎、東西に馳獵す、所謂萬乘旌旗なり、その東苑を治するや、複道を爲り、宮邸よりして平臺に連屬せしめ、是に於て大いに四方の豪傑を招延し、山東の游說の士麗致せざる所なし、司馬相如・枚乘の徒亦その數に在り、平臺賓客と謂ふもの即ち是れ。

詩は目前の寂寞に因つて昔日の繁華を追想し、因つて以て憑弔の感に入る、その「古時」と云ひ「風悲」と云ひ、「何處在」「有誰憐」と云ふ、每句傷感の意を離れずして、懷古の情を寫す、極めて曲折す、以て字法を悟るべし。特に「平臺賓客」を以て結と爲すものは、自己が才を抱いて偃蹇、未だ知己の提拔を蒙らざるに一影して觸悵更に深し、此れ言外の意なり。

芙蓉樓送辛漸

寒雨連江夜入吳。　平明送客楚山孤。
洛陽親友如相問。　一片冰心在玉壺。

連江の連に雙の義あり、凄寒の夜雨を冒して以て吳に入る、蓋し辛と共に並載して此に來れるなり、平明にして辛が洛陽に歸るを送る、連江の寒雨は霽るゝと雖も、楚山は乃ち此より孤なり、孑然たる一身復た與に慰藉すべきなし、這般無量の情緒、却つて之を景中に帶叙し、連孤の二字を以て纔かにその端を見はす、神來工妙の句と謂はざるべけんや。鮑參軍が詩に云ふ「清如玉壺冰」（代白頭吟）と、此れ結語の本づく所、倘し親友の我が行藏を問ふあらば、心は冰壺の如く日に清虛に就く、復た宦情の牽繫する所と爲らずと答へよと、此れその正意、而かも玉壺の二字、適〻復た寫情中に於て目前雨霽れ、山綠に、江水澄澈して鏡の如くなるの景を隱見す、恰も上半の景中の情を寫すものと相反映して好文字を成す、是れ即ち一篇の結構なり、宜しく細細に咀玩を爲すべし。

李太白眉州の象耳山を過ぎ、石壁の上に留題して曰く、

夜來月下臥。　醒花影零亂。　滿人襟袖。　疑如濯魄於冰壺也。

と、蓋し亦鮑が詩語に本づく、文は簡なりと雖も、雋韻別趣、人の心脾を爽にす、王少伯がこの詩と並に千春に輝映するに足る、太白の少伯に於ける約略同時、未だその孰れが先なるやを知らず、若し李が濯魄冰壺の四字を移して以て王がこの篇を品藻せば、更に確切にして易へ難きを見るなり。

送薛大赴安陸

津頭雲雨暗湘山。　遷客離憂楚地顏。
遙送扁舟安陸郡。　天邊何處穆陵關。

起句興を目前の景に取る、ほぼ前詩と相似たり、而して此れは雲雨暗澹の景を以て憂顏の霽れ難きを況す、離思を語に形するもの更に一層を加へたり。「遷客離憂楚地顏」一見するときは頗脚稍〻短窘なるが如き感あり、然れども此れ實に離騷に出て暗に屈原が顏色憔悴の意を用ふ、則ち語に出處ありて泛設に同じからず、未だ遠かに揣識を加ふべからざるなり。遷客は王自ら謂ふ、楚地と云ふものは王當時江寧の令たり、是れ古の楚地にして、自己又正に失意の時に在るが故に、屈靈均（原）を以て自ら擬したるのみ。唐仲言が解に云ふ、雲雨晦冥の際に當つて君に楚中の行あり、故に我れその往く所の地を念うて憂ひ色に見はる云云と、此れ楚地を解して薛大が將に赴かんとするの地を指すものとせるなり、大いに謬る。安陸は唐の安州にして、地今の安南に近し、穆陵關は卽ち安陸郡界に在り、因つて言ふ、今、扁舟の遠く安陸に赴くを送り、天際遙かにその郡界の地を求めんと欲するも、絕えて覩るべからず、悵望の情愈〻深しとなり。三四みな實際の語、少しも修飾する所なくして、神思逸焉として自ら遠し、是れ又實に今の塗澤家に望む能はざる者。

近世漁洋の絕句、獨り唐賢の三昧を得たり、その家兄子側が歸里を送り、同舟して淮陰に至るの作（帶經堂集卷十一）に云はく、

前程畏說近淮陰。　無那風帆去不禁。　今夜柁樓聞玉笛。

清淮眞與淚痕深。

情景縹緲として我れも亦愁へんと欲す、何ぞ多く寒雨連江の二句に遜せん、若しその第五首、

曾携雙屐問三山。　潑墨江樓落照間。　拂袖却愁東路遠。
蟬聲孤驛穆陵關。

則ち明らかに本篇に本づく、而して蟬聲孤驛、景中の愁思、更に回首に堪へざるものあり、詩を學ぶものはこの點化の理を知らざるべからず。

送別魏三

醉別江樓橘柚香。　江風引雨入船涼。
憶君遙在湘山月。　愁聽清猿夢裏長。

滿江の風雨、橘柚正に香し、是れ九秋の候、時に於て江樓に醉別して客已に船に上る、之を抑留せんと欲するも再び一刻を遲くし得ず、この時の情景只黯然なるのみ。此れよりして後我れ獨り湘山明月の下に在りて、愁へて清猿の哀音夢裏に長きを聽く、この相憶の情料るに堪ふべからざるものあらん、爾時君も亦正に何を以て懷を爲すことを知らずと言ふなり。第三句「憶君」の二字に於てほぼ頓住し「遙在」以下十二字、一氣に連續すべし、僧大典云はく、魏三の湘邊に在りと解するものは非なりと、この說從ふべきなり。

盧溪別人

武陵溪口駐扁舟。
行到荆門上三峽。
溪水隨君向北流。
莫將孤月對猿愁。

此れ少伯龍標に貶せられし後の作る所、酈道元が水經注に據れば、武陵に五溪あり、悉く是れ蠻夷の居る所、今の辰州の界に在りと、所謂盧溪は則ち五溪の一、太白に「楊花落盡子規啼。聞說龍標過五溪」（三百九十）の句あり、亦以て互參すべきなり。五溪の水は沅に入りて湘に合し、北洞庭に向ふ、今武陵の溪口に故人の扁舟を駐めんと欲するも、溪水北流して君に隨うて去る、肯へて少時も休まざるものゝ如し。故人の駐むる能はざるを明言せずして轉た怨を流水に寄す、情思極めて深し。夫れ五溪は蠻夷の地なり、君の此を去りて北に歸るは固よりその欲する所なるべし、然れども北歸の行程、必ず荆門に出で三峽の地を經過せざるべからず、既に三峽を經、又必ず彼の猿啼三聲人腸を絶つものを聽かざるべからず、この時に於て獨り明月に對して愁ふると、蠻夷の地に在りて長く我と伴を爲すと、その孰れか優れるは未だ遽かに判別し能はざるものあり、故に曰はく「莫將孤月對猿愁」と、言外意を已れの歸る能はざるに致して、卻つて人に向つて留まるに如かざるの言を成す、最も婉にして味多し。「孤月」「猿愁」字法更に妙。

重別李評事

莫道秋江離別難。
吳姬緩舞留君飲。
舟船明日是長安。
隨意青楓白露寒。

以上三首俱に是れ別離の言、而してその出語みな同じからず。この篇更に索生の語を爲す、翻案に善きものと謂ふべし。離別は難きに非ず、門外は便ち天涯なるのみ、聊か吳姬の緩舞を借つて以て今夕を永うす、亦以て情を忘れ性を悅ばすに足る、秋紅楓落ち白露の衣を沾すが如きは、且つ又他に由る、知んぬ悲むと雖も益なき也。隨意は卽ち「任他」の意、起に秋江を實點す、是れ結句の根、一「緩」字依戀の情を曲盡す、率然命筆したるが如くしてその實文心の細此の如し。

少年行

王維

出身仕漢羽林郎。
初隨驃騎戰漁陽。
孰知不向邊庭苦。
縱死猶聞俠骨香。

唐時邊庭の事復た言ふに忍びず、山の如きの白骨沙場に横臥してその姓氏聞くことなく、只〻上將の功を冒して濫賞せらるるあるのみ、故に發して詩人の詞と爲るもの、概ねみな憤惋を此に致さざるなし。麼詰が少年行、輕俠少年の感臆を借つて亦この意を曲諷す、夫れ少年の性極めて勇往を喜ぶ、故にその初めて出身

して羽林郎と爲り、驃騎將軍の部伍に歸して、出て〻漁陽に戰ふや、自ら以爲らく功名は唾手して收むべしと、而かも邊廷の實際は大いに意料の事に出で、苦戰殊死の士にして乃ち湮沒無聞に終るもの屈指に暇あらず、是に至つて寧ろ翻然として自ら悔いざるものあらんや。三四は卽ちその悔時の語、言ふは少年の俠骨、たとひ市井閭巷の間に死すとも、猶ほその芳名を千歲に垂るゝに足る、豈に遙かに彼の邊廷に苦しんで無名の鬼と爲るに勝らずや、出身從軍の際、實に此に想ひ到らず、自ら伊の戚を貽す、悲しむべしとなり。

大典、末二句を解して只〻少年の材幹を稱するものとし、邊廷に向つて苦戰して、功を彰はすことを須たず、閭巷に徒死するも猶ほ俠骨の香を聞くことを得べしとの義とし、「縱死」を以て「橫死」の反語、卽ち身を全うして死するの謂なりとす、頗る新創にして人の耳目に入り易し、然れども「縱死」の義終に牽强に屬す、故に從ふこと能はず。唐汝詢云ふ、廢詰豈に果して游俠を進めて、忠義を退くる耶、李太白の詩に「儒生不及游俠人。白首下帷復何益。」(行行且遊獵篇)とあり、この義を以て相參せば、羽林の少年憤激の意自ら見るべしと、此れ大いに肯綮に中れり、漁陽の驃騎は明らかに安祿山を指斥す、この詩の作、想ふに亦天寶の中葉に在らん歟。

九月九日憶山東兄弟

獨在異鄕爲異客。　毎逢佳節倍思親。
遙知兄弟登高處。　遍挿茱萸少一人。

落筆は蓋し王伯安(勃)が蜀中九日の作に本づく、我が至親を思ふに由つて、至親も亦我を念へるを知る、至情中より流露す、絕えて尋常光景に留連するものと同じからず。相傳ふ、廢詰これを作る時、年甫めて十七、詞義の美なる陟岵瞻望の篇(詩周南)と雖も以て加ふることなしと、惟〻この性情卽ちこの格調を成す、詩豈に別に所謂格調なるものあらん耶。傳に云はく、王維少うして孝友を以て聞ゆと、惟〻この二十八字、亦以てその虛ならざるを證すべきなり。

與盧員外象過崔處士興宗林亭

綠樹重陰蓋四隣。　青苔日厚自無塵。
科頭箕踞長松下。　白眼看他世上人。

通篇處士が散誕簡傲の處に向つて神を傳ふ、綠樹の相掩へる、青苔の日に厚き、這般の林亭、知んぬ一些の修治を加へたるものにあらず、天然の幽邃迥かに塵境に遠ざかる、正に好し、この散誕簡傲の處士を住せしむるに足るなり。結二句全く是れ晉人高逸の淸風北窗の高臥、自ら羲皇上の人と稱するに覩れば、稍〻狂傲を加ふ、阮籍の靑白眼を用ひて恰も正にその事に切なり。我れこの詩を評するとき、恰も盛暑に際す、興宗林亭の勝なしと雖も、一樹の芭蕉鬱蒼陰を成す、蟬聲四方に沸いて涼風颯然、時に於て解衣盤礴して以て遙かに門前の綈幟子の熱に觸れて彳亍たるを目送す、當に多く他の科頭箕踞の樂に讓らざるべきなり。沈德潛そ

の說詩晬語に於て、詩の當時に盛稱せられて品反つて貴からざるものあるを論じ、この詩を引いてその一例とし、斥して粗派なりと謂ふ、若し詩品を以て言へば、或はその譏を免れず、先君子（森魯直。號は華禪）亦謂ふ、白眼にして他を看るは白眼せずして他を看るの高きに孰與れぞと、蓋しその故らに高傲なるを見はさんと欲して反つて許多の做作の態あるを惟しむなり。言各〻その當あり、斷として一端を以て之を速斷すべからざるや是の如し。

送韋評事

欲逐將軍取右賢。　沙場走馬向居延。
遙知漢使蕭關外。　愁見孤城落日邊。

韋は想ふに評事の官を以て朔方節使の幕中に赴くもの、故に云ふ「欲逐將軍取右賢。」と、右賢は匈奴の王の名稱なり、躍馬して往く、誓つて勳を塞外に樹てんと欲す、その意氣や頗る壯と謂ふべし、然れども蕭關にして外沙磧茫茫、遙かに居延の孤城を落日隱隱の際に望む、この時に當つて寧ろ悲み中より來るものなからん乎。已に之を鼓舞し、又之を慰藉す、公事・私情兼ね臻らざることなし、是を絕好贈別の言と曰ふ。

送沈子福之江東

楊柳渡頭行客稀。　罟師盪槳向臨圻。
唯有相思似春色。　江南江北送君歸。

行客已に稀、從つて船の渡るべきなし、故に漁舟を僦して以て行くなり。江南江北、春色遍ねからざるの鄉なし、君と相別る、我が相思も亦隨はざるの地なし、凡そ春色ある處、卽ち以て我が相思の在る處なるを知るべし。三四措詞に工、君の適く所に從つて之れを送る、春色あらん限りは我が相思の盡きざるを見るなり。臨圻は猶曲岸の臨頭と云ふが如し、漁人客の將に渡らんとするを知り、乃ち槳を盪かして舟を岸邊に近づくるを謂ふなり、地名には非ず。起語「楊柳渡頭」の四字、實に三四の爲に設く、「春色」の意象已に箇中に在り、此れ又、針線の極めて工細なるもの。

廖詰の絕句を選して「凝碧池頭」と「西出陽關」の二首に及ばず、此れは是れ大可笑の事。顧ふに陽關三疊は尤も多く人口に膾炙せるもの、今玆に縷述を用ひず、只〻この詩、唐人歌つて以て別に餞す、その平仄、音律に關するもの尠少に非ず、又、三疊の歌法も諸說紛紛として初學或は滋惑するもの少からず、因つて聊か之を左に附辨す。

按ずるに陽關の曲、

渭城朝雨浥輕塵。　客舍青青柳色新。
西出陽關無故人。　勸君更盡一杯酒。

この詩の平仄の尤も音律に關する處は、第一句「渭城朝雨」の四字は必ず●○○●を用ふ、若し一般の詩律の如く、その第一字及び第三字を平すべく仄すべきものとし、即ち○○●●に作るが、若しくは●○●●等に作るときは斷として陽關の調に諧はず、第二句の「柳色新」の三字、柳の字は必ず上聲を用ふ。若し換ふるに他の仄聲を用ふれば則ち失律となるなり。第三句「勸君更盡一杯酒」は●○●●●○●にして一字の出入を容れず、而して「一杯」の一の字は必ず入聲、酒の字は必ず上聲たらんことを要す、第四句の○●○○○●○に至つても亦決して一字を淆亂すべからず、而して亦「西出」の出の字は必ず入聲を用ふべきなり。此の如くならざれば是を陽關の曲と謂ふことを得ず、證するに東坡の擬曲を以てす、須くその吻合の處に注意すべきなり。東坡の陽關曲凡そ三首、その一張繼愿に贈るに曰はく、

受降城下紫髯郎。　戲馬臺前古戰場。
恨君不取契丹首　金甲入牙旗歸故鄉。

その二、李公擇に贈るに曰はく、

濟南春好雪初晴。　行到龍堆馬足輕。
使君莫忘霄溪女　時作陽關斷腸聲。

その三、中秋月の詩に曰はく、

暮雲收盡溢清寒。　銀漢無聲轉玉盤。
此生此夜不長好　明月年年何處看。

その嚴肅にして一字を移動すべからざる此の如し、但し第二句の平仄第五字を除く外、稍〻尋常の絶句と

同例なるが如し、然れども近日の曲園老人(樾)は更に考訂を加へて謂ふ、塡詞家毎毎入聲を以て平聲と爲す、摩詰の原作「客舍」の客の字、或は宜しく讀んで平聲と爲すべし、然るときは東坡が「李公擇」「中秋月」の「行到」「銀漢」並に○●を用ひたるは此れ亦諧聲の理、此の如くならざるべからざるに出でたるものにして、寛例に從へるものにあらず。獨り「戲馬臺前」の句●●に作れるは疑ふべきに似たるも、戲の字に忻義・虚奇の二反切ありて、借りて平聲の讀を作すこと、一に「客舍」の客と同例なりと謂ふも害なしと、此れをして遵ふべくんば、則ち第二句の起字は亦必ず平聲、若しくは仄音にして平聲に諧叶するものを用ひざるべからざるなり。又、三疊の歌法は、第一句を除いて疊せず、客舍青青以下三句を毎句疊唱す、故に三疊と云ふ、白樂天の詩に「相逢且莫推辭醉。聽唱陽關第四聲」(酒醉)とありて、その下に自注あり云ふ、第四聲は「勸君更盡一盃酒」を謂ふなりと、是れ第一句より數へて第二句の疊唱を算入す、故にこの句即ち第四聲と爲るなり。元人の陽春白雪集に大石調を以て歌へる陽關三疊あり、此れは譜ありて句なき處に、無數の文字を塡入したれば、爲に毎句を間隔したるの觀ありと雖も、第一句を疊せずして「客舍」以下を疊唱するの例と爲して見るに足るものあり。その詞に云はく、

渭城朝雨一霎浥輕塵。　更遍客舍青青弄柔嫩千樓柳
色新。　更遍客舍青青千樓柳
杯酒。　人生會少自古富貴功名有定分　莫遣容儀瘦損。休
煩惱勸君更盡一杯酒。　只恐西出陽關舊游如夢眼前
無故人。　只恐西出陽關眼前無故人。(「陽春白雪」にはこの詞なし。明の田藝衡「詞品」(卷一)に見ゆ)

天寶の時、人あり奏樂の圖譜を得たり、その名を知らず、摩詰之を視て曰はく、此れ霓裳第三疊の第一指なりと、その人樂工を集めて之を按ずるに、果して摩詰の言の如くなりしと云ふ、その音律に精通する此の如し、宜なり陽關の一曲千古に讌誦して終に一人のこれと勝を爭ふものなきや。祿山の亂、李龜年江南に流落す、曾て湘中採訪使の筵上に於て一詩を唱ふ、云はく、

紅豆生南國。　秋來發幾枝。　贈君多採擷。　此物最相思。

此れ亦王摩詰の詩なり、その流傳の廣きを見るべし。集異記に云はく、摩詰未だ冠せざるとき、夙に文章の名を得たり、又、妙に琵琶を能くす、岐王之を賞識し、一日相伴うて九公主の第に到り摩詰をして扮して伶人とならしめ、主の前に進みて新曲を奏す、號して霓綸袍と曰ふ、九公主大いに之を奇とし、終に之を試官に薦めて登第を得しむと、士人にして伶工に扮するは、固より鄙しむべきの事、此れ恐らくは假傳ならん、然れども摩詰が如何に斯道の能事を極めたるやは此れ亦以て一端を窺ふに足るなり。

安祿山の長安を陷るゝや、朝臣多くその僞署を受く、摩詰も亦賊の得る所と爲る、藥を服して痢を取り、僞りて瘖病と稱す、祿山素とその才を憐み、之を菩提寺に拘して、逼るに僞署を以てす。時に祿山大いに凝碧池に醼す、席に侍するものは、みな當日梨園の弟子、欷歔して泣下るもの多し。樂工雷海青なるものあり、忽ち起つて手にする所の樂器を擲ち、西に向うて大いに慟す、祿山怒つて之を戲馬殿に縛し、支解して以て衆に示す、聞くもの傷痛せざるなし、摩詰、寺中に在つて之を聞き、悲しみ自ら勝へず、乃ち一詩を賦してその友裴廸に寄す、所謂、

萬戸傷心生野煙。　百官何日再朝天。　秋槐葉落空宮裏。　凝碧池頭奏管絃。

是れなり。肅宗の兩京を克復するに及んで、大いに祿山の僞署を受けたるものゝ罪を論じ、一時の朝臣盡く貶黜せらる、名士鄭廣文の如きも亦免れず、而して摩詰がこの詩早く行在に傳聞し、肅宗夙にその心事を諒す、是を以て獨り刑辟を免るゝことを得たり。この詩悽愴悲咽、卒讀に忍びず、肅宗此れを以て維を釋す、亦善く詩を知ると謂ふべし、その摩詰の出處に關する亦頗る大、此れを採つて以て知人論世に資す。卽ち豈に選家の責に非ずや、知らず滄溟果して何の語を以て之に對へんと欲するを。

春思二首　賈至

草色青青柳色黃。
桃花歷亂李花香。
東風不爲吹愁去。
春日偏能惹恨長。

愁人の眼中より看れば、花柳の妍を爭ひ、風日の交麗なるも、物として事として適〻以て傷心するに足るものならざるは無し。この詩能くこの意を傳出す。草柳の色を生じ、桃李の芬芳なるは、みな是れ春風の吹き得て然かるもの、而かもこの風乃ちために我が愁を吹き去ること能はず、是を以て遲遲たる春日、反つて偏へに恨を惹くの長きを覺ゆるなり。通首流麗にして宛轉、唐絶風調の美、この種に由つて入る、則ち正鵠を失はず。

唐仲言、此れを以て春に感じて放逐を傷むものなりとし、楚中謫居の時の作なりと云ふ、然れども後首を合して之を味はふに、乃ち是れ長安道上感傷する所ありて作るもの、初め遷謫を經るの義を見ざるに似たり、恐らくは下文選する所の諸作に考へて、漫に臆度を加へたるのみ。蕉中和尚云ふ、風吹き日長し、儘〻是れ春令、乃ち愁を吹かずして恨を惹く、春の我に於ける何んぞ其れ偏なるやと、頗る能く作者の心情を說破したり。

其二

紅粉當壚弱柳垂。　金花臘酒解酴醾。
笙歌日暮能留客。　醉殺長安輕薄兒。

前詩は自己の愁思の堪へざるを寫し、後詩は他人の嬉游の度なきを寫す、區區たる輕薄兒をして乃ち得意此の如きに至らしむるは、正に有才屈沈の士の益〻抑鬱無聊に困する所以にして、兩者本と相容れず、因つて相容れざるものを以て互に相形す、則ち兩詩は反つて是れ一意のみ。醉殺の字下し得て極めて冷、刺眼の至なり。

金花は酒色の鮮黃なるを形容す、蜀地に酴醾花多し、取つて以て酒を造る。唐の韋下記に、寒食、宰臣以下に酴醾酒を賜ふとあり、然れば則ち當時如何にこの酒の都人士に賞味せられしや知るべし、この酒釀成の

後、臘月に於て之を閉藏し、春月に至つて始めてその封を解く、故に「臘酒解酴醾」と謂ふなり。

西亭春望

日長風煖柳青青。　北雁歸飛入窅冥。
岳陽樓上聞吹笛。　能使春心滿洞庭。

此れは則ち賈舍人岳陽に貶謫せられし時の作、想ふに第一句「日長風煖柳青青」の句、上文春思の第一首と景象相似たるものあり、是を以て唐仲言終に彼を附會して以て放逐を傷むものと爲せしならん。春心は猶ほ春愁と云ふが如し、岳陽樓上の笛聲は能く春愁をして洞庭の煙水に浩淼彌漫たらしむと雖も、北雁の歸飛は獨り窅冥の中に入り去るのみ、我が羈客をして身に雙翼を生じ、相伴うて奮飛すること能はず、徘徊顧瞻して徒らに客懷を傷ましむ、況や笛聲の悽切にして再び聞くに堪へざるをや。一「滿」字尤も妙、回環の意義みなこの一字より相生ず。

初至巴陵與李十二白同泛洞庭湖

楓岸紛紛落葉多。　洞庭秋水晚來波。

乘興輕舟無近遠。　白雲明月弔湘娥。

洞庭の景色、之を眼前に取りて、反つて詞を楚騷に借るものは、逐臣託興の義を兼ねて、以て湘娥を逼出するに在り。幼鄰謫居の次、李太白と相見て洞庭同泛の事あるは詳かに太白が詩下に具す、その詩に云ふ「乘興輕舟無近遠。白雲明月弔湘娥」と、故に太白「日落長沙秋色遠。不知何處弔湘君」と云ふを以て之を翻し、自ら酬答の詞を爲せり、假りに蕭士贇が如きをして注釋を加へしめば、この詩の湘娥も亦楊貴妃を指すものなりとせんや否や、彼此相參せば、箋註家が穿鑿附會の陋、了然として見るべし、故に詩を解するものは必ず傍證を待つ。若し詩の品格の高下、則ち幼鄰がこの作自ら一籌を謫仙に輸す、是れ才分の自ら殊なるに坐すと雖も、亦興會の屬せざるに由る、是に於て乎神來の難を見るなり。

送李侍郎赴常州

雪晴雲散北風寒。　楚水吳山道路難。
今日送君須盡醉。　明朝相憶路漫漫。

雪霽れ風寒し、凄其として人に逼る、一醉に非ざれば以て禁持すべからず、況や將に別れんとするをや、此を去つて楚水吳山、千里相隔く、明朝に至つて、漫々たる行路、徒らに相憶を爲すとも將た何の益かある。

通首一氣にして、隔句に意を生ず、所謂語淺く情深きもの、按ずるに太白が「不知何處弔湘君」の詩、題して云はく、「族叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至に陪して洞庭湖に游ぶ」と、此れに據つて知る、本篇の李侍郎は即ち李曄その人なるを、李曄が事亦前に註す、參照すべし（二百九十九頁參照）。

洞庭同泛の客、幼鄰獨り岳陽に留まりて、而して曄は常州に向ひ、白は夜郎に行く、前に擧ぐる所の白が「大梁白雲起。飄飄來南州。」の二章（三百一頁參照）乃ちこの時の作、幼鄰亦絶句一章を賦して太白を送りて云ふ。

今日相逢落葉前。　洞庭秋水遠連天。
回看北斗欲潸然。　共說京華舊游處。

この三人みな失意の時に在つて偶然潯湘の浦に會し、各〻同情を以て互に相慰藉す、數詩を參酌して、當時の事猶ほ諸を目睹に齊しうす、反復諷詠するに及んで、爲にその隱衷を諒し、未だ曾て潸然として雪涕せずんばあらず。

岳陽樓重宴別王八員外貶長沙

江路東連千里潮。　青雲北望紫微遙。
莫道巴陵湖水濶。　長沙南畔更蕭條。

江水の東流、北闕の瞻望、長沙の南竄、相對して一種の章法を成す、命筆自ら佳なり。東流、海に連なるの江路は卽ち王八員外が溯りて以て長沙に向ふ所のもの、王と我とは同じく貶逐を蒙る、その心遙かに北闕の上に懸りて戀君憂國の忱は徑庭する所あるなし、而かも長沙の地は我が巴陵洞庭湖水の空濶なるに比して、更に遼遠蕭條の境に屬す、その傷心果して如何ぞや。是より先き、李白・賈至に贈るに「聖主恩深漢文帝。憐君終不遺到長沙」の句を以てす、蓋し深く至が爲に之を幸とす、至、因つて之を翻用し己れが爲に幸とせらるゝ所のものを以て、深く王が不幸を憐む、眞情實話、惻惻として人を動かす、此れ特に幼鄰の擅長を推すべし。按ずるに幼鄰の集中、別に巴陵に王八員外に別るゝの作あり。

柳絮飛時別洛陽。　梅花發後在三湘。
離恨空隨江水長。　世情已逐浮雲散。

先づこの詩を誦して、而して本篇を觀る、則ち本篇の題して「重宴別」と謂ふもの、言はずして解すべきなり。

封大夫破播仙凱歌二首

岑參

漢將受恩西破戎。　捷書先奏未央宮。
天子豫開麟閣待。　祇今誰數貳師功。

玄宗の天寶十載、高仙芝を以て安西四鎭の節度使と爲す、仙芝乃ち封常淸を署して判官と爲し、大いに吐蕃勃律王及びその屬二十餘國を破る、封大夫は常淸を謂ふ、播仙は吐蕃部落の城邑、岑嘉州時に從うて封が幕を佐す、眼に捷旗を望み、耳に鼓笳を聽いて、凱歌二章を賦す、宜なりその聲氣昂壯にして偉麗なるや。本章事に就いて直書し、封が能く天子麟閣の望に副ひ、破竹敵を勦し、赫赫の勳を奏すること、斷じて漢代貳師將軍輩の企及する所に非ざるを頌す、文義自ら明らかなり。貳師將軍は李廣利なり、大宛城を擊ち名馬を取りて還へる、漢武之を嘉し封じて海西侯とす、故に之を借用するのみ、唐汝詢が解、以爲らく、廣利は本と名將に非ざるも、今擧げて以て常淸を美するものは、征する所の地同じければなりと、未だ太だ鑿なるを免れず。

其二

日落轅門鼓角鳴。　千群面縛出蕃城。
洗兵魚海雲迎陣。　秣馬龍堆月照營。

前篇は實敍し、後篇は傳藻す、爾許の大功、この一番の鋪張ありて初めてその軍容を壯にするに足るを覺ゆ。千群面縛して轅門に投降す、是に於て乃ち班師して還る、魚海・龍堆並に西域の地名、兵甲を洗うて白雲陣を迎へ、馬匹を秣して明月營を照らす、軍中の景象此の如く壯麗、眞に風煙掃靖し四境靜謐に歸するの

觀あり。少陵の洗兵行に云はく「中興諸將收山東。捷書夜報淸晝同。河廣傳聞一葦過。胡危命在破竹中」論ずる者その雄渾闊大なるを稱す、岑がこの作、前篇の筆致、頗る亦相敵す、而して洗兵の一聯に至つては、抑揚頓宕、亦多く「三年笛裏關山月。萬國兵前草木風」の十四字に讓らず、少陵の好奇を以て岑を推し、深く期許する所あるが如きは宜なり。明人甚だこの種を喜んで、而かも徒らにその貌を襲ふ、今人則ち復た屋下に屋を架し、その輪郭を畫して自ら唐調を得たりとす、竝に群盲の模象に同じ、誠に一笑に値せざるなり。

苜蓿烽寄家人

苜蓿烽邊逢立春。
閨中只是空相憶。
葫蘆河上淚沾巾。
不見沙場愁殺人。

起句はその地とその時序とを點じ、次句は望中慘戚の光景、三四は卽ち家人に寄するの語、閨中の相憶固より征人の苦況を思はざるに非ず、然れども未だ沙場の人を愁殺する眞に此の如きものあるを見ず、藉し之を見しめば、當に更に懷を爲し難かるべしとなり。閨思より說いて向上の一路に到る、蓋し實踐の苦は、實に平生の能く逆料し到る所に非ざるを以てなり。西域の地塞上に驛亭を置かず、又山嶺なし、只〻烽火を以て標識とす、玉門關外に五烽あり、その一は卽ち所謂苜蓿烽、又、葫蘆河は上狹く下廣し、故にその形

狀を以て名づく、洄波甚だ急に、水深くして渡るべからず、上に玉門關を置く、西域の襟喉たればなり。この詩只〻言ふ「淚沾巾」「愁殺人」と、並に如何にか巾を沾し、如何にか愁殺せるやを言はず、此れ猶ほ閨中の想像し能はざると齊しく、言語の形容すべきに非ざるが故なり、詩の悽切にして人を動かす、反つてこの不言の處に在り。

玉關寄長安李主簿

東去長安萬里餘。
玉關西望腸堪斷。
故人那惜一行書。
況復明朝是歲除。

相去る萬里、恃む所のものは則ち一紙の書のみ、今や玉關西望すれば胡天寥廓、肝腸斷たんと欲す、又、歲の盡くるに遇ふ、洵に故人の書に非ずんば何を以てか自ら慰むことを得ん、通篇眺望の意寫し得て極めて凄楚。西望と言ふものは、玉關長安を去る已に萬里餘、身此に在りて更に西望す、則ち萬里の外更に淼茫として涯涘あることなし、猶ほ李義山が「劉郎已恨蓬山遠。更隔蓬山一萬重。」の意なり。三四、その中又這般の苦楚は長安に在るものゝ知る所に非ずとの意あり。

逢入京使

故園東望路漫漫。　雙袖龍鍾淚不乾。
馬上相逢無紙筆。　憑君傳語報平安。

卒然として作る必ずしも意を用ひず、只、情景を寫し得て眞なるのみ、乃ち以て鬼神を泣かすべし。龍鍾は埤雅に云ふ、行つて前まざるの貌と、然れども琴操卞和の歌に「空山獻欲淚龍鍾兮」（卷下信立）とあり、則ちこの語是れ涕泗横集の形容辭たるに似たり、紙筆の以て書を作す無く、傳語して以て音息を通ず、第二句を併せて之を觀る、その老淚嗚咽の聲を聞くが如く、人をして惻然として卷を掩はしむ。野參議が「わたの原八十島かけて漕ぎ出ぬと人には告げよあまの釣舟」この結句と同一の悒惶、彼れ蓋し岑がこの詩に取ることあるなり。

磧中作

走馬西來欲到天。　辭家見月兩回圓。
今夜不知何處宿。　平沙萬里絶人煙。

此れ上數詩とみな西域邊上の作、「平沙萬里絶人煙」は正に「玉關西望腸堪斷」の事實にして、即ち是れ

「沙場」第一「愁殺人」の所以、因つて以て第一句「欲到天」の三字を解釋す、王摩詰が五律「單車欲問邊」の一篇と並に廣漠無邊の氣象あり。月を見て家を思ひ、投宿するに所なし、この時この際何を以てか情を爲さん、曹子建が詩に云はく、「中野何蕭條。十里無人煙。」（雜詩）結句蓋しその詞を用ふ。

新舊唐書並に岑嘉州の傳を詳かにせず、辛文房その杜鴻漸の薦を以て安西の幕府に參する事を記し、又云ふ、鞍馬烽塵の間を往來し、征行離別の情を極め、城障塞堡經行せざることなしと、唐仲言は岑に輪臺の七古あるに依つて、その封常清が幕に參せしものなるを推定し、而してこの詩に於ては疑を闕きて、獨行して西域に到れるものに似たりと云ふ。按ずるに唐書に傳なしと雖も細かに岑が詩集を參酌すれば、その縱跡約略窺ふべきものあり、故に今之を下文北庭度隴の詩下に注す。

虢州後亭送李判官使赴晉絳得秋字

西原驛路掛城頭。　客散江亭雨未休。
君去試看汾水上。　白雲猶似漢時秋。

嘉州、暮春虢州の東亭に李司馬が扶風の別廬に歸るを送るの詩あり、已に七律の部に見ゆ、此れその地に同じ、而して又、磧西頭に李判官が入京を送るの五律一篇あり、云ふ。

一身從遠役。　萬里向安西。　漢月垂鄉淚。　胡沙費馬蹄。

尋河愁地盡。　過磧覺天低。　送子軍中飲。　家書醉裏題。

此れに據れば李判官は則ち岑と共に塞上に從役したるもの、本篇送る所のものと蓋し同一ならん。虢州は漢の弘農郡にして唐の河南道に屬す、想ふにこの詩の成るは兩人なるもの已に塞上の行を爲し、共に歸つて中原に在り、當時安西萬里の地胡沙漢月に向つて惜別の情緒に堪へざりしもの、安んぞ再び河南虢州の地に相逢うて、依依袂を分つに忍びざるものあるを知らんや、人生聚散萍水離合の奇、惟、此れ亦以て推見すべし。

晉・絳の二郡は並に戰國晉の地に屬す、唐に在つては河東道なり、河南よりして此に赴く、路、太原の汾河を經、故に三四漢武秋風の辭を用ひ、彼の樓船を浮べて棹歌を發せしもの今は一も存することなく、只〻白雲容容として漢時の舊に似たるあるのみと云ふ、義を「歡樂極分哀情多」に取るなり。唐仲言は李のこの行を逆料して、當に失意の事あるべしと云ふ、或は然らん、而して岑が當時の遭遇亦實に轗軻無聊の時たりしなり。

史に據るに、封常清の西征して吐蕃を破るは天寶十載にあり、當時岑はその幕に佐たること已に前述の如し、已にして祿山の亂起り、兩京邱墟と爲る、岑猶ほ塞外に行軍して「遙憐故園菊。應傍戰場開」の句あるを見ればその時猶ほ未だ中原に歸る能はざりしなり（二百二十頁參照）。肅宗の至德二載に及んで裴薦・杜甫等の薦奏を以て、擧用せられて右補闕と爲る（上卷百八十五頁參照）、是に於て大明宮早朝唱和の諸作あり、一時の盛と稱す（九十四頁參照）、然れば岑が塞外より歸るは天寶十四年（祿山叛逆の年なり）より至德二載に到る中間凡そ一年間に在るべし。その初めて西虢の官舍に到り、左右省及び南宮の諸故人に寄するに云ふ、

黜官自西披。　待罪臨下陽。　空積犬馬戀。　豈思鵷鷺行。
素多江湖意。　偶佐山水鄉。　滿院池月靜。　捲簾溪雨涼。
案牘荷花香。　一別盡相忘。　豈思鵷鷺行。　青苔生筆床。
數公不可見。　晚節悟行藏。　他日能相訪。　無情華省郎。
早年迷進退。　白鳥上衣桁。　敢恨青瑣客。　嵩南舊草堂。

軒窗竹翠濕。

未だ何の時たるを指定する能はざるも、補闕の官より一黜せられて、終に虢州に遷謫せられしものなるは明らけし。又、虢州郡齋南池の幽興因つて閣二侍御と別を道ふの篇に云はく、

池色淨天碧。　水涼雨凄凄。　荷葉翻向西。
性本愛魚鳥。　未能返巖谿。　逐令心賞暌。
及茲佐山郡。　不異尋幽棲。　訟庭侵藥畦。
胡塵暗河洛。　二陝震鼓鼙。　逸翮凌雲霓。
行車在函谷。　兩度聞鶯啼。　飲酒白日低。
聞君欲朝天。　駟馬臨道嘶。　忽如雲與泥。
夜眠驛樓月。　曉發關城雞。　鄉書對君題。

虢中に甄判官の贈らるゝに酬ゆるに云ふ、

微才棄散地。　白髮徒自嘆。　抽宦慙清時。
胡塵暗東洛。　分陝振鼓鼙。　亞相方出師。
夫子廊廟器。　闔外佐戎律。　迥然青冥姿。
前者驛使來。　豐吟庭花落。　忽枉行軍詩。

昔君隱蘇門。　浪跡不可覊。
別來春草長。　東望轉相思。

この二首ほぼ同時の作、その胡塵河洛の數語は、蓋し郭子儀等九節度の兵鄴城に潰えて後、洛陽再び胡騎の蹂躪に遭ひ、賊將史思明の巢窟と爲り、李光弼が邙山に敗るゝに及んで、河陽懷州の地、盡く賊中に陷る、此れ肅宗が上元二年の事、至德二載より上元二年に至る凡そ五年、然れば岑が補闕の官に在るは恐らくは未だ三年に滿たず、その號に左遷せらるゝは當に乾元の末、上元の初に在るべきなり。その號州西樓に題するの篇に至つては、

詔書自徵用。　令譽天下知。
寂寞山城暮。　空聞畫角悲。

錯料一生事。　蹉跎今白頭。
明主雖然棄。　丹心亦未休。

縱橫皆失計。　妻子亦堪羞。
愁來無去處。　祇上郡西樓。

と云ふ、是より先き、孟浩然、「不才明主棄」の一語、玄宗の忌諱に觸れ、落托を以て終る、岑も亦聞き及ばざるの理なし、而して今乃ち自らその語を用ひて憚る所なし、その肅宗に謁を得たるの所以、此に由つて約略推知するに足る、則ち此れを以て上來引く所の諸篇と較對すれば、岑が居號の日の何等の況遇なるは、必ず言を待たず、その李判官を送るに於て、偶嘸を秋風白雲に寄せ、得喪を達觀して一切を邀視し、富貴榮華を以て空花幻影に等しくしたるの觀あるは、誠に亦偶然に非ざるを見るなり。

送人還京

匹馬西來天外歸。　揚鞭只共鳥爭飛。
送君九月交河北。　雪裏題詩淚滿衣。

此れは仍ほ西域に于役したる時の作、上文「雙袖龍鍾淚不乾」とほぼ同一の境に居るものなり。邊土より して京地に還る、その人の歸心實に矢の如きものあるべし、第二句形容し得て工、その句法の奇なるは、亦前の「辭家見月兩回圓」と一般。此れ想ふに嘉州が最も得意の筆法なるべし。三四は歸人を欣羨して自ら淹滯を傷む、雪裏に詩を題す、料るに淚痕墨瀋と共に化して氷と爲らんと欲するなり。九月を點明するものは順筆別時を點明して、兼ねて邊境風物の異を擧げ、以てその堪ふべからざるを側寫したり。

赴北庭度隴思家

西向輪臺萬里餘。　也知鄉信日應疎。
隴山鸚鵡能言語。　爲報家人數寄書。

唐書地理志に云はく、北庭の大都護府に輪臺縣あり、縣に靜塞軍ありと、此れ蓋し唐の西域の北陬、岑が參佐戎幕の始め、乃ちこの地に在り、この篇その啓程第一の作、已に家信の容易に得べからざるを逆料す、

則ち後來、河邊苜蓿の烽に驚き、馬上龍鍾の淚を灑ぐ、玉關西望、平沙萬里、投宿の所なきを慨し、故人の書を惜むを恨む、總べてこの時の意中に在るなり。所謂、北庭大都護府は隴右道に屬す、隴右は隴山の右なり、山に多く鸚鵡を產す、今隴を度り家を思ふに由りて、鸚鵡の能言に托し、遙かに家人に傳語せんと欲す、四顧惶惶として信を寄するに人なく、纔かにこの鳥に賴つて聊か自ら排遣しその情殊に可憐なり。初め北庭の行あるに當つてや、岑、留別の一篇あり。

聞說輪臺路。　年年見雪飛。　春風曾不到。　漢使亦來稀。
白草通疎勒。　青山過武威。　勤王敢道遠。　私向夢中歸。

而してその初めて隴山を過ぐる、宇文判官なるもの〻西域より至るに逢ふ、因つて詩を呈して言はく、

一驛過一驛。　驛騎如星流。　暮及隴山頭。
隴水不可聽。　嗚咽令人愁。　平明發咸陽。　霧露凝貂裘。
西來誰家子。　自道新封侯。　沙塵浥馬汗。　路上無停留。
都護猶未到。　來時在西州。　前月發安西。　終朝風不休。
馬走碎石中。　四蹄皆血流。　十日過沙墩。　一身無所求。
也知塞垣苦。　豈爲妻子謀。　萬里奉王事。　先照關城樓。
溪流與松風。　靜夜相騰騰。　山口月欲出。　山塞多雖憂。
與子且携手。　不愁前路脩。　別家賴歸夢。

行程の苦なる此の如く、輪臺の地亦荒僻遼遠、春風到らず漢使來稀れなるの處、更に證するに輪臺卽事

の詩、

輪臺風物異。　地是古單于。　三月無青草。　千家盡白榆。
蕃書文字別。　胡俗語音殊。　愁見流沙北。　天西海一隅。

を以てすれば、その地髣髴として想ひ見るべし、而して岑のこの行、道路の艱難を辭せず、乃ち勤王を以て自ら許す所以のものは、封常清、現にこの地に屯駐し、己れ行いてその幕客たらんと欲するが故なり、輪臺の歌、封大夫が出師西征を送るの篇、之を證して餘あり。

輪臺城頭夜吹角。　輪臺城北旄頭落。　羽書昨夜過渠黎。
單于已在金山西。　戍樓西望烟塵黑。　漢兵屯在輪臺北。
上將擁旄西出征。　平明吹笛大軍行。　四邊伐鼓雪海邊。
三軍大呼陰山動。　虜塞兵氣連雲屯。　戰場白骨纏草根。
劍河風急雪片闊。　沙口石凍馬蹄脫。　亞相勤王甘苦辛。
誓將報主靜邊塵。　古來青史誰不見。　今見功名勝古人。

この篇明らかに身は輪臺に在りて封の出征を送る、「戍樓西望」の語に視て岑の封幕に依りしものなること復た疑ふべきなし、封の出征、時に大いに利を得たり、是に於て上文の凱歌あり、此よりして後封が蹤跡、未だ之を詳かにする能はざるも、岑の留りて輪臺に淹滯し、久しく鄉國に歸ることを得ざりしは上來已に之を辨ず、その首秋輪臺の作、

異域陰山外。　孤城雪海邊。　秋來惟有雁。　夏盡不聞蟬。

雨拂氈壇濕。　風搖毳幕雅。

輪臺萬里地。　無事歷三年。

及び獨孤漸と別を道ひ、兼て嚴八侍御に呈するの詩、

輪臺客舍春草滿。　潁陽歸客腸堪斷。
萬磧千山夢魂懶。　憐君白面一書生。
王侯貴門脚不到。　數畝山田身自耕。
及至辭家憶鄉信。　無事垂鞭信馬蹄。
奉使三年獨未歸。　邊頭詞客舊來稀。
到家不覺換春衣。　高齋清晝卷羅幕。
中酒朝眠日色高。　彈棋夜半燈花落。
滿堂凜凜五月寒。　桂林蒲萄新吐蔓。
軍中置酒夜擊鼓。　錦筵紅燭月未午。
葉河蕃王能漢語。　知爾園林壓渭濱。
魚龍川北盤溪雨。　烏鼠山西洮水雲。
別後新詩滿人口。　自憐棄置天西頭。

數詩を合觀して淹滯の久しきを證す、則ち發して詩と爲るもの、時に孤劍凄涼の歎あるは固より免れざる所、唐仲言その封幕に依れるに因つて、當に獨行邊塞の語を爲すべからずとし、漫に疑をその間に挿むは深く考へざるものと謂はざるを得ず、嚴八侍御は嚴武なり、獨孤に因つて寄聲し、召還のために斡旋の勞を執らんことを望む、後來終に闕下に歸つて一時肅宗の左右省に出入するを得たるものは、其れ復た嚴武が奬引の力に由れる歟。

酒泉太守席上醉後作

酒泉太守能劍舞。　高堂置酒夜擊鼓。
胡笳一曲斷人腸。　坐客相看淚如雨。

胡笳を聞いて斷腸す、定めて泛辭に非ず、是れ必ず安史の胡塵中原を汨沒せし後の作、想ふに太守の劍舞は必ず腥羶の橫行を慨し、激昂悲壯、獻欷自ら堪へざるものありしならん、故に坐客相看て淚下りて雨の如くなるなり。唐仲言の解に云ふ、邊郡は武を尙ぶ、故に太守の聲樂、一に軍中の笳曲の如く、悽絶にして游客の思を興すに足る、是を以て相對して揮淚するのみと、太だ膏膏として白蠟を嚼むが如し、能く詩意を得たるものに非ざるなり。岑、又酒泉の韓太守に贈る詩あり。

太守有能政。　遙聞如古人。
酒泉西望玉關道。　千山萬磧皆白草。
憶君倏忽令人老。　倖錢盡供客。　家計常清貧。
然れば則ち本篇はその輪臺よりして京に還るの日、偶〻酒泉を過ぎて太守の劍舞慷慨なるに感じ、席上に

就いて篇を成せしものなり、又、右の短古に依りてこの太守の姓韓なるを知ることを得。

按ずるに李太白が憶舊游の篇に云ふ、「袖長管催欲輕舉。漢中太守醉起舞。手持錦袍覆我身。我醉橫眠枕其股。」と、飄逸豪爽の態、固より本篇とその科を異にす、然れども唐時の太守、一に何ぞよく舞ふものの多きや。

送劉判官赴磧西

火山五月行人少。　看君馬去疾如鳥。
都使行營太白西。　角聲一動胡天曉。

此れ岑が武威に在る時の作、武威は涼州に在り、河西道に屬す、想ふに亦輪臺より歸京の途次、劉判官が磧西に赴くに逢ひ、此れを賦して之に送れるならん。火山は火州吐魯番の地、五月清暑の候にして、その山適〻火を以て名づく、是れ行人の少なる所以、而して劉が馬は即ち去つて飛ぶが如し、年輕勇往の概、功名に急なるに出づと雖も、亦大いに嘉奬すべし、然れどもその都使の行營に到り、曉天の胡角の一たび動くを聞かば、其れ或は竟に聽くに耐へざるものあらん、努力せよとなり。太白、從來山名として之を解す、蕉中和尚その地理に協はざるを以て、之を太白星なりと云ふ、蓋し太白金星は常に西方に見ゆ、猶ほ斗の北に在るがごとし、「太白西」と云ふものは、正にその西極の陲たるを形す、蕉師の說從ふべきなり。

山房春事

梁園日暮亂飛鴉。　極目蕭條三兩家。
庭樹不知人去盡。　春來還發舊時花。

この詩は嘉州河南大梁に在つて作るもの、岑の梁に在るはその年月を詳かにせざるも、李太白が集中に、鳴皐歌送岑徵君」の詩、題下に自註して、時に梁園三尺の雪、清泠池に在つて作ると云ひ、詩中にも又、「君不行兮何待。若返顧之黃鶴。掃梁園之群英。振大雅於東洛」とあり、太白がこの詩は開元の末年に成る、然れば遙かに西域の行を爲す以前に在り。詩格も亦磧中の諸作と頗る然として別手の如し。三四寂寥の光景を寫して饒く幽致を見る、梁園舊日の風流、頓然として消盡す、之を讀んで殊に惻焉たるを覺ゆ。唐仲言曰はく、庭樹の二句、本と嘉州の絶調、後人の優孟を爲す者、之を家騮として戸攘し、遂に此を以て套語と爲すは惜むべきなりと、この說極めて好し、讀者兒孫の殖多なるがために反つてその祖を遺るゝことを爲す勿れ。

寄孫山人

儲光羲

新林二月孤舟還。
水滿清江花滿山。
借問故園隱君子。
時時來往住人間。

二月新林、花紅に水碧、極めて人間の景致、興復た淺からざるを寫す、因つて言ふ故園の隱君子、時々この間に來往して許の如きの光景に留連せんや否やと、卒然として問訊す、反つて迂舒曲折の致あり、隱君子の常に閉戸して出でざるために、ほぼ譴意を帶んで之を言ふなり、或は人間の二字を深奥に求め、之を以て紅塵市井の義と爲し、山人の深隱に卽かざるを譏諷せるものなりと云ふは、甚だ曲解に屬す、從ふべからず。

贈花卿　杜甫

錦城絲管日紛紛。
半入江風半入雲。
此曲祇應天上有。
人間能得幾回聞。

憲宗の上元二年、蜀の梓州の刺史段子璋反し、東川の節度使李奐を綿州に襲ひ、僭號して梁王と稱し、黃龍と改元し、綿州を以て黃龍府と爲し百官を置く、その五月、成都の尹崔光遠、部將花敬定を率ゐて錦州を攻拔し、段子璋を斬る、杜少陵時に蜀に在り、戲れに花卿の歌を作つて云はく、

成都猛將有花卿。　學語小兒知姓名。　用如快鶻風火生。
見賊唯多身始輕。　綿州副使著拓黃。　我卿掃除卽日平。
子璋髑髏血糢糊。　手提鄰還崔大夫。　李侯重有此節度。
人道我卿絶世無。　既稱絶世無。　天子何不喚取守東都。

所謂「綿州副使著拓黃」は是れ黃龍僧號の事、崔大夫は崔光遠を謂ふ、卽ち花卿の花敬定たるは明白なり。黃山谷云ふ、花卿の塚は丹陵の東に在り。今に至つて英氣あり、その鄉に血食すと(杜詩)、又謝皐羽に花卿冢行あり、云ふ「濕雲糢糊埋秋空。雨青沙白丹陵東」と、以て山谷が言の虛ならざるを知るべく、花卿が英爽の概、獨り一時に猛將の名ありしのみに非ざるを知る。然れども少陵がこの歌、末段頗る微詞あり、故に宋の苕溪漁隱(四卷十)は云ふ、想ふに花卿當時蜀中に在つて、一時平賊の功ありと雖も、而かも驕恣不法にして、人甚だ之に苦む、故に子美之を顯言するを欲せず、但「人道我卿絶世無。既稱絶世無。天子何不喚取守東都。」と云ふのみ、語句の含蓄、蓋し知る可し矣と。之を唐書高適の傳に參するに云はく、西川の牙將花敬定勇を恃み、既に子璋を誅して大いに東蜀を掠す、天子崔光遠が軍を戢むる能はざるを怒り、乃ち之を罷め、適をして代つて成都に尹たらしむと、則ち苕溪が說の斷として臆測に非ざるを徵すべし。本篇「錦城絲管日紛紛」の一首論ずるもの頗る紛訟す、今之を折衷して以て正確の評釋を下さんと欲す、先づ花卿歌の一首とその事實とを知らざるべからず、故に首に之を錄す。

本篇題して花卿に贈ると云ふ、花卿の歌既に花敬定を指斥す、則ち本篇の花卿亦敬定を言ふものなること論なきに似たり、故に楊升庵之を解して曰はく、花卿蜀に在つて、頗る天子の禮樂を僭用す、子美此を作つ

て之を諷し、而して意言外に在り。最も詩人の旨を得たりと、然れども升庵は本と臆度杜撰を以て名あるもの、その天子の禮樂を僭用すと云ふに至つては、全く只〻この詩絲管云云より附會したるのみ、別に成文の據るべきもの非ず。胡元瑞因つて楊を斥して措大の見解に過ぎずとし、而して以爲らく此れ歌奴の名なり、その歌ふ所の曲殆んど霓裳の法曲と美を嫌ぶるに足るを以て之を賞揚して作れるなりと（詩藪）。兩說の岐異せる此の如し、後來說くもの或は楊を用ひ或は胡に從ふ、今に至つて未だ定說あるものを見ず。

平心にして論ずれば、胡が花卿を以て歌妓の名とせるも實は亦本篇に就いて臆測したるのみ、寧ろ花卿を以て花敬定なりとせるの據あるに若かず、又絲管紛紛、雲に入り風に入る、斷として一人の唱歌を稱美したるの言に非ず、然れば天子禮樂の說の甚だ大帽子に失するは論なきも、花敬定が一時の軍功に誇り、絲竹管絃の豪奢を極めたるに依り、託して以て譏諷の意を見るは、確として易ふべからざるに似たり、則ちその「此曲祇應天上有。人間能得幾回聞。」は殆んど彼の「旣稱絕世無。天子何不喚取守東都。」と同意にして更に婉曲、能く分寸を諛諷の間に存す、所謂言ふ者罪なく聞く者戒むるに足るものなり。乾隆の詩醇、一語の花敬定に及ぶなく、只評して曰はく、絕句は獨り風神を主とす、此れは則ち音韻銘然たりと、暗に胡說を是とするものに似たり。浦二田云ふ、若し贈妓の詩と爲せば、反つて膚淺にして味少きを覺ゆと（讀杜心解）、余は則ちこの說に袒す。

仇兆鰲謂ふ、この詩風華流麗にして頓挫抑揚、太白・少伯と雖も以て之に過ぐるなし、その首句に題を點して下り、承轉を作す、乃ち絕句の正法なりと、此れ專ら作法を分疏す、詩義に關なしと雖も亦知らざるべからず、故に沈歸愚も此を以て一氣に相生ず、絕句の正格なりと謂へり。郭茂倩の樂府詩集を按ずるに、唐

の樂部、水調歌の後六疊入破の第二曲、卽ちこの詩を用ふ、然れば則ちこの篇音節の美、亦太白が淸平、少伯が奉帝、王之渙が黃河遠上等の篇に讓らず、盛んに當時に艷唱されしを見るなり。

西淸詩話に云ふ、鄭虔の妻據疾を患ふ、少陵曰はく、吾が詩以て之を擦すべし、虔曰はく云何、曰はく「夜闌更秉燭。相對如夢寐。」虔の妻之を誦するも未だ愈えず。少陵又曰はく、更に吾が詩の「子璋髑髏血糢糊。手提�還崔大夫」を誦せよ、之を誦するに果して愈えたりと。此れこの二句の精采人を射るが如きものあるより附會したる小說のみ、胡苕溪却つて又、之を辨じて云はく、世に傳ふ杜子美が詩以て據を愈すべしと。此れ未だ必ずしも然らず、蓋しその辭意典雅なれば、之を讀む者、脫然として沈痾の體を去るを覺えざるのみ、好事のもの乃ちこの論を爲す殊に笑ふべし、若し據、誠に鬼ありて、杜詩の佳なるを知らば、是れ賢鬼なり、豈に復た屑屑として食を嘔泄の間に求めんや。子美が他詩に云ふ、「三年猶據疾。一鬼不銷亡。隔日搜脂髓。增寒抱雪霜。」（寄高使君岑長史）と、則ちこの疾や、杜陵正に自ら免るゝ能はずと。小說家の言は那んぞ呶々の辨を待たん、苕溪その妄を破らんと欲して、反つて甚だ固陋に淪せり、然れども杜句治據の說は吾が國古來亦相傳へて然りとす、紫姬が源語の如き、亦この事を引用したり、故に順筆此に附見す。

重贈鄭鍊

鄭子將行罷使臣。
囊無一物獻尊親。

江山路遠羈離日。　裘馬誰爲感激人。

杜の絶句は概ね佶屈にして聱牙、別に一格を成す、この種は卽ちその本色。「錦城絲管」及び李龜年に贈るの詩、所謂「正是江南好風景。落花時節又逢君」の二篇の如きは一部の草堂集中、殆んど絶無にして僅有なるものなり。本篇專ら鄭の清廉なるを美し、因つて以てその貧を悲しむ、鄭嘗て使臣と爲りて清操を抱き、肯へて一錢を苟且することなし、故にその官を罷めて將に行かんとするや、囊橐蕭然として親に獻ずべきものなし、則ち江山路遠し、その路費の以て還鄉省親するに足るものあるや否やも亦甚だ覺束なきなり、嗚呼裘馬輕肥の人、誰れか是れ感激してその貧を濟ふものぞや。悠悠たる行路義を好むもの甚だ寡し、この中自ら寄慨を見る。

杜の集中「贈別鄭鍊赴襄陽」の五律一章あり。

戎馬交馳際。　柴門老病身。　把君詩過日。　念此別驚神。
地濶峨眉晚。　天高峴首春。　爲於耆舊內。　試覓姓龐人。

此れ蓋し同時の作、この篇、惜別の情を敍して鄭の人と爲りに及ばず、重贈の作ある所以なり。

奉和嚴國公軍城早秋

秋風嫋嫋動高旌。　玉帳分弓射虜營。

已收滴博雲間戍。　欲奪蓬婆雪外城。

肅宗の上元元年、少陵蜀の成都に在りて、草堂を浣花溪に營み之に居る、その翌年、段子璋の亂あり、既にして朝廷劍南及び東西川の節度使を合して一と爲し、嚴武をして成都に尹たらしむ、少陵の蜀に在る、實に嚴武の資助を仰ぐこと多きに至れり。寶應元年七月、嚴武召還の命を受け、京師に還る、少陵送つて綿州に到り、徐知道の亂興るに逢ひ轉じて梓州に行く、この歲玄・肅の二帝並に崩ず、代宗の廣德元年、仍ほ梓州に在り、十月吐蕃の兵盡く河隴の地を取り、進んで奉天武功に寇す、京師震駭、代宗出でゝ陝州に幸す、その十二月、駕を長安に廻すを得たるも、吐蕃の勢餘倍、熾にして又蜀の邊境を犯し、西山の松・維・保三城を陷る、時に高適西川に在りて之を救ふこと能はず、登樓の詩に所謂「北極朝廷終不改。西山寇盜莫相侵」正にその時なり。廣德二年の春、少陵梓州より閬州に之く、而して嚴武は鄭國公黃門侍郎を以て再び蜀の節度使を領す、少陵之を聞いて大いに喜び春晩遂に成都の草堂に歸り、此より專ら嚴武が幕中に在り、六月武乃ち爲に京師に表請し、少陵を以て節度參謀・檢校工部員外郎と爲し、緋魚袋を賜ふ。少陵の遭際、前後困頓流離を極めて、而して此れ獨り稍〻失意の艱を免れ、少しく愁眉を開けるの時とす。武の再び鎭蜀の命あるは、前年吐蕃の入寇未だ勦靜に歸せざるが故なり、是に於て武徐ろに計畫する所あり、先づ部將崔肝をして兵を西山に統べしめ、進んで吐蕃の七萬衆を破り當狗城を拔き地を拓くこと數百里、十月に及んで直ちに吐蕃の鹽井城を陷れ、師全捷を奏す、嚴に軍城早秋の作ありて、杜因つて之を和す、嚴の原作に所謂「更催飛將追驕虜。莫遣沙場匹馬還。」は正に崔肝が統兵の事を指す、則ち嚴武が出師の始めは史に明文なしと雖も、

實にこの年七月に在るなり、杜が擢用せられて節度の參謀となるのその上月に在ること既に前述の如くなれば、この詩乃ち地圖を按じて敵勢を審し、ために多少の作戰方略を獻ずるが如きものあるは誠に當に然かるべし。嚴の原作于麟已に選して本集に入る、故に玆に全載せず、下文を參照すべし。

嫋嫋たる秋風、金天肅殺、正に好し師を出し將を命ずるの時なり、故に高旌の下、玉帳の前、弓矢を分ち方略を受けて以て敵虜を殲滅するの計を爲さしむ、滴博は嶺の名、地西山に接す、一に的博に作くる、蓬婆は又、蒲婆に作る、吐蕃大雪山の異稱たり、故に雪外城と云ふ。當時吐蕃の佔據せるは西山を以て根本の地とす、故に西山滴博の戍壘にして一たび之を我に收復すべくんば、その餘は勢破竹の如く、建瓴直下して徑ちに敵の巢窟たる雪山以外の諸城を奪ふことを得べしと謂ふなり。王應麟の困學紀聞に云はく、的博嶺は維州に在り、蓬婆山は柘州に在りと（卷十八）、維州は卽ち松・維・保三城の一、唐書韋皐傳を按ずるに、西山の靈關を出で、峨和・通鄨・定廉の諸城を破り、的博嶺を踰えて、遂に維州を圍むとあり、又、元和郡縣志に、柘州城は四面險阻にして固守に易く、安戎江・蓬婆水あり、州南三十里に在り、大雪山一名蓬婆山、柘縣の西北一百里に在りと見ゆ、並に以て王が考核の精なるを徵すべし、又、通鑑玄宗の開元二十六年、王昱劍南の兵を率ゐて安戎を攻め、兵を蒲婆嶺下に頓し、劍南道の資糧を運して以て之を守る、胡三省註して曰はく、蒲婆は新唐書蓬婆に作る、その地雪山の外に在りと、この註亦以て杜が雪外城の三字を釋すべきなり。明の高季迪（啓）が涼州詞、

蓬婆城下淨無花。　慘慘黃雲漠漠沙。
白頭都護亦思家。　卷葉誰將蕃曲奏。

蓋し亦少陵が本篇に本づく、浦起龍云はく本篇は嚴詩に比して更に一層を透せり、蓋し滴博の戍は我が陷れらるゝの邊たり、蓬婆の城は彼が險に據るの處たり、雲間以てその高を狀し、雪外以てその遠を形す、嚴は云ふ、匹馬をして還らしむる莫れと、是れ彼の來攻の寇を殄さんと欲す、尙ほ我が地に就いて言へり、杜は云ふ、蓬婆の城を奪はんと欲すと、是れ益〻我が深入の氣を壯にす、直ちに彼が地に向つて去るなり云云。本篇の意を疏剔して復た遺憾なきに似たり。

杜の嚴幕に依る、稍〻窮途の慟を免ると雖も、卑官局束、時に復た煩累に耐へず、その遣悶嚴公に奉呈するの詩に「束縛酬知己。蹉跎效小忠。」の語あるに至る、嚴の杜に於ける雅と世誼に屬するを以て、待つに優遇を以てすと雖も、その醉に憑つて武の牀に踞坐し、武を瞠視して罵るに、嚴挺之乃ちこの兒ありと云ふに至つては、厭棄を受けざる殆ど難しと謂ふべし。史に稱す、少陵性褊躁にして器度なく、恩を恃んで放恣なりと、嗚呼絶世の詩人、亦其れ免れざる所ある耶。明歲永泰元年夏四月嚴武卒す、是に於て頓に依傍を失し、飄零牢落、飢餓に淪して以て歿す、今に於て尙ほ餘痛あり焉。

解悶

一辭故國十經秋。　每見秋瓜憶故丘。
今日南湖采薇蕨。　何人爲覓鄭瓜州。

杜の解悶絶句凡そ十二首、夔州に在りて作る、みな意の隨ふ所に由つて自ら韻語を爲す、一格に拘せず、而して懷人の作その大半を占む、所謂、

復憶襄陽孟浩然。　清詩句句盡堪傳。　卽今耆舊無新語。
漫釣槎頭縮項鯿。

の孟浩然を懷ひ、

不見高人王右丞。　藍田丘壑蔓寒藤。　最傳秀句寰區滿。
未絶風流相國能。

の王維兄弟を懷ふが如きの類、因つて以て同時の交游、薛據・孟雲卿の輩に及ぶ、後人懷人絶句の一體實に此に剏す、此れ學者の知らざるべからざるものなり。本篇は原集末句に自註して今鄭祕監審と曰ふ、卽ち鄭審を懷ふの作なり。

故國は長安なり、漢の時秦の故侯、瓜を長安の青門に種う、青門は杜陵に近し、所謂故丘なり、一本「丘」を「侯」に作る、亦通ずべし。大意は言ふ、身帝京を辭して十たび秋風を見る、秋瓜の正に熟するに及ぶ每に、未だ曾て杜陵の故田を憶はずんばあらず、然れども旋歸に由なきなり、故に今日南湖に流落して獨り薇蕨を采る、何人か我が爲に鄭瓜州を覓めて共にこの情を話する者ぞや。蓋し鄭審の宅は夔州の南湖に在り、而して自註已に今の鄭祕監と云ふ、是れその人現に祕監の官に居り、長安に奉仕してその舊宅に在らざるなり、故に「何人爲覓」といふのみ。又已に秋瓜を以て起興す、秋瓜の字偶〻瓜州と音便あり、因つて更に傍觀するに草部の薇蕨を以てし、相映帶して一首を組成す、此等みな隨事點逗の妙、是を以て黃生は評して曰はく、

連環勾搭、亦絶句用筆の法、大家時に一たび之を爲す耳と。

按ずるに少陵夔府の詠懷鄭監李尙書に寄する一百韻の詩に、「東郡時題壁。南湖日扣舷。」の句あり、是れ夔に南湖あるの證、又秋日寄二題鄭監湖上亭一の五律三篇あり、是れ鄭審が宅の湖上に在るの證、而して瓜州と云ふものは諸說紛紛徒らに滋端を增す、朱鶴齡以爲らく、張禮が、夔府の城南に游ぶ記に、滉水を濟り神禾原を涉り、西香積寺の下原を望んで瓜洲村を過ぐとあり。又、許渾が集に淮南相公の重ねて瓜洲の別業に游ぶに和する詩ありて、その自注に瓜洲村は鄭莊と相近しと見えたり。鄭莊とは卽ち少陵の密友にして三絶の稱ある鄭廣文虔が郊居の名にして、鄭審は實に虔の姪たり、故に審を稱して鄭瓜州と道ふならんと、この說極めて精當なるが如し、然れども杜の詩は瓜州に作る、原と瓜洲に非ず、故に之に從はんと欲するときは、州を以て洲の誤記なりと定めざるべからざるの不便あり。

劉須谿に至つては、この詩瓜に由つて鄭審を憶ふ、金陵に瓜州あるが爲に鄭瓜州と號すと謂ふ、然れども審の金陵に官せしこと、毫も影響なし、是れ恐らくは地名に因つて漫然臆度したる辰翁が杜撰ならんのみ。錢謙益は瓜州を改めて袁州とし、鄭審大曆中袁州の刺史たりと云ふ、是れ大いに異說なり。姜西溟(英辰)その湛園札記に於て之を駁して云はく、瓜秋の相映帶する故に因つて、秋瓜を以て起興す、正に文情游戲天機爛漫の處、若し袁州に改めば則ち上の秋瓜と何か涉らんと、此れ最も理あり。要するに鄭瓜州の鄭審たるは杜の自註に依つて已に明白なり、何ぞ必ずしも洲の州たると瓜の袁たるとを問はんや、附會穿鑿俱に一掃し去つて可なり。

この詩を解するもの亦言人人異、唐仲言の瓜得べからずして故人の瓜を以て號と爲す者を憶ふ、亦無聊の

詞なりと云ふが如きは、尤も笑ふべし、詩明らかに「每見秋瓜憶故丘」と云ふ、何の得べからざるかこれあらんや。浦起龍は云ふ、故邱を憶ひ、因つて而して鄭監を憶ふ、鄭監が長安の居る所、故丘と相近ければなりと、此れ亦悠謬の論、何となれば、鄭が長安の居の所謂、故丘と相近きや否やは到底知るべからざればなり。蕉中師は云ふ、鄭審嘗て少陵と同じく蜀に在つて而してこの時瓜州に官たり、故邱は卽ち曩時二人が游蹤の在る所、因つて言ふ、前きには時物に感じ鄉心を動かすこと有りと雖も、南湖の上猶ほ故人と俱にすることを得たり、今は獨り薇を湖上に采る、無聊倍〻甚だし、何ぞ覓めて之に遇ふことを得ん耶云云、その說大旨は通ずべきも、劉辰翁が妄言を主として立說す、竟に也た是れ一箇の杜撰禪のみ。

書堂飲既夜復邀李尙書下馬月下賦

湖月林風相共清。　殘樽下馬復同傾。
久拚野鶴如雙鬢。　遮莫隣雞下五更。

本集この詩の前、李尙書之芳、鄭祕監審と共に胡侍御が書堂に宴するの詩あり。

江湖春欲暮。　牆宇日猶微。　閭閻春籍滿。　輕輕花絮飛。
翰林名有素。　墨客興無違。　今夜文星動。　吾儕醉不歸。

閒懷痛飲興復盡きず、則ち更にその歸馬を要して以て殘樽を傾く、故に題して「書堂飲既夜復邀李尙書下馬月下賦」と云ふなり。風月既に淸く、酒興未だ闌ならず、飲は垂白に當り、達旦何ぞ妨げん、その鍾情自ら道ふ、氣味宛然たり。野鶴如雙鬢、倒裝句法を用ひて以て下句に對す、「拚」は甘んじて自ら斷送するの義、遮莫は舊註以て唐時の方言なりとす、唐の鄭棨が傳信記に、劉朝霞が玄宗の溫泉に幸する詞を載す、曰はく、

直攖得盤古髓。　掐得女媧甄。　遮莫倆古時千帝。
豈如我今日三郎。

此れ卽ち俳諧の體、俗語なりと云ふは洵に然り、二字之を詩中に用ひたるは杜がこの作の外、猶ほ同時の岑參に「別君祇有相思夢。遮莫千山與萬山。」(原頭送范侍御)の句あり、此れより前きは並に未だ經見せず。

杜の七絕は概ねみな古拙にして、率然に下筆し、深く意を留めず、讀む者只〻その老興頹唐中、猶ほ槎枒として元氣の撑拄するものあるを玩味すれば則ち足れり、若し此を以て太伯・少伯と並論するときは、已に比倫の宜しきを失したるを覺ゆ、況や刻意に之を學んで鉤棘自ら喜ぶ楊鐵崖の如きをや、好奇の過、一に以て此に至る、野狐精たらざるは殆ど稀なり。

塞下曲二首

玉帛朝回望帝鄉。　烏孫歸去不稱王。　常建

天涯靜處無征戰。兵氣銷爲日月光。

天子專ら武功を重んじて四夷省服す。是れ固より慶すべきの事、この詩云ふ、烏孫の蕃王玉帛を捧げて來朝し、回るに及んで猶ほ帝闕の巍巍乎たるを望み、中心悅服して肯へて自ら王と稱せず、乃ちその僭號を去る、是を以て邊疆寧謐し氛祲全く消す、邊境の荒遠始めて日月の照臨を瞻ることを得たり。豈に盛ならずや。是れ卽ち武功の正面なり。

其二

北海陰風動地來。明君祠上望龍堆。
髑髏盡是長城卒。日暮沙場飛作灰。

武功をしてこの盛を致す所以に溯れば、則ち之を用兵に歸せざる能はず、試みに北海の陰風地を動かすの處、明君祠上に登つて、一たび龍堆を望め、彼の纍々たる髑髏の沙場に暴露し、散じて飛灰と爲るものは卽ち我が長城の戍卒に非ずや。是を武功の反面とす。

正面の盛此の如く、反面の慘實に亦此の如し、この慘を以て僅かにこの盛を買ひ得たりとせば、則ち今日の事、慶すべき耶、抑〻弔すべき耶。人君たるもの武を以て四邊に耀せんと欲す、深く鑒みざるべからずと

言ふなり。塞下曲は本は是れ樂府題、一意を以て二首を串下してその詞互に相表裏す。則ち婉にして多諷なる所以なり。

明君は王昭君なり、晉の石崇、昭君の祠を作り、昭は文帝の諱に觸るゝを以て改めて明君と曰ふ、爾來文人之を襲用して改めざるものあり、猶ほ晉時亦避諱を以て春秋を陽秋と改め、趙宋の世に及んで轉た之を襲用し韻語陽秋の著あるがごとし、龍堆は沙漠の地、已に習見す。

送宇文六

花映垂楊漢水清。微風林裏一枝輕。
卽今江北還如此。愁殺江南離別情。

花枝風に裊んで、垂楊と相披拂し、以て漢水の清澈に映ず、江北の好景此の如きものあり、君乃ち掉首して南す、江南の景致更に佳なるものあるに坐すべしと雖も、寧ろこの眼前の風光に辜負するに忍びんや、故に「愁殺江南離別情」と云ふ。絶句極めて淺近の處に着筆して餘情嫋嫋盡きざるものなり。この種是なり。

三日尋李九莊

の策略、主將の用ふる所と爲らず、師も亦大いに敗る、故に怏怏として辭し歸る（上卷百九十二頁參照）本篇とは自らその時を異にす、集中又薊中作一首あり。

策馬自沙漠。　長驅登塞垣。
一到征戰處。　每愁胡虜翻。
惆悵孫吳事。　歸來獨閉門。

此れその詞に依りて約略「長劍歸來」と同時の作なるを知る、唐反つて此れを引いて以てその說を證す、本篇の言ふ所と自ら相矛盾するものあるを奈何せん。故に予は斷じて大典の說に從ふ。

除夜作

旅館寒燈獨不眠。　客心何事轉凄然。
故鄕今夜思千里。　霜鬢明朝又一年。

客中歲除の情況を曲盡して復た遺蘊なし、後來此に似たるもの甚だ多くして、終にその妙を奪ふこと能はず、これ絕唱たる所以なり、三四對語にして流走す、尤も自在を推す、宋宗元曰はく、直ちに己れの鄕を思ふことを說かずして、推して故鄕の我を思ふに到る、此れ靡詰（王維）が九月九日の詩と同じく、是れ一層を勸進するの法なりと、その說自ら好し。

塞上聞吹笛

雪淨胡天牧馬還。　月明羌笛戍樓閒。
借問梅花何處落。　風吹一夜滿關山。

雪月梅花相映じて分外の光輝を發す、邊地に梅なくして笛中偶〻この曲を奏す、故にその何處に落つるを借問す、而かもこの聲已に關山に滿つ、則ち往くとして落梅に非ざるは無きに似たり、是に於て雪月の二字翛翛活動呼應みな靈なり。「風吹一夜滿關山」意象殊に空濶、豈に靑蓮の獨り美を前に專にせるを許さんや。

別董大

十里黃雲白日曛。　北風吹雁雪紛紛。
莫愁前路無知己。　天下誰人不識君。

黃雲暗澹として、一天雪ならんと欲す、北風雁を吹いて、人、離群を歎ず、此れは是れ別時の愁況、故に

雨歇楊林東渡頭。
故人家在桃花岸。

永和三日盪輕舟。
直到門前溪水流。

楊林渡口、雨歇み風和ぐ、適〻蘭亭修禊の辰に値ふ、風日の美、亦永和の上巳に讓らず、是に於て李九が莊を尋ねんと欲す、莊は元と一帶桃花の前岸に在り、その門前まで溪水直ちに流る、正に好し輕舟を盪かして行くなり。直直說き來りて逸致橫生す、天然の妙品と稱するに足る。明の張以寧「重峰送別の作」、

君家重峰下。　我家門前水。　我家大溪頭。　君家門前流。

太白の體に仿ふと雖も、その意匠實に亦常建がこの詩より運化して出づ、張の詩一時に膾炙し、仿ふもの甚だ多し、李楨が詩、

君家吟溪北。　我家郡北西。　君家梁間燕。　我家梁間棲。

工ならざるに非ず、頗る自然の致を缺く、周忱が詩、

我家白沙渚。　君家桐江頭。　我家門前水。　亦向桐江流。

張が語を倒用す、李に比して稍〻勝れるを覺ゆ。

九曲詞　高適

鐵騎橫行鐵嶺頭。　西看邏逤取封侯。

青海只今將飲馬。　黃河不用更防秋。

老將哥舒翰、吐蕃を破り聲威一時に震ふ、是れ西鄙人の「北斗七星高。哥舒笑帶刀」の謠ある所以、終に黃河の源頭數十里の地を收め、その地を以て隴西郡を置く、是れ玄宗天寶中の事、高達夫時に往いてその幕客と爲る、因つてこの詩を作る。九曲詞と云ふものは黃河の流、古へ九曲すと稱す、故に名づくるなり。邏逤は吐蕃の都城の名、唐書薛仁貴の傳に、吐蕃入寇す、因つて仁貴を以て羅娑道の總管と稱すと見えたり、娑・逤同音の字、蓋しこの地を謂ふなり、今哥舒の鐵騎、鐵嶺の頭に橫行して胡敵肯へて支ふるものなし、則ち直ちに邏逤の城を看、之を攻破して以て功を成す、故に封侯を取ると曰ふ。青海は所謂、北庭大都護府の西七百里の地に在り、西北の極陲に屬す、この地にして今已に將に我が馬を飲まさんとす、則ち黃河の一帶復た患ふることを用ひず、故に防秋の戍を置くに肅なきなり。匈奴の兵は每に秋高く馬肥るの候を以て出づ、是を以て黃河備胡の兵之を防秋と曰ふ、史に據るに是より先き開元十五年、吐蕃の邊害を爲すを以て、隴右河西關中の兵を臨洮に集め、朔方の兵を會州に集めて以て防秋す。その冬初に及んで寇なくして罷むことあり、今青海以內都べて我が有と爲るを以て達夫蓋し暗にその事を用ひて以て哥舒の功を頌揚したるなり。

唐汝詢曰はく、此れ立功の難きを歎ず、言ふは我れ衆を率ゐて橫行し將に吐蕃を窺うて以て封爵を取らんとするも、河海晏然として著鞭すべき處なし、邊境の處なきに非ず、主將之を蔽へる耳と、この解甚だ牽强、從ふべからず。顧ふに達夫が「自薊北歸」の詩、「誰憐不得意。長劍獨歸來。」此れ卽ちこの後その獻ずる所

の策略、主將の用ふる所と爲らず、師も亦大いに敗る、故に怏怏として辭し歸る（上巻百九十二頁參照）本篇とは自らその時を異にす、集中又薊中作一首あり。

策馬自沙漠。　長驅登塞垣。
一到征戰處。　每愁胡虜翻。
惆悵孫吳事。　歸來獨閉門。

此れその詞に依りて約略「長劍歸來」と同時の作なるを知る、唐反つて此れを引いて以てその說を證す、本篇の言ふ所と自ら相矛盾するものあるを奈何せん。故に予は斷じて大典の說に從ふ。

邊城何蕭條。　白日黃雲昏。
豈無安邊書。　諸將已承恩。

除夜作

旅館寒燈獨不眠。　客心何事轉凄然。
故鄕今夜思千里。　霜鬢明朝又一年。

客中歲除の情況を曲盡して復た遺蘊なし、後來此に似たるもの甚だ多くして、終にその妙を奪ふこと能はず、これ絕唱たる所以なり、三四對語にして流走す、尤も自在を推す、宋宗元曰はく、直ちに已れの鄕を思ふことを說かずして、推して故鄕の我を思ふに到る、此れ摩詰（王維）が九月九日の詩と同じく、是れ一層を勸進するの法なりと、その說自ら好し。

塞上聞吹笛

雪淨胡天牧馬還。　月明羌笛戍樓閒。
借問梅花何處落。　風吹一夜滿關山。

雪月梅花相映じて分外の光輝を發す、邊地に梅なくして笛中偶〻この曲を奏す、故にその何處に落つるを借問す、而かもこの聲已に關山に滿つ、則ち往くとして落梅に非ざるは無きに似たり、是に於て雪月の二字栩栩活動呼應みな靈なり。「風吹一夜滿關山」意象殊に空濶、豈に靑蓮の獨り美を前に專にせるを許さんや。

別董大

十里黃雲白日曛。　北風吹雁雪紛紛。
莫愁前路無知己。　天下誰人不識君。

黃雲暗澹として、一天雪ならんと欲す、北風雁を吹いて、人、離群を歎ず、此れは是れ別時の愁況、故に

「莫愁」を以て之を慰む、君の才名已に天下に馳す、往く所として知己にあらざるは無し、何ぞ爾我の睽離を恨みんや。高樣以爲らく、董大は卽ち當時の琴工董庭蘭なりと、果して然らばこの詩前半廻風落雁、暗に興象を琴曲に取る、而して紛紛たる飛雪、亦猶ほ張平子（衡）が四愁、霜雪を以て小人の君子を殘害するに比したるが如し、則ち後半の意兼ねて房琯が罷相の一邊に映ず、或は庭蘭將に房琯をその配處に問はんと欲するときの作なる歟。

房琯の肅宗に相たるや、群小、その玄宗の老臣たるの故を以て之を忌憚し、百方その瑕垢を求む、琯、夙に音律を好み、董庭蘭を延いて上客とす、是に於てか乃ち依倚關節招權收賄の說あり、琯竟にその中傷を受けて罷めらる。詩人杜少陵は曾て房琯と布衣の交を爲せしものなり、琯の罷相に及んで、力めてその細事を以て大臣を罷免するの非なるを疏言し、大いに肅宗の意を拂ひ、將に嚴に從うて究治せられんとす、張鎬の救解を以て僅かに免るゝことを得たり。當時少陵に謝狀一篇あり、云はく、

臣甫智識淺昧にして、向きに論ずる所の事、激訐に涉近し、聖旨に違忤す、旣に有司に下され、具に已に舉劾す、甘じて自棄に從ひ、戮に就くを幸とせり。今日已の時、中書侍郎平章事張鎬、口勅を奉宣し、宜しく推問を放さるべしとあり、臣が愚戇を知り、臣が萬死を赦し、曲成恩造して再び骸骨を賜ふ、臣甫、誠頑誠蔽、死罪死罪。臣は身を賊庭に陷れらるゝを以て、憤惋して疾を成し、實に間道より龍顏に謁することを得たり、猾逆未だ除かず、愁痛過ぎ難し、猥に衰職に厠す、すこしく裨補あらんことを願ふ。竊かに房琯を見るに、宰相の子を以て、少うして自ら樹立し、晩に醇儒と爲り、大臣の體あり、時論、琯に必ず位公輔に至り、元元を康濟せんことを許す、陛下果して委ねるに樞密を以てし、衆望甚だ允なり。琯の

深く主憂を念ふを觀れば、義色に形はる、況や畫一保泰は、素と蓄積する所なるのみ。而して琯が性簡に失し、酷だ鼓琴を嗜む、董庭蘭は今の琴工なり、琯の門下に游ぶこと日あり、貧病の老、依倚して非を爲す、琯の人情を愛惜せる、一に玷汙に至れり。臣自ら度量せず、その功名未だ泯れずして志氣挫衂せるを歎じ、陛下が細を棄て大を錄せられんことを覬望す、死を冒して稱述せる所以、如何にせん思慮始めて竟りて、再三に闕けるを。陛下貸すに仁慈を以てし、その懇到を憐み、狂狷の過を責せず、復た網羅の急を解し給ふ、是れ古への直臣を深容し、來者を勸勉するの意なり、天下幸甚、天下幸甚、豈に小臣が獨り全軀を蒙り列に就いて罪を待つ而已ならんや。先憚後喜の至に任ふることなく、謹んで閤門に詣り、狀を進め奉謝して以て聞し、謹んで進む。至德二載六月一日、宣議郎右拾遺臣杜甫狀進す。

按ずるに當時房琯の罪案已に具す、故に少陵のこの狀敢へて再びその枉を顯言せず、然れども「貧病之老依倚爲非」の語、言外に於て關節納賄の事、斷として一貧病の老琴工、董庭蘭輩が能く爲す所にあらざるを辨じ、又琯人情を愛惜し一に玷汙に至ると云ふに至つて、琯の庭蘭に於ける、交契の深きを逆料するに足るべし。錢謙益の箋、朱長文が琴史を引き、細かに房・董二人一段の情節を參訂す、高適が本篇「黃雲白日、雁雪紛紛」の外傳として看るに足る、因つて左に全錄す。

朱長文が琴史に云ふ、董庭蘭は隴西の人なり、唐史に其の房琯の昵する所と爲り、數〻賕謝を通じ、有司の爲めに劾治せられ、而して房公此に由つて罷め去ると謂ふ、杜子美も亦云ふ、庭蘭琯の門下に游ぶ日あり、貧病の老、依倚して非を爲し、琯は人情を愛惜し、一に玷汙に至ると、而して薛易簡は稱す、庭蘭王侯に事へず、林壑に散髮するもの六十載、貌古に心遠く、意閒に體和す、絃を撫し聲を韻すれば以て鬼神

を泣かすべし、天寶中給事中房琯に好古の君子なり、庭蘭義を聞いて來る、千里を遠しとせず。余此の說に因つて、亦以て房公の過を觀てその仁を知るべきなり。房公が給事中たるに當つて庭蘭已に其の門下に出づ、後に相と爲る、豈に能く遽かに棄てんや。又賕謝の事は吾れ疑ふらくは琯を譖する者之を爲して、而して庭蘭朽老す、豈に能く辨釋せん、竟に惡名を被れるならん耳。房公廣漢に貶せらるゝとき、庭蘭之に詣る、公慍色なし、唐人詩あり云はく、

七條絃上五音寒。　此樂求知自古難。　惟有開元房太尉。
始終留得董庭蘭。

云云（以上琴史の原文）。按ずるに薛易簡は琴を以て翰林に待詔す、天寶年中に在り、子美同時の人なり、其の言必ず信、伯原の琴史、千載にして下、庭蘭のためにこの惡名を雪ぎ、その厚誣を白す、獨り唐史の繆を正せるのみならず、兼ねて以て子美の闕を補ふべきなり（以上錢謙益の文）。

衆口鑠金すと雖も、庭蘭が技天下實に之を識らざるは無し、高適のこの贈ある庭蘭亦以て大いにその意を强うすべきなり、予已に之を杜の謝狀と錢箋とに考へて、その起興の數語の漫然寫景語に非ざるを悉す、而して君子動もすれば瓜李の嫌に居り、一時の譁惟を致し、百喙白することなきもの、今古殆どその轍を一にす、尤も痛恨すべし、吁嗟此れ豈に獨り一琴工のみならんや。

送杜十四之江南

孟浩然

荆吳相接水爲鄉。　君去春江正淼茫。
日暮孤舟何處泊。　天涯一望斷人腸。

二十八字止〻是れ水鄉淼茫の四字、知るべしその臨岐の情緒、亦唯〻淼茫として際なく、人をして黯然神愴ましからしむのみ。荆は古の楚地、而して孟浩然は卽ち楚人なり、他が江南に之くに由つて、偶〻自家越鄉の感に觸る、哀音の更に深く情思の更に遠き所以なり。

寄韓鵬

李頎

爲政心閑物自閑。　朝看飛鳥暮飛還。
寄書河上神明宰。　羨爾城頭姑射山。

この心をして外物に纏擾せられず、則ち往くとして閑曠自在ならざるはなし、第二句箇中自得の妙、殆ど陶淵明の「白雲出岫。倦鳥歸林」（歸去來賦）と同科、此を以て政を爲す、所謂無爲にして治まるもの。姑射山は河東臨汾縣に在り、莊子に云ふ、姑射の山に神人あり焉と（逍遙遊）。韓鵬乃ちその地に宰として、心閑物閑、轉た神人の域に臻る、故に書を寄せて以て羨慕の意を表すと云爾。

九日

崔國輔

江邊楓落菊花黃。
九日陶家雖載酒。

少長登高一望鄉。
三年楚客已霑裳。

崔國輔王珙の近親なるに坐して竟陵の司馬に貶せらる、竟陵は楚の地、故に楚客を以て自況す、落楓黃菊、少長となく登高して以て望鄉の念を增さゞるは無し。この時に當り縱然陶家九日の例に依り、白衣の酒を送り來りて我に現送するあるも、左遷三年、霑裳點點の淚、曾て或は乾くことなし、何を以てか能く懷抱を開いて閒に杯酌に親しむを得んや。その詞緩緩なるに似て、その意は實に哀迫す。

題長安主人壁

張謂

世人結交須黃金。
縱令然諾暫相許。

黃金不多交不深。
終是悠悠行路心。

馬足車塵邊災附熱黃金の多少を以て結交の深淺を計するに至つて、頹風惡俗、實に問ふべからず、冷眼看出す、刺骨ならざるは無し。此れ少陵が貧交行と相待つて、並に今日の世態の爲に棒頭の一喝を與ふるものに似たり、噫悠悠たる行路の心なる哉。

送人使河源

故人行役向邊州。
長路關山何日盡。

匹馬今朝不少留。
滿堂絲竹爲君愁。

相傳ふ河源は崑崙に出づと、その實荒遠悠謬、致詰すべからず、乃ち匹馬千里、去つてその地に使す、歸期の知るべからざるは論なし、故に「長路關山何日盡」と曰ふ。絲竹は本と以て娛樂に供す、然れども行役の遠きを念へば、安んぞ反つて愁を生ぜざるを得ん。張謂、人となり簡澹、詩も亦坦率にして却つて回味多し、盛唐に在つては別に一家を爲すもの、二詩の如き、亦何ぞ廢すべけんや。

涼州詞

王之渙

黃河遠上白雲間。
羌笛何須怨楊柳。

一片孤城萬仞山。
春光不度玉門關。